平成二六年度・変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業

伊那谷のコト八日行事

文化庁

下伊那郡阿南町早稲田

下伊那郡喬木村富田下区

飯田市龍江（尾科）

平成二六年度・変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業

伊那谷のコト八日行事

天龍村大河内　神送りの出発

喬木村（上富田）　コト念仏の数珠回し

飯田市千代（芋平）　コトの神送りのミコシ

平成二七年 コト念仏（大将荒神）

宿・お堂タイプ

A 宿（当番宅）で数珠回し
B 集会所などで数珠回し
C 宿やお堂で念仏
D 集会所などで念仏

集落巡回タイプ

E 巡回して数珠回し
F 巡回して念仏

※写真は現状、分類はかつてのやり方であり、異なるものもある。
※開催日は現状、（ ）内はかつての開催日

飯田市龍江大屋敷・コト念仏【かつてC、現在D】

箕輪町北小河内中村・お念仏【かつてA、現在B】

飯田市上久堅蛇沼・コト念仏【かつてC、現在D】

喬木村富田（上富田）・コト念仏【A】

飯田市千代野池・大将荒神【かつてE、現在B】

喬木村富田（下富田）コト念仏【A、今回はB】

飯田市三穂立石（上・西区）・コト念仏【E】

■飯田市上久堅下平・コト念仏【F】

■飯田市三穂立石（下・東区）・コト念仏【E】

■飯田市上久堅中宮・コト念仏【F】

■阿智村春日七久里・チャンキラ講【E、現在は簡略化】

■飯田市上久堅原平・コト念仏【F】

■飯田市上久堅風張・上平、コト念仏【F】

■飯田市上久堅越久保・コト念仏【F】

■飯田市龍江尾科・コト念仏【かつてF、現在D】

平成二七年

コトの神送り

◎リレー方式の神送り

飯田市の千代、龍江、上久堅地区には神之峰を巡り、東回りと西回りのリレー方式によるコトの神送りがある。

受け継がれるのは、疫神などが乗り移った笹竹である

疫神や神座の準備（芋平）

▼ 東回り・二月八日

集落境まで行列する（芋平）

▼ 東回り・二月八日

笹竹などを置いたら、後を振り向かずに帰る

▼ 東回り・二月八日

次々と笹竹などを受け渡していく（蛇沼）

▼ 東回り・二月八日

（平栗）

中継所では、ミコシをくぐってのぞいて大騒ぎ、風邪をひかないという

▼ 東回り・二月八日

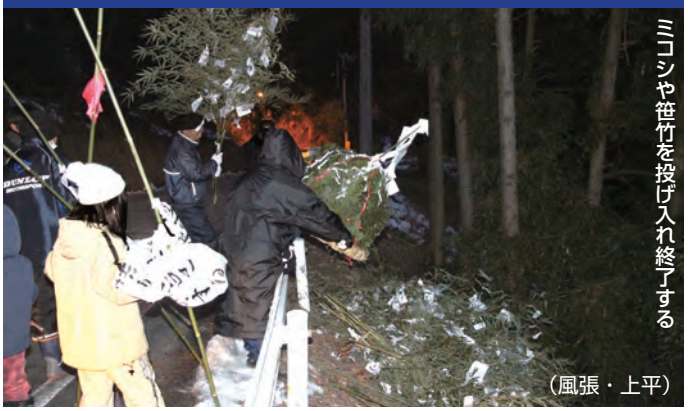
堂平の入口で一泊する

▼ 東回り・二月九日

（堂平）

行列が来るまでに辻に笹竹を立てておく

▼ 東回り・二月九日



（風張・上平）

ミコシや笹竹を投げ入れ終了する

二日目の夕方、行列は「北の原」に到着

▼ 西回り・二月八日

田力の出発風景、運ぶ笹竹を分けあう

▼ 西回り・二月八日

三番目の集落では、各人五本ずつ運んだ（大屋敷）

▼ 西回り・二月九日

二日目の早朝、ジタジタ峠を登る（尾科）

▼ 西回り・二月九日

東回りと合流、順番に笹竹などを投げ入れて、念仏を唱える

二日目の夕方「北の原」に到着（下平）

◎集落ごとのコトの神送り

二月十日

喬木村富田・旗（笹竹と紙旗）

三月八日（旧暦二月八日）

喬木村氏乗・笹竹と藁の輪オカグラ

旧暦二月八日

喬木村大和知・笹竹と藁の輪ミコシ

二月第一日曜日頃（二月八日・十二月八日）

飯田市上村上町（藁ヅト・幣束ほか）

二月第二日曜日（不定期）

阿南町早稲田（藁の輪ミコシ、人形）

旧暦三月三日

天龍村神原大河内（藁の輪ミコシ）

コトの神送りの道具

笹竹の材料となるハチク、旗や幣束にはスズタケが多用

短冊と旗

墨書の文字が多く見られるが、古くは版画が多かった

旗作り（喬木村下冨田・木ノ下昭司氏宅にて）

笹竹

短冊を取付けた笹竹

「御神馬」と書かれた版画

「御神馬」の版木

家族の爪、ボンノクボの毛、洗米を包み、笹竹にしばりつける。

様々な旗・喬木村冨田

喬木村大和知

喬木村大和知

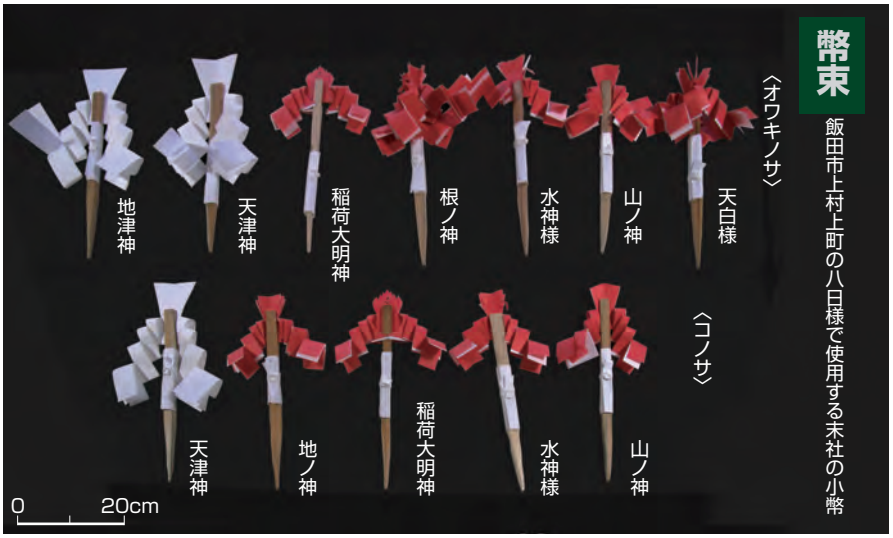
喬木村冨田

喬木村氏乗

飯田市上久堅（越久保）

幣束

飯田市上村上町の八日様で使用する末社の小幣



天龍村大河内のコシの幣束（二四本で一巡り）

藁の道具

神座とその他の道具

〈藁の輪〉

喬木村氏乗のオカグラ（一人で担ぐ）

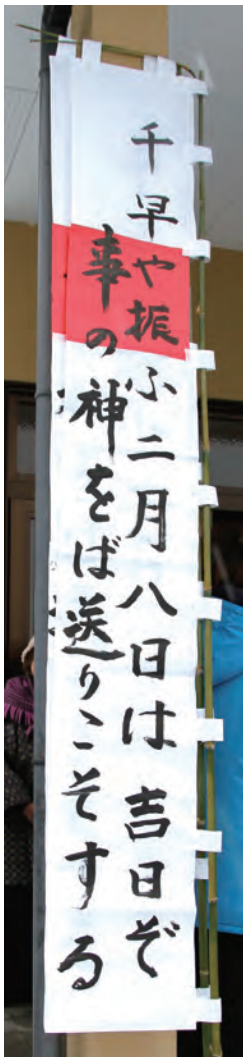
喬木村大和知のミコシ（二人で担ぐ）

飯田市千代（芋平）で作るミコシ、藁の輪に桧の葉枝の屋根、幣束が立ち、中には二体の藁人形が入っている

ミコシの内の人形、オトコガミ（右）とオンナガミ（左）

〈藁ヅト〉〈旗〉

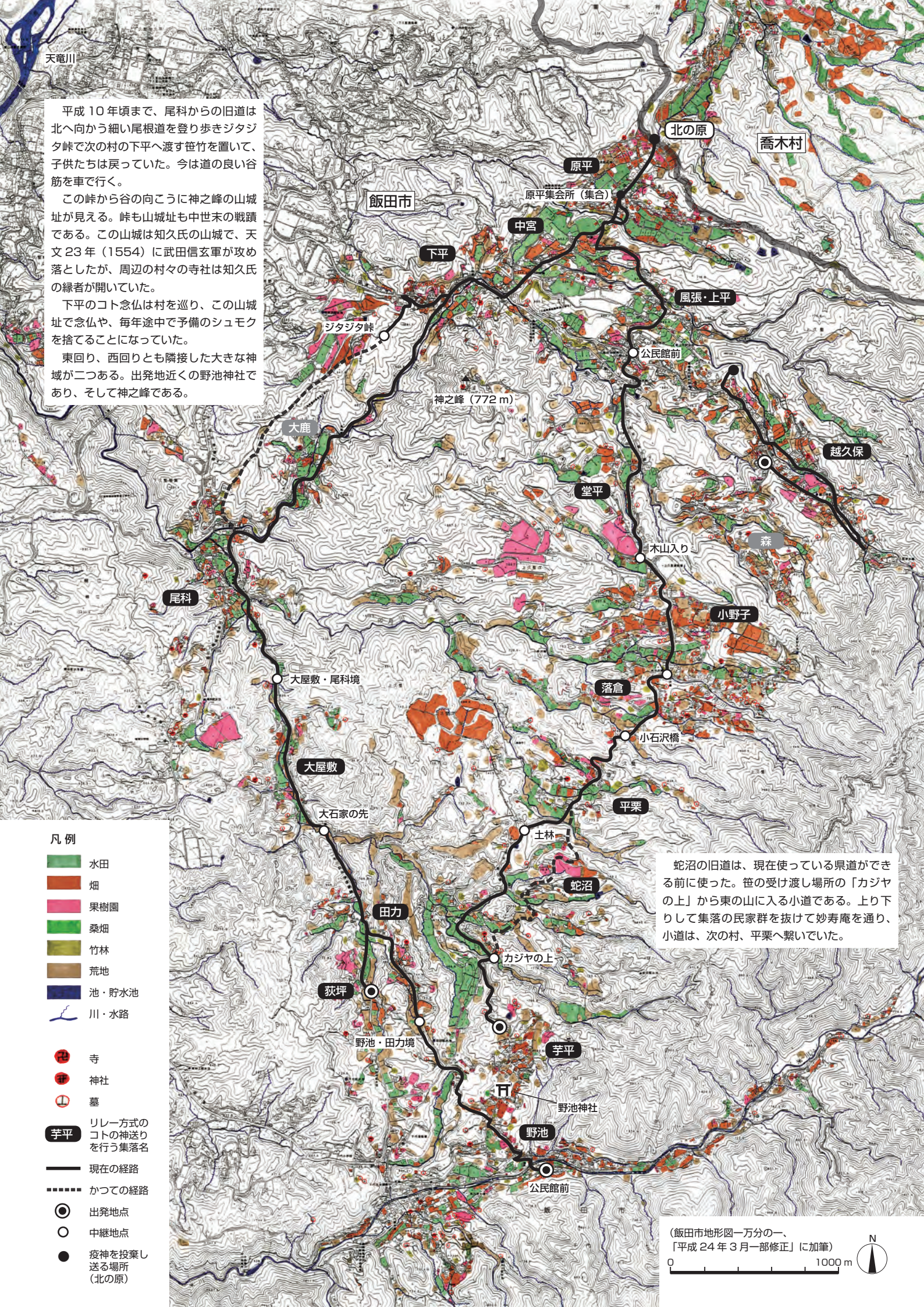
飯田市上村上町のオワキと旗、オワキとは竹竿に取付けた藁ヅトで、七本のオワキノサ（小幣束・右頁下参照）が刺さる



飯田市千代（芋平）の紙の旗、毎年二本作り、幣束とともに行列の先頭と後方をゆく

阿南町早稲田の（人形）神送り、ミコシを担ぐのは厄年の住民で、中央床には藁の輪が据えられている

※写真は調査時に参考として作って頂いた十センチ前後にものであるが、実際は小戸名の人形で高さ四〇センチほどある。



平成 10 年頃まで、尾科からの旧道は北へ向かう細い尾根道を登り歩きジタジタ峠で次の村の下平へ渡す笹竹を置いて、子供たちは戻っていた。今は道の良い谷筋を車で行く。

この峠から谷の向こうに神之峰の山城址が見える。峠も山城址も中世末の戦蹟である。この山城は知久氏の山城で、天文 23 年（1554）に武田信玄軍が攻め落としたが、周辺の村々の寺社は知久氏の縁者が開いていた。

下平のコト念仏は村を巡り、この山城址で念仏や、毎年途中で予備のシュモクを捨てることになっていた。

東回り、西回りとも隣接した大きな神域が二つある。出発地近くの野池神社であり、そして神之峰である。

蛇沼の旧道は、現在使っている県道ができる前に使った。笹の受け渡し場所の「カジヤの上」から東の山に入る小道である。上り下りして集落の民家群を抜けて妙寿庵を通り、小道は、次の村、平栗へ繋いでいた。

はじめに

二月八日と十二月八日は一年の節目として全国的に年中行事が行われている。関東地方周辺から東北地方では、この両日を「コト八日」と呼び、一つ目小僧などの妖怪が訪れるといわれ、これを避けるために目数の多いカゴやザルなどを庭や門口に掲げ、静かに過ごす日とされているところが多い。そして針仕事も休み、針供養を行う。

長野県南部の天竜川上流域に位置する伊那谷では、北部を中心に針供養や個人の家での行事がみられ、「オコト」「コトハジメ」「針供養」などと呼ばれるほか、一部で「コト八日」とも呼んでいる。

そして中部以南では、百万遍念仏を行いお札を配る「コト念仏」、集団で疫神（疫病をはやらせる神）を祓い、家や村の境から外に送り出す「コトの神送り」の行事が多く見られる。古くは二月八日と十二月八日の二回行われていたところが多いが、現在は二月八日だけになっている。

本調査報告書では、このような伊那谷の「コト八日」の伝承を鑑みて、行事の総称を「コトの神行事」とし、集団で行う「コトの神送り」「コト念仏」に注目して報告する。

そこには少子化や過疎化などの地域が抱える問題点も伺えるが、伊那谷に暮らす人々の、毎年変わらぬ行事があり、数珠を回したり行列を組んで、疫神である「コトの神」を境の外に送り出している。

東と西の神送りのコースの村々（右図）

毎年、天竜川の東岸にある台地の村々を巡る、東回りと西回りの神送りがある。村々には渓谷に沿って細い棚田が組まれていて、丘の上に畑があるので、各コースは坂を上がったり下がったりして歩いてゆく。

小野子のA家の耕地は約五反で水田が三反、畑が二反あるが、これはこの地方では所有面積が多い方で、他の平均的な農家の所有耕地は、かなり少ないであろう。従って大半の村人のかつての主力となる生業は、広大な伊那山地での薪炭稼ぎや林業であり、それを失った現在は他の職業や出稼ぎなどによる各種兼業農家である。それでもこの台地の活用は細かく丁寧であり、林檎や柿の果樹園が開かれ、水田、畑がある。かつての養蚕のための桑畑，竹林など，多面的に活用している。平成二四年（二〇一二）の姿である。

神送りのコース別に見ると集落は次のとおりの戸数、人数であった。各集落の歩く距離は平均一・一キロ弱で分担のコースを歩くが、延長一八キロの順路に一六集落があり、合計五六七戸、一六五三人余が、現在居住する。高齢者が多いが各集落別の戸数は次項以降に記録がある。

【東回り】八集落、戸数二五一戸余、約六四六人、全コース約八キロ巡行。千代地区から上久堅地区を渡る。起伏のある台地は沢を境に村ごとになっていて、コースは坂道が多い。

【西回り】八集落、戸数三一六戸余、約一〇〇七人、全コース約一〇キロ巡行。千代地区から龍江、上久堅地区を渡る。西回りの村々は渓谷沿いに集落と道が二日の後半まであるが、村々に近接する耕地はきわめて少ない。

【集計外の集落】

なおこの神送りの巡行コース沿いにある集落でもこの行事をかつて行っていたが、現在はやっていない集落もある。西回りの大鹿集落は戸数一八戸余、約五一人であるが、参加していない。同様に東回りにある森集落二〇戸、約五七人も参加していないので以上の集計リストから除いている。このほか単独で活気ある子供を中心としたコト念仏と送り神をしているのは、東の台地の上にある越久保で戸数六五戸余、約一九七人であるがこれも集計から除いている。

●目次

一章・伊那谷の「コトの神行事」の概要 …… 13

一、二月八日と十二月八日に行う行事 …… 14
(一) 伊那谷について
(二) 二月八日と十二月八日の行事
(三) 伊那谷の「コトの神行事」の特徴
二、コト念仏について …… 18
(一) コト念仏とコトの神送りの分類
(二) コト念仏のやり方
(三) コト念仏の唱名について
(四) 現在のコト念仏
三、コトの神送りについて …… 21
(一) コトの神送りのやり方
(二) コトの神送り・コトの神の依代
(三) コトの神送りのモノツクリ・藁と紙と竹と笹など
(四) コトの神送りの行列について
(五) コトの神送りの現状・行事の変貌と要因

二章・伊那谷北部から中部、箕輪町・駒ヶ根市・喬木村の「コトの神行事」 …… 27

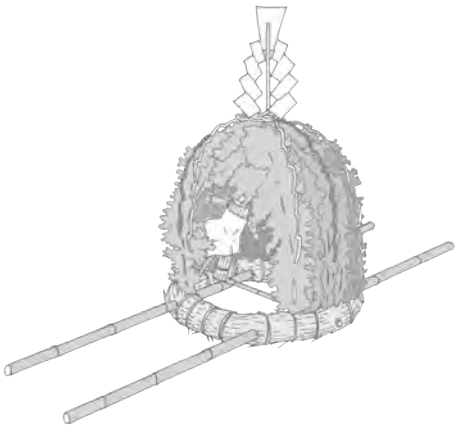
一、北小河内・中村、お念仏 【(上伊那郡) 箕輪町東箕輪北小河内中村】 …… 28
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年は二月一日 (日)》
二、大久保、子供のコウトウネンブツ 【駒ヶ根市東伊那大久保】 …… 31
三、富田上区 (上富田)、コト念仏 【(下伊那郡) 喬木村富田】 …… 33
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月九日 (月)》
四、富田下区 (下富田)、コト念仏 【(下伊那郡) 喬木村富田】 …… 36
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月九日 (月)》
五、富田、コトの神送り 【(下伊那郡) 喬木村富田】 …… 37
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月十日 (火)》
六、氏乗、コトの送り 【(下伊那郡) 喬木村氏乗】 …… 40
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年三月八日 (日)》

飯田市上久堅・芋平、コトの神送りの行列

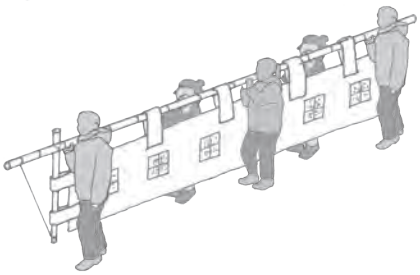
七、大和知、コト念仏、コト送り【(下伊那郡)喬木村大和知】……43
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年三月二七日(旧暦二月八日)》
八、大島、念仏・コト送り【(下伊那郡)喬木村大島】……46
(一)事業の概要　(二)大島集落について

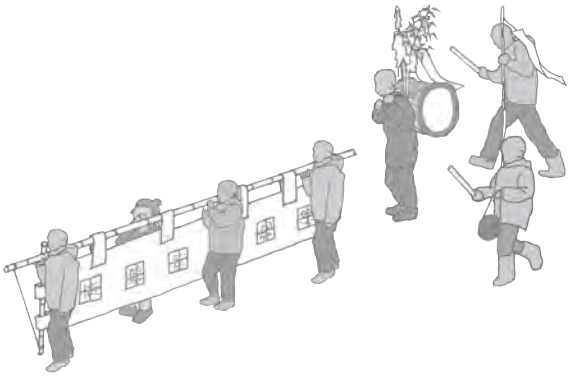
三章・伊那谷中部、飯田市のコト念仏と東回りと西回りのリレー式コトの神送り……49

一、東回りと西回りのリレー式のコトの神送り……50
二、〈東回り〉芋平、大将荒神・コトの神送り【飯田市千代(芋平)】……51
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
三、〈東回り〉蛇沼、コトの神送り・コト念仏【飯田市上久堅(蛇沼)】……55
(一)行事の概要と今昔　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
四、〈東回り〉平栗、コトの神送り【飯田市上久堅(平栗)】……58
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
五、〈東回り〉落倉、コトの神送り【飯田市上久堅(落倉)】……60
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
六、〈東回り〉小野子、コトの神(風の神送り)【飯田市上久堅(小野子)】……62
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
七、〈東回り〉堂平、神送り【飯田市上久堅(堂平)】……63
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月九日九日(月)》
八、〈東回り〉風張・上平、子供のコト念仏・送り神【飯田市上久堅(風張・上平)】……65
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月七日(土)、九日(月)》
九、〈西回り〉野池、子供の大将荒神・コトの神送り【飯田市千代(野池)】……69
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月七日(土)、八日(日)》
十、〈西回り〉田力、コトの神送り【飯田市千代(田力)】……72
(一)行事の変化と現状参考文献　(二)実施状況《平成二七年二月八日(日)》
十一、〈西回り〉荻坪、コトの神送り【飯田市千代(荻坪)】……74
(一)実施状況《平成二七年二月七日(土)》
十二、〈西回り〉大屋敷、コト念仏・コトの神送り【飯田市龍江(大屋敷)】……75
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年七日(土)、八日(日)》
十三、〈西回り〉尾科、コト念仏・風の神【飯田市龍江(尾科)】……78
(一)行事の概要　(二)実施状況《平成二七年二月七日(土)、九日(月)》



飯田市上久堅・芋平、
コトの神送りの行列のミコシ





飯田市上久堅・越久保、送り神の行列

十四、（西回り）下平、コトオ念仏・風の神送り 【飯田市上久堅（下平）】 …… 81
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（月）》
十五、（合流）中宮、子供のコト念仏・送り神 【飯田市上久堅（中宮）】 …… 86
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（月）》
十六、（合流）原平、子供のコト念仏・送り神 【飯田市上久堅（原平）】 …… 88
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（月）》

四章・四章・伊那谷中部から南部、飯田市・阿南町・阿智村・天龍村・根羽村の「コトの神行事」 …… 93

一、越久保、子供たちによるコト念仏・送り神 【飯田市上久堅（越久保）】 …… 94
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月七日（土）、八日（日）》
二、立石上（西区）、子供のコト念仏 【飯田市立石（上・西区）】 …… 100
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月十一日（水）》
三、立石下（東区）、子供のコト念仏 【飯田市立石（下・東区）】 …… 103
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月十一日（水）》
四、上村上町のコトの神送り 【飯田市上村上町】 …… 105
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年二月八日（日）》
五、早稲田、（人形）神送り 【（下伊那郡）阿南町早稲田】 …… 109
(一) 行事の概要 (二) 実施状況《平成二七年一月十日（土）準備、十一日（日）》
六、七久里、子供のチャンキラ講 【（下伊那郡）阿智村春日七久里】 …… 113
(一) 行事の概要 (二) 平成二七年二月八日のチャンキラ講
七、大河内、神送り 【（下伊那郡）天龍村神原大河内】 …… 116
(一) 行事の概要 (二) 午前中の準備 (三) 午後の行事の日程
八、根羽村、コト神送り 【（下伊那郡）根羽村（小戸名、小栃、折山など）】 …… 121
(一) 行事の概要 (二) 各地区の「コト神送り」

五章・伊那谷の「コトの神行事」の地図と一覧表、文献資料 …… 125

〔図1〕伊那谷の「コトの神行事」の一覧地図 …… 126
〔表1〕伊那谷の「コトの神行事」の一覧表 …… 128
一、参考文献 …… 134

飯田市上村上町・越久保、コトの神送りの行列

一章・伊那谷の「コトの神行事」の概要

一、二月八日と十二月八日に行う行事

(一) 伊那谷について

諏訪湖を源とする天竜川の流域は、伊那谷に入ると平坦な段丘が南北に広がり、「伊那盆地」「伊奈平」と呼ばれている。これは、天竜川の水流による河岸段丘の形成だけではなく、断層運動による段丘の形成、支流による扇状地の形成、本流による浸食作用などが重なりできた地形であるという。そして伊那盆地は、天竜川を挟んで東側を竜東、西側を竜西と呼んでいる。

伊那谷は、現在、長野県を四地方に分けた南信地方に属し、上伊那地域（旧上伊那郡）と飯伊（はんい）地域（旧下伊那郡域）である(注1)。

伊那谷の市町村と人口をみると、明治二三年（一八九〇）には上伊那郡域と下伊那郡域の合計は、二町七一村、二六万七千人余り(注2)であったが、現在（二〇一五年）は、旧上伊那郡域、旧下伊那郡域合計で三市六町十三村、十四万四千余人である(注3)。調査地である伊那谷は、この百余年で大きく変動してきたところである。

(二) 二月八日と十二月八日の行事

①「コトの神行事」の概要

全国にみられる二月八日と十二月八日の行事は、両日にほぼ同じ内容の行事が行われるところと、二月もしくは十二月のいずれかに行事が集中するところがある。両日に行事が行われるところでは、二月八日をコトハジメ、十二月八日をコトオサメ（コトジマイ）と呼ぶところが多いが、その逆もある。コトを一年間の行事とすると二月八日が始めとなり、正月を中心とした祭祀期間をコトとすると十二月八日が始めになる(注4)。

コトとは歳時の折り目の意味で、折り目には多くの神祭が行われるので、コトは祭事（神事）の意味を含むという。また、関東地方を中心に、コトの日にはコトノカミと呼ぶ恐ろしい神（一つ目小僧、風邪の神、厄神など）が訪れるといわれ(注5)、人々は物忌する日として、ふだんの仕事にたずさわらずに家の中にこもり、コトノカミの災いを防ごうとする。軒先や庭に目籠や笊をかけておいたり、節分と同じようにイワシの頭やヒイラギを戸口にさしたり、グミの木や南蛮（唐辛子）など、刺激臭の出るものを燃やすのである。

さらに村中で疫神（えきじん）を境の外に送り出すところもある。藁人形や神輿を仕立てて鉦や太鼓を打ち鳴らし、村境や海辺に送ってゆく行事が知られている(注6)。この二月八日と十二月八日の行事は東北地方から九州北部まで広く分布し「コト八日」と呼ばれている。

伊那谷の場合、「コトの神」と呼ぶ疫神を祓ったり送り出す行事が多く見られ、「コト八日」と呼ぶところは少なかった(注7)。この報告では二月八日と十二月八日の「コトの神」に関する行事を「コトの神行事」と総称する。

②事例の抽出

この報告書で取上げる「コトの神行事」は、実地の聞取り・行事の観察を中心に、市町村史などの文献・記録をも参考にして補った。総数は七四箇所であるが、現在何らかの形で「コトの神行事」を行っているのは三一箇所で、廃れたところを含め、三二箇所に足を運んで調査を行った。

総数七四箇所は、「コトの神行事」一覧地図と一覧表にまとめ、五章に掲載している。

③行事日について

伊那谷の「コトの神行事」のうち、二月と十二月の八日に行っていたのは、伊那谷の北部と飯田市の遠山郷に集中し、二五箇所ほど見られた。一方、二月のみに行うのは中西部に集中し三八箇所ほどであった。その内訳を集落ごとに見ると次のようになる。

〔二月八日と十二月八日〕

南箕輪村内の広域、伊那市の全地区、駒ヶ根市内の広域、伊豆木（飯田市の三穂地区）、程野・中郷・上町・木沢・八日市場・中立・下栗大野・下栗屋敷・小野・下栗本村・須沢・川合・畑上・大島・池口・本町新町・此田・大町・八重河内（現在の飯田市の遠山谷）、

荒谷（浪合村）、折山（根羽村）

(注1) 長野県の四地方十地域
北信地方（北信地域、長野地域）
東信地方（上小地域、佐久地域）
中信地方（大北地域、松本地域、木曽地域）
南信地方（諏訪地域、上伊那地域、飯伊地域）

(注2) 長野懸　明治四二年
長野懸人口静態統計
上伊那郡・一町（高遠町）三〇村
人口十二万三千余人、
下伊那郡・一町（飯田町）四一村
人口十四万四千余人
（国会図書館・近代デジタルライブラリー）

(注3) 伊那谷の現在の市町村
※現在の上伊那地域（旧上伊那郡域）
伊那市、駒ヶ根市、辰野町、箕輪町、飯島町、南箕輪村、宮田村、中村村
※現在の飯伊地域（旧下伊那郡域）
飯田市、松川町、高森町、阿南町、阿智村、平谷村、根羽村、下條村、売木村、天龍村、泰阜村、喬木村、豊丘村、大鹿村

(注4)「ことようか」高橋典子『日本民俗大辞典・上』一九九九年九月　吉川弘文館　六三六頁

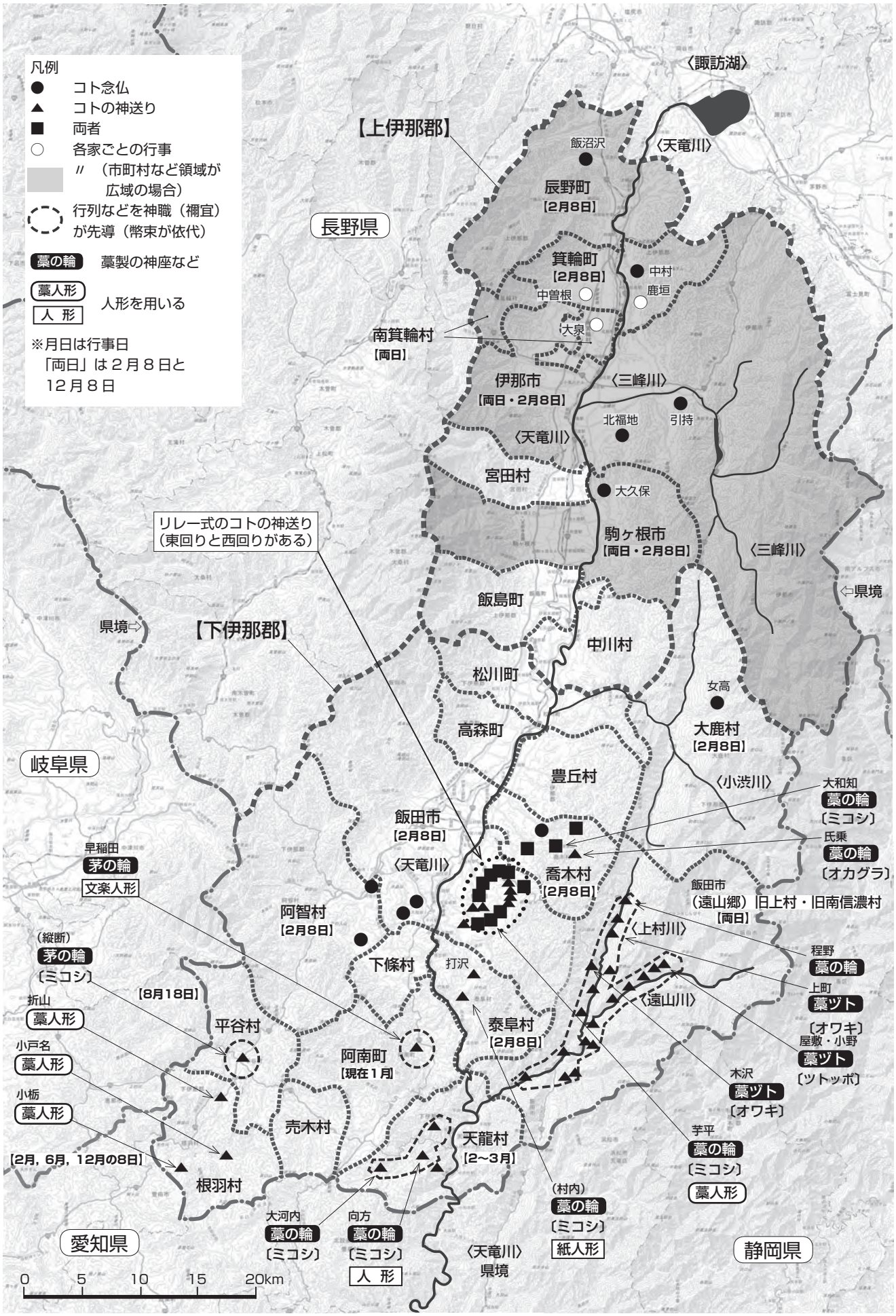
(注5)「コト」藤原修『日本民俗大辞典・上』一九九九年九月　吉川弘文館　六三三頁

(注6) 大島建彦編『コト八日』岩崎美術社一九八九年二月　二七二～二七四頁

(注7)「コト八日」と呼ぶ事例の掲載
①『上伊那誌　第五巻民俗編上』七〇〇頁
「（四）二月八日
・こと八日といい、八日餅といって餅を搗く。戸口に籾殻を盛り、その中へ胡椒を入れて焼く。（辰野町）」
②『泰阜村誌　上巻』五〇七頁
第二節・家の行事
「六、事の八日
事始めとも言い農事の始まる日とし、十二月八日の「事しまい」と対照される日である。無尽講の初講もこの日行われる。」
※詳しくは五章の参考文献参照

〔図 1〕伊那谷のコト念仏・コトの神送りの分布

（国土地理院・電子地図に加筆）



〔二月の八日〕※前後の日にちおよび旧暦、月遅れを含む

飯沼沢および広域（辰野町）、北小河内中村・中曽根および広域（箕輪町）、大泉（南箕輪村）、北福地（伊那市）、大久保（駒ヶ根市）、女高（大鹿村）、富田・氏乗・大和知・大島・加々須（喬木村）、芋平・蛇沼・平栗・落倉・小野子・堂平・風張・上平・野池・田力・荻坪・大屋敷・尾科・下平・中宮・原平・越久保・森・大鹿・米川・立石（飯田市）、七久里（阿智村）、打沢（泰阜村）、坂部（天龍村）

〔その他の日にち〕

三月三日、四日・・・・・大河内・向方（天龍村）

六月八日・・・・・・・小戸名（根羽村）

八月十八日・・・・・・平谷村（北から南へ村内縦断）

六月八日と十二月八日・小栃のコト神送り（根羽村）

二月・六月・十二月の八日・小栃の百萬遍念仏（根羽村）

疫病が流行った時・・・早稲田※現在は一月第二日曜日（阿南町）、大久那（天龍村）

（三）伊那谷の「コトの神行事」の特徴

伊那谷の「コトの神行事」には、各家ごとで行う行事と集落単位などの集団で行う行事があり、全体では次の四つの行事が見られる。

・家ごとで行われる「オコト」などと呼ばれる行事

・「コト念仏」と呼ばれる集団の行事

・「コトの神送り」と呼ぶ集団の行事

・「コト念仏」と「コトの神送り」の両者を行う場合

①家ごとに行う地域（伊那谷の北部）

伊那谷の「二月八日」と「十二月八日」の行事は、家ごとに行うところと、集落などの集団で行なうところがある。家ごとに行事を行うのは、辰野町から駒ヶ根市までの伊那谷の北部である。その中の五箇所では集団で行うコト念仏も見られた。いずれも大数珠を用いた数珠回しで二月八日に行う(注8)。

家ごとの行事は、「オコト」「コト始め」などと呼ばれ「コト八日」と呼ぶ家も見られた。（前頁、注7参照）

オコトには、庭先や木戸先で籾殻に南蛮を載せて燻したりして、疫神が家に入ってこないようにする。この日は仕事を休み静かに過ごし、また折れた針を豆腐に刺して供養するところもある。さらに多くの地区で餅が搗かれ、ボタモチ（オコトの餅、八日餅）、豆腐汁などを食べる。親子間の振舞いもあり「春のオコトにゃ子を呼んで、暮のオコトにゃ親を呼べ」などといわれている。

家ごとの行事は、同じ集落の中でもまちまちのことが多く、また、集団で行う行事に比べ、早くに伝承が途絶えているところが多いようである。

②集団で行事を行う地域（伊那谷の中部以南）

飯田市、喬木村の伊那谷中部から南では、集団で行事を行う。集団で行うのは、「コト念仏」と呼ぶ念仏行事と「コトの神送り」で、念仏だけを行うところ、神送りだけを行うところ、両者を行うところに分かれる。

伊那谷中部以南、集団で行事を行う六七箇所の事例の内、念仏と神送りの両者を行うのは十三箇所で、喬木村、飯田市に集中している。そして、その内の九箇所は、特徴的なリレー式の神送りを行う集落である。（詳細は三章参照）

③コト念仏とコトの神送りの名称について

念仏行事は、コト念仏と呼ばれることが多く、その変形と思われるコウトウネンブツ、コトオ念仏、コト始め念仏などがある。また、数珠回し、百萬遍数珠回し、ズズマワシ、唱名が訛ったといわれるナンベェナンボなどがある。八日念仏、チャンキラ講と呼ぶところもある。さらに二つの集落では数珠を回したり屋内で荒神様に向かって「大将荒神」を唱えている。（内、一集落は途絶えた）

神送り行事は、コトの神送りと呼ぶところが多いが、コトガミ送り、トウトの神、トートの神、神送り、送り神、喬木村の大島では「追い祓い」とも呼ぶ。またカゼの神、カゼ送り、カゼの神送り、外気（ガイケ・ゲイキ）の神送りと呼ぶところもみられる。昔は風邪のことを外気（がいけ）といったという。

遠山郷では八日様、八日送り、幣束のことであるサンヨリ、サンヤリ、太鼓を叩くので子供たちはデンデンともいった。チーチ

（注8）

・辰野町飯沼沢・ズズマワシ

・箕輪町北小河内中村・お念仏（数珠回し）

・伊那市富県北福地・こと念仏（数珠回し）

・伊那市高遠引持・コト始め念仏

・駒ヶ根市東伊那大久保・コウトウネンブツ（数珠回し）

ノポッポ、イチノポッポという呼び方もある。「チーチ」は魚のことで、魚の尻尾について疫神は出て行けという意味だという。カゼは「風」と書くが「風邪」の意味である。

なお、本稿では「コト」は基本的にカタカナ表記とし、文献や短冊、幟旗などに漢字で書かれているものを引用する場合は、それらに準ずるものとした。

④行事の歴史

「コトの神行事」はいつ頃から行われていたのであろうか。残されている記録は少ないが、文献資料や聞取りから年代のわかるものを抽出すると次の通りである。

【家ごとの行事の史料】

伊那市野底（旧野底村）の平沢家所蔵「当家定式嘉例書記帳」天和二年（一六八二）には十二月八日は「正月事始」二月八日は「事納」という記述がある(注9)。

【コト念仏の史料】

a. 喬木村富田の天明年間（一七八一～一七八九年）頃の『今村家・大瓜屋文書』に「二月八日の夜百万へん（遍）念佛い多し之儀ハ古来より有之」（二章参照）とある。

b. 阿智村浪合荒谷の「八日念仏数珠回し」は、文化一四年（一八一七）に始まったといわれている(注10)。

c. 野池・大将荒神の大数珠には「天保四癸巳年七月吉日」（一八三三）の銘が刻まれている。（三章参照）

d. 箕輪町北小河内中村の嘉永二年（一八四九）「御念仏数覚帳・観世音普門品経巻数覚」には、念仏が嘉永二年十一月二二日に始まり、翌年正月二〇日まで「百万遍ト七千二百遍」行ったとある。百萬遍念仏ではあるがコト念仏とは異なるようだ。（二章参照）

【コトの神送りの史料】

a. 天龍村神原坂部の『熊谷家伝記』「弘治元年乙卯年（一五五五）」に「渡り神への立願として、毎年春二月之神送りと、六月の流し祭りの御輿をかくべき旨立願しければ、四郎左衛門は段々全快する也」（四章参照）とある。

b. 喬木村富田の『大瓜屋文書』によると神送りは天明（一七八一～一七八九年）に始まり、（旧暦）二月九日に行っていたとある。

c. 大和知のコト送りに使われていた締太鼓の刳抜き胴の墨書に「安永七年（一七七八）戌二月吉日　コノ里　神主　忠平石見」とある。

d. 氏乗の『木下家文書』、文政十一年（一八二八）に「二月八日神送り定書番帳写扣（ひかえ）」とあり当時すでに行われていたことがわかる(注11)。

e. 泰阜村打沢村の晁三郎『年内日記帳』、安政五年（一八五九）に「（二月）八日「事の神送り参り候」と呼び歩く。豆入りを出し、茶を振舞い、米二合と銭百文を遣う」とある(注12)。

以上のように、コト念仏として行われるのは百萬遍念仏が多く、伊那谷では、其の発祥に天明・天保の飢饉が影響しているといわれている。野池の大数珠が作られたのは、天保の大飢饉と時期が重なる。

百萬遍念仏は、かつては一年に数回行ったり、日数をかけて行う場合もあり、箕輪町北小河内中村では、回忌や葬儀のあった家、新盆の家に数珠を持って行って念仏をあげていたという。さらに阿智村伍和（ごか）の寺尾地区に伝わる「事念仏百遍数珠回し」は年に七回行われる念仏の一つであったが、最近は「コト始め」の二月八日と秋彼岸中日の二回に限られ行われているという。今日の伊那谷では、百萬遍念仏がコト念仏として残されているところが多いようである。

さらに数珠を用いずに、子供たちが各家を巡回し念仏を唱えるやり方があるが、百遍数珠回しと同様に、飯田市美術博物館の報告書では次のように述べている。

「コト念仏は各家をまわったり、各戸が一か所に集まって念仏や回向文を唱え、あるいは数珠を回すことで、各家の荒神（三宝荒神）を鎮め、家族の無病息災を祈る行事と考えられる。そして後日おこなうコトの神送りによって、家や家族に居憑いた疫病神をムラの外に追い出すのである。」(注13)

コトの神送りは、前述a.の天龍村『熊谷家伝記』弘治元年（一五五五）の記録では具体的な内容はわからないが、b.の喬木

(注9) 上伊那誌編纂会『上伊那誌　第五巻　民俗編上』昭和五五年　七〇〇頁

(注10) 南信州新聞、平成二六年三月十二日付の記事、佐々木賢實氏。
NPO法人なみあい育遊会の二〇〇九年三月八日の広報によると、「荒谷地区に保管されている数珠箱は一八一七年（文化十四年）のものです。」と箱に紀年銘があることを述べ、始まりとしている。

(注11) 飯田市美術博物館　『上久堅の民俗』一九八頁

(注12) 下伊那教育会『下伊那史　第八巻』一二三四頁

(参考)『泰阜村誌　上巻』五〇二頁
第四編・近世、第一六章・年中行事
第一節・村の行事
「一、ことの神送り
二月八日、風の神を村から送り出す行事で、茅で編んだ尺角の神輿に赤、白の切子をつけ、その上に藁輪をのせ、幣束を立て、紙で造った人形を置き、村中が行列をつくって「ことの神送り参り候」と唱えながら村境まで送る。」

(注13) 飯田市美術博物館　『上久堅の民俗』二〇四頁

村富田は天明（年間）に始まるとあるので、やはり大飢饉の影響が考えられる。そしてe.の泰阜村打沢の文書から伺えるように幕末には恒例の行事となっていたようだ。

二、コト念仏について

（一）コト念仏とコトの神送りの分類

コト念仏とコトの神送りのやり方をもう少し具体的に見ると次のように分けられる。

【コト念仏】

①巡回型、②宿・当番型、③固定型

【コトの神送り】

①集落境に送るもの
②集落境ごとにリレー方式で送るもの
③村域を当番地区（集落）が巡回するもの
④家ごとに行うもの

中でも注目すべきは、②のリレー方式で、疫神を集落から集落へ受け渡していく、リレー式の神送り行事が飯田市内で行われていることである。これは十六の集落が関わり二コースに分かれ、二日掛かりで行われるものである。（詳細は三章参照）

（二）コト念仏のやり方（表1・伊那谷のコト念仏一覧表参照）

①巡回型

地区内を子供たちの集団が一軒ずつ巡回し、念仏を唱えるやり方である。これには大数珠を携え、各家で「南無阿弥陀仏」などを唱え数珠回しを行うものと、数珠は持たずに念仏を唱えるだけのものがある。

後者のタイプは、参加者の年齢、性別、長男に限るなどの規制もあり、最年長がリーダーとなり「頭取」と呼ばれ、巡回のコース、念仏に関する指図、お布施の分配などを決めていた。

昭和三〇年代までは、各地区共に世帯数が多く、夕方に出発し、全てを回り終えると深夜一時、二時になったり、中には一番鶏が

〔表1〕伊那谷のコト念仏一覧表

※枠内の番号は五章の一覧地図、一覧表の番号、番号欄のアミ掛けは現在も行っているもの

番号	場所	呼び方	開催日	タイプ	場所	参加者	数珠・念仏
1	辰野町飯沼沢	ズズマワシ 数珠廻し	二月八日（前後の日曜日）	巡回型	集落内	子供（現在は大人も）	数珠・念仏
2	箕輪町東箕輪北小河内中村	お念仏	二月八日（現・第一日曜日）	宿・当番型→固定型	宿の家→集会所	集落住民	数珠・念仏
7	伊那市富県北福地	コト念仏	二月八日	宿・当番型	宿の家	組中	数珠・念仏
9	伊那市高遠町上山田引持	コト始め念仏	二月八日（前後の日曜日）	（現・固定型）かつては宿？	（現・集会所）かつては宿？	集落住民	数珠・念仏・般若心経・十三仏
10	駒ヶ根市東伊那大久保	コウトウネンブツ	二月八日	宿・当番型	宿の家	主に子供	数珠・コウトウネンブツ、ナンマイダー
12	大鹿村鹿塩北入二区女高	コトハジメ（日萬遍）	二月八日から十日までお籠もり	固定型	女高の薬師堂	集落住民	十日に数珠・念仏
13	喬木村富田　上富田	コト念仏	二月九日	宿・当番型	宿の家	上富田住民	数珠・念仏
14	喬木村富田　下富田	コト念仏	二月九日	宿・当番型	宿の家（都合で集会所もあり）	下富田住民	数珠・念仏
18	喬木村大島	念仏、ナンベェナンボ	二月八日	固定型	会所（阿弥陀堂）	集落住民	数珠・念仏
19	喬木村加々須	コト念仏	二月八日	固定型	観音堂	集落住民	数珠・念仏
20	飯田市千代　芋平	大将荒神	二月七日	巡回型	集落内	子供・青年別々	大将荒神（数珠なし）
21	飯田市上久堅　蛇沼	コト念仏	二月八日	固定型	妙寿庵（観音堂）現・集会所	集落住民	数珠・念仏 現・念仏のみ
26	飯田市上久堅　風張・上平	コト念仏	二月六日（現・第一土曜日）	巡回型	風張・上平内	子供（現在は親も）	観無量寿経・念仏・回向偈
27	飯田市千代　野池	大将荒神	二月七日（現・土曜日）	巡回型	集落内	子供（現在は大人も）	数珠・大将荒神
30	飯田市龍江　大屋敷	コト念仏	二月七日	宿・当番型→固定型	宿の家→集会所	集落住民	念仏
31	飯田市龍江　尾科	コト念仏	二月七日	巡回型→固定型	集落内→集会所	集落住民	観無量寿経・念仏
32	飯田市上久堅　下平	コトオ念仏	二月六日	巡回型	集落内	子供	観無量寿経・念仏・回向偈
33	飯田市上久堅　中宮	コト念仏	二月六日	巡回型	集落内	子供	観無量寿経・念仏・回向偈
34	飯田市上久堅　原平	コト念仏	二月七日（現・第一土曜日）	巡回型	集落内	子供	観無量寿経・念仏・回向偈
35	飯田市上久堅　越久保	コト念仏	二月七日（現・第一土曜日）	巡回型	集落内	子供	観無量寿経・念仏
39	飯田市伊豆木	こと念仏	十二月八日	巡回型	集落内	子供	数珠・念仏
40	飯田市三穂　立石・上	コト念仏	二月八日（毎年打合せ）	巡回型	上区内	子供	数珠・念仏
41	飯田市三穂　立石・下	コト念仏	二月八日（毎年打合せ）	巡回型	下区内	子供	数珠・念仏
62	阿智村春日七久里	チャンキラ講	二月八日	巡回型	集落内	子供	数珠・念仏（現在は数珠のみ）
63	阿智村浪合荒谷	八日念仏	二月八日（かつては旧暦）	（現・固定型）かつては宿？	（現・集会所）かつては宿？	集落住民	
64	阿智村伍和寺尾	コト念仏百萬遍 数珠回し	二月八日と秋彼岸の中日（元は年七回）	固定型	寺尾地区庚申堂	集落住民	数珠・念仏ほか
73	根羽村小栃	数珠回し	二月六月十二月八日（後に二月八日のみ）	巡回型	集落内	主に子供	数珠・念仏

鳴くまでかかったなどという話もある。

②宿・当番型

宿（当番）と呼ぶ行事の世話役を各家が順番に担当し、宿に集落の人びとが集まって念仏を唱えるタイプである。大半が数珠回しを行うが、念仏を唱えるだけのところもある。

基本的に参加者に制限はなく、かつては子供が大勢参加していた。昭和末年ごろから、今日の住宅には広間がないこと、念仏終了後の直会の費用負担などが問題になり、現在は、地区の集会所で会費を集めて行う傾向にある。

③固定型

古くから念仏を唱える場所が決まっている場合で、五箇所ほど見られ、いずれもお堂である。（表－1の12、18、19、21、64）

（二）コト念仏の唱名について

コト念仏の唱名は次の四種類である。

・「念仏（南無阿弥陀仏）」を繰り返すもの
・「大将荒神」を繰り返すもの
・「観無量寿経」の一節と「念仏（九回）」と「浄土真宗の回向偈の一つ」を唱えるもの
・「観無量寿経」の一節と「念仏（二回）」を唱えるもの

①「南無阿弥陀仏」型について

輪になって大数珠を回し輪になり念仏を唱えるのであるが、家ごとに巡回する場合と宿やお堂などに集まって行う場合がある。また、飯田市大屋敷では、宿に集まるが数珠を用いず、「御神木」に向かって念仏を唱えるものもある。

②「大将荒神」型について

飯田市千代の野池では数珠を回しながら「大将荒神」を繰り返し唱える。隣の芋平でも行われていたが昭和二〇年代末に途絶えている。「大将荒神」の由来は定かでないが、千代公民館が昭和五八年に発行した『千代風土記』に、天保の大飢饉の時に当地を訪れた行者の御告げで、「これは仏様の四天王の内の大将軍、金神のたたりだから、数珠を繰りながら、大将軍、金神と唱えるように」といわれ、長い年月の間に「大将軍、金神」が「たいしょうこうじん」になったとある。（六九頁参照）

③「観無量寿経」「念仏（九回）」「回向偈」型

これは飯田市上久堅で子供たちによる巡回型のコト念仏で唱えられている。経文と念仏が合わさっていて、各家を訪れるとまず口上から始まる。その代表的なものは次の通りである。

さんし（頭取が言う、出だしの合図）
今日、事を申します（日没後は「今晩、事を申します」）
（「観無量寿経」の一節）※読み仮名は（現在の）風張の場合
光明遍照　十方世界
念仏衆生　摂取不捨
（念仏）
南無阿弥陀仏　・・・・・・（九回繰り返す）
（「回向偈」の一つ）
（弥陀）願以此功徳　平等施一切
同発菩提心　往生安楽国

これを聞き伝えやひらがななどで幾世代も伝えてきたので唱名とは異なるものとなっている。どこの地区でも南無阿弥陀仏以外は「教わった言葉を繰り返すだけで、まさか、お経の一節とは思わなかった」という声を聞いた。その様子は各地区の報告を参照して頂きたい。

さらに「回向偈」の一つが略され、念仏が二回のものもある。飯田市尾科のコト念仏では観無量寿経の一節もさらに短くなっている。

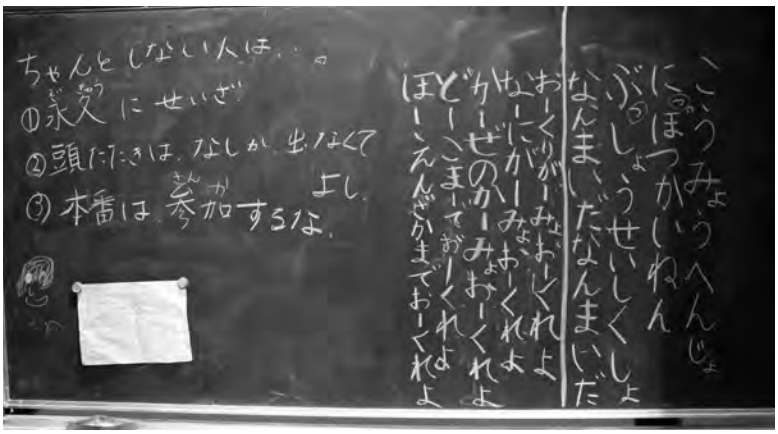
光明遍照　十方世界　衆生念仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

④念仏の練習

③を行うところでは、七日～十日前から練習を行い、念仏を完全に暗記する。これらの地区には念仏の後日行われるコトの神送りに歌のような唱え詞があり、併せて練習する。練習の日時と内容は頭取が決める。

（四）現在のコト念仏

（表－1）伊那谷のコト念仏一覧表では二七箇所の事例を取り



〔写1〕集会所の黒板の念仏と注意事項（越久保）

〔写2〕集会所の黒板に貼られた念仏（尾科）

〔表 2〕伊那谷のコトの神送り一覧表　※枠内の番号は五章の一覧地図、一覧表の番号、番号欄のアミ掛けは現在も行っているもの（23 箇所）、念仏行事もあるところは 13 箇所

	番号	場所	呼び方	月日	出発地点	送る場所	疫神、風邪の神などの依代	参加者、備考など	念仏行事
1	15	喬木村・富田	コトの神送り	二月十日	はずれの神社	富田沢川の村境	旗	当番のみ	コト念仏
2	16	喬木村・氏乗	コトの神送り、コトウ送り	三月八日（月遅れ）	集落のはずれ	小川川の集落境	藁の輪（オカグラ）＋幣束、旗	年番のみ	
3	17	喬木村・大和知	コト送り	旧暦二月八日	集落内の堂	小川川の集落境方向	藁の輪（ミコシ）＋幣束、旗	宿番のみ、	別行事扱い
4	18	喬木村・大島	コト送り	二月八日	はずれの橋（辻）	加々須川の地区境	笹竹	年番のみ	
5	20	飯田市・芋平	コトの神送り	二月八日	現在・集会所	地区境の沢	藁の輪（ミコシ）＋人形＋幣束、笹竹ほか	東①、制限なし	大将荒神中断
6	21	飯田市・蛇沼	コトの神送り	二月八日	集落境の沢	集落境近く（元．石碑）	（中継）、笹竹	東②、子供優先	コト念仏
7	22	飯田市・平栗	コトの神送り	二月八日	集落境近く	集落境の沢	（中継）、笹竹	東③、子供主体	
8	23	飯田市・落倉	コトの神送り	二月八日	集落境の沢	集落境の沢	（中継）、笹竹	東④、子供主体	
9	24	飯田市・小野子	コトの神（風の神送り）	二月八日	集落境の沢	集落境　★一泊	（中継）、笹竹	東⑤、子供に役割、大人	
10	25	飯田市・堂平	神送り、風の神送り	二月九日	集落境	公民館前	（中継）、笹竹	東⑥、子供のみ	
11	26	飯田市、風張・上平	送り神、風の神送り	二月九日	公民館前	北の原（リレー終点）	（中継）、笹竹	東⑦、子供のみ	コト念仏
12	27	飯田市・野池	コトの神送り、風の神送り	二月八日	公民館前	集落境	笹竹	西①、制限なし	大将荒神
13	28	飯田市・田力	コトの神送り	二月八日	集落境	地区境の川	（中継）、笹竹	西②、子供のみ	
14	29	飯田市・荻坪	コトの神送り	二月七日	集会所・堂下	地区境の川	笹竹、旗（本年から）	西に合流、子供主体	
15	30	飯田市・大屋敷	コトの神送り	二月八日	地区境の川	集落境　★一泊	（中継）、御神木・笹竹	西③、子供・大人	コト念仏
16	31	飯田市・尾科	風の神	二月九日	集落境	ジタジタ峠（地区境）	（中継）、笹竹	西④、子供のみ、	コト念仏
17	32	飯田市・下平	風の神送り、ゲイキの神送り	二月九日	ジタジタ峠	北の原（リレー終点）	（中継）、笹竹	西⑤、子供のみ	コト念仏
18	33	飯田市・中宮	コトの神送り	二月九日	地区の中心地・堂	北の原（リレー終点）	笹竹	西に合流、子供主体	コト念仏
19	34	飯田市・原平	コトの神送り	二月九日	地区の中心地・堂	北の原（リレー終点）	かつては笹竹、現在はなし	先着に合流、子供のみ	コト念仏
20	35	飯田市・越久保	送り神	二月八日	地区の中心地・堂	集落境の川方向	幣束、古くは笹竹	子供のみ	コト念仏
21	36	飯田市・森	コトの神送り	二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	家ごと	
22	37	飯田市・大鹿	コトの神送り	二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	家ごと	
23	38	飯田市・米川	コトの神送り	二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	子供主体	
24	42	飯田市上村・程野	送り神、コトの神送り	春・二月八日 秋・十二月八日	集落中央の神社 同上	北のはずれ（川沿） 集落の南境の沢	藁の輪＋幣束、幣束	褌宜・住民	
25	43	飯田市上村・中郷	コトの神送り、八日様	春・二月八日 秋・十二月三〇日	春・南はずれの宿 秋・北はずれの宿	春・集落の北境の沢 秋・集落の南境の沢	幣束	褌宜・住民	
26	44	飯田市上村・上町	八日様、コトの神送り、デンデン	春・二月八日 秋・十二月三〇日	春・南はずれの宿 秋・北はずれの宿	春・集落の北境の沢 秋・集落の南境の沢	藁ヅト＋幣束、幣束	褌宜・住民	
24	45	飯田市南信濃・木沢	風の神送り、サンヨリ、八日様、八日送り	二月八日 十二月八日	春・集落中央石碑 春・同上	集落の北境（川沿） 集落の南境（川沿）	藁ヅト＋幣束、幣束	褌宜・子供主体	
28	46	飯田市南信濃・八日市場	サンヨリ	春・二月八日 秋・十二月八日	春・集落中央神社 秋・同上	集落の北境の沢 集落の南境（川沿）	幣束	褌宜（二名）・子供主体	
29	47	飯田市南信濃・上島	八日様	二月八日 十二月八日	春・集落中央神社 秋・同上	集落の北境 河岸台地の送り場？	幣束	褌宜・子供たち	
30	48	飯田市南信濃・中立	八日様、風送り	二月八日 十二月八日	春・集落中央の堂 秋・同上	春・集落の北境 秋・集落の西境	幣束	褌宜・子供たち	
31	49	飯田市上村・下栗大野	トウトノカミ、八日様	二月八日 十二月八日	春・集落中央の家 秋・同上	（詳細不明）	幣束	褌宜・子供たち	
32	50	飯田市上村、下栗屋敷・小野	八日様	二月八日 十二月八日	春・当番の家 秋・同上	集落の西境の神社 西の尾根の送り場？	藁ヅト＋幣束	褌宜・子供たち	
33	51	飯田市上村・下栗本村	コトの神送り、八日送り、トウトノカミ、八日様	春・二月八日 秋・十二月八日	春・集落中央神社 秋・同上	（詳細不明）	幣束	褌宜・子供たち	
34	52	飯田市南信濃・須沢	八日様、八日送り	旧暦二月八日 旧暦十一月八日	春・集落中央神社 秋・同上	集落の北境の河岸 地区の西境	幣束	褌宜・子供たち	
35	53	飯田市南信濃・中根	（コトの神送り）	二月八日 十二月八日	春・集落の神社 秋・同上	春・集落の北東境 秋・地区の南西境	幣束	褌宜・子供たち	
36	54	飯田市南信濃・川合	（コトの神送り）	（二月八日） （十二月八日）	春・村はずれの家 秋・同上	春・遠山川方向 秋・同上	幣束	褌宜・子供と親	
37	55	飯田市南信濃、畑上・大島	（コトの神送り）	春（二月八日） 秋（十二月八日）	春・北はずれの宿 秋・南はずれの宿	集落の南境（川沿） 集落の北境（川沿）		褌宜・子どもと大人	
38	56	飯田市南信濃・池口	サンヤリ、かぜの神送り	二月八日			幣束	家族全員	
39	57	飯田市南信濃、本町・新町	かぜの神送り	風邪・麻疹流行時、二月、十二月八日	春・町内北から 秋・町内南から	中心地の南はずれ 中心地の北はずれ	幣束	子供たち	
40	58	飯田市、南信濃・此田	サンヤリ、八日送り、外気（がいけ）の神送り	二月八日 十二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	幣束（褌宜が作る）	子供たち	
41	59	飯田市、南信濃・大町	サンヤリ	二月八日 十二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	幣束	世話人・子供たち	
42	60	飯田市、南信濃・本村	サンヤリ、イチノボッポ	二月八日 十二月八日	春・集落の宿 秋・同上	春・下流の北境 秋・上流の南境	幣束	子供たち	
43	61	阿南町・早稲田	（人形）神送り	六月、食中毒や赤痢など流行時、今は一月第二日曜日	早稲田神社（集落中心の神社）	山中の「神送り場」	藁の輪（ミコシ）、幣束、おひねり	（現状）厄年の住民と人形保存会員、宮司ほか	
44	65	泰阜村・打沢	コトの神送り	旧暦二月八日	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	
45	66	泰阜村（広域）	コトの神送り	二月八日	（詳細不明）	村境まで	藁の輪（茅ミコシ）紙人形、幣束	（詳細不明）	
46	67	天龍村・大河内	神送り	旧暦三月三日	池大神社下の大岩	上流部の「神墓」	藁の輪（コシ）＋幣束、お布施米	小褌宜・日役二人	
47	68	天龍村・向方	関の方送り	旧三月四日（後に十九日）	区長の家	集落境の川岸	藁の輪（2 段のコシ）＋幣束＋白ネギ人形＋藁馬	褌宜・村人大勢	
48	69	天龍村・坂部	神送り	旧暦二月	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	（詳細不明）	
49	70	天龍村・大久那	神送り	（月日不明）	集落内	見遠境「神送り場」	幣束	褌宜・村人	
50	71	平谷村（村を縦断）	送り神	八月十八日	村内北端の集落	村内南端の赤坂神社（赤坂峠）	茅の輪（ミコシ）＋幣束（米・お布施）	褌宜・当番の一行、各町住民	
51	72	根羽村・小戸名	コト神送り	七月八日（月遅れ）	各家	字・小字境の沢	麦藁人形	基本的に家ごと	
52	73	根羽村・小栃	コト神送り	六月八日 十二月八日	集落内（各家）	地区南境の峠の道祖神	藁人形	数軒ごと、家ごと	百萬遍念仏
53	74	根羽村・折山	コト神送り	春・二月八日 秋・十二月八日	春・最下流の家 秋・最上流の家	北部の村境の峠 南端の沢の岸	藁人形	地区（七～八軒）で一集団	

上げている。この内、伝承が途絶えているのは六箇所で大半は伝承されているように見えるが、高齢者が支えているのが実情である。また、集会所や堂に数珠だけが残され、コト念仏の伝承が途絶えているところが見られることから、古くは多くの集落で行われていたがすでに廃れ、市町村史等の文献資料にも登場していない行事が数多くあったと思われる。

行事の衰退は地域の過疎化とそれに伴う少子化が影響している。かつて巡回型のコト念仏は参加者の規制が厳しく、数えの十歳から十五歳までの長男とするところが多かった。戦後、義務教育が六・三制になると小学校高学年から中学二年生の早生まれまでとなった。

ところが現在では小学生と中学生を対象としている地区が多い。さらに昭和五〇年頃から、長男だけではなく次男、三男の参加が認められ、その後は女子の参加も認められ、今では女子の頭取も珍しくない。さらに親や地区の役員などが参加しているところも多い。高齢者だけになった地区では巡回型の念仏を止め、集会所に集まって行う念仏に切替えたところもある。

また、念仏の内容も変化している。経文が加わる地区では、先輩から口伝で教わった経文が、かつてはまかり通っていたが、近年は経文の原文が紹介されるようになり、あまりに省略や変更があるということで、元の経文の通りに修正される場合も多い。

その一方で、口伝によって変形しながら伝わった唱え方こそが、本来の子供の「念仏」であるという意見も聞かれた。

三、コトの神送りについて

(一) コトの神送りのやり方

①集落境に送るもの

伊那谷のコトの神送りは、村の各戸で家人が家の中を祓って、災いをもたらす疫神や風の神を乗り移らせた笹竹や旗、幣束を集落の辻々に立て、当番などがそれらを集め、集落の外に送り出す行事である。それには笹竹や藁、紙を用いてモノツクリが行われ

〔写3〕笹竹、飯田市龍江（大屋敷）

〔写4〕笹竹（「コトの神」とも呼ぶ）・田力

〔写5〕蛇沼、笹竹の短冊

〔写6〕堂平、「風の神」の短冊

〔写7〕堂平、猿が馬に乗った版画

堂平、笹竹にくくられた紙包み

〔写8〕富田の旗（「送り旗」ともいう）

〔写9〕氏乗、旗の紙包み　紙包みの内の中身、堂平

〔写10〕富田の旗の詳細

〔写11〕大和知　色紙を組み合わせた旗

る。いずれも疫神が戻ってこないように投げる。

コトの神送りは、集落（地区）単位で行われるが、飯田市の三地区、千代、龍江、上久堅の十六の集落で行われるリレー方式の神送りは特徴的であり、三章で詳しく述べる。（十五頁地図参照）

もう一つ、集落を結び連続するやり方として平谷村の「送り神」があげられる。八月十八日に行われ、当番の集落がミコシを作り、村域を北から南に縦断し、十集落を巡りながら各家の幣束を集め、一つの大きな茅の輪に刺して村境に送るというやり方である。

②コトの神を送る場所と送り方（表2参照）

集落や家々に災いをもたらすコトの神（疫神、風の神）は、生活領域（居住域・生産領域）から追い出さなければならない。したがって集落境や村境、町境の外側に送られる。〔表-2〕ではコトの神送りの出発地点と送る場所を列記してある。その多くは川岸や沢である。

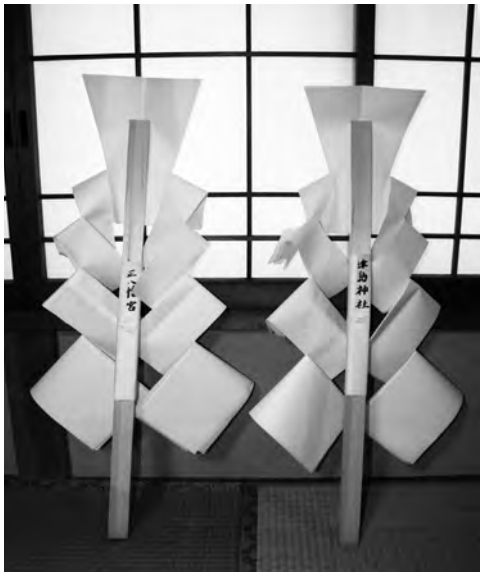
飯田市のリレー式のコトの神送りでは「北の原」と呼び、飯田市南信濃上島では「トートノカミ」という場所、飯田市上村下栗屋敷・小野の八日様では、尾根上のマキの木の根元で「コトガミド」という場所に送る。

阿南町早稲田の人形神送りでは、居住域から離れた「神送り場」という字名の場所がある。天龍村の大河内や大久那にも「神送り場」がある。さらに根羽村の小栃、小戸名の中組では沢や峠の道祖神の周囲に送っていたという。

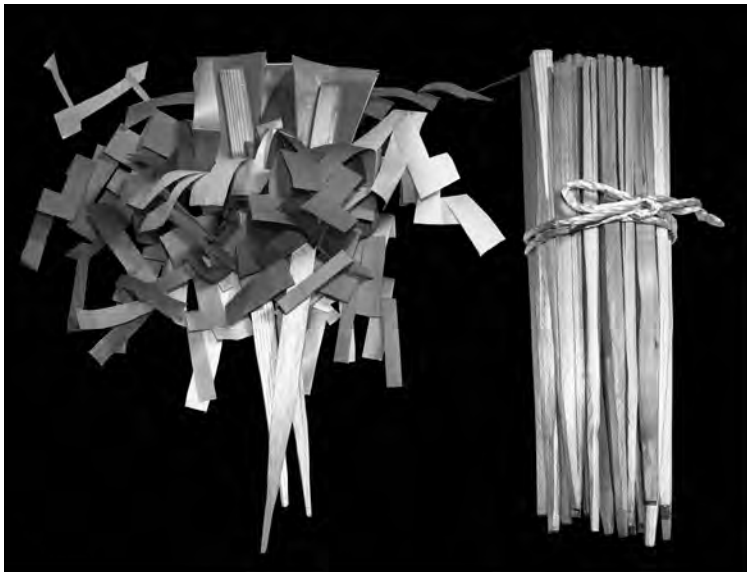
送る場所に着くと、笹竹や幣束、ミコシなどを放置したり投げ捨てたりする。そして一様に「後を振り返らずに帰れ」という。疫神が付いてきてしまうからである。帰りは往路の唱え詞、鉦・太鼓は一切禁止され、静かに寄り道をしないで帰るのである。

さらにいろいろな工夫がある。天龍村大河内の神送りでは、疫神の乗ってきたミコシを禰宜がばらばらにして、疫神が帰れないようにしたり、飯田市龍江の尾科では、疫神が道に迷うようにと行きとは違う道を通って帰る。

上村では行事が終わると、禰宜が参加した人びとに湯だすきをくぐらせ、疫神を断ち切る。木沢などでは禰宜がかざした小刀の下をくぐり疫神を断つ。また空鉄砲（空砲や昼花火）で追い祓う



〔写12〕飯田市上村上町のオタカラ、「津島神社」（右）「正八幡宮」（左）



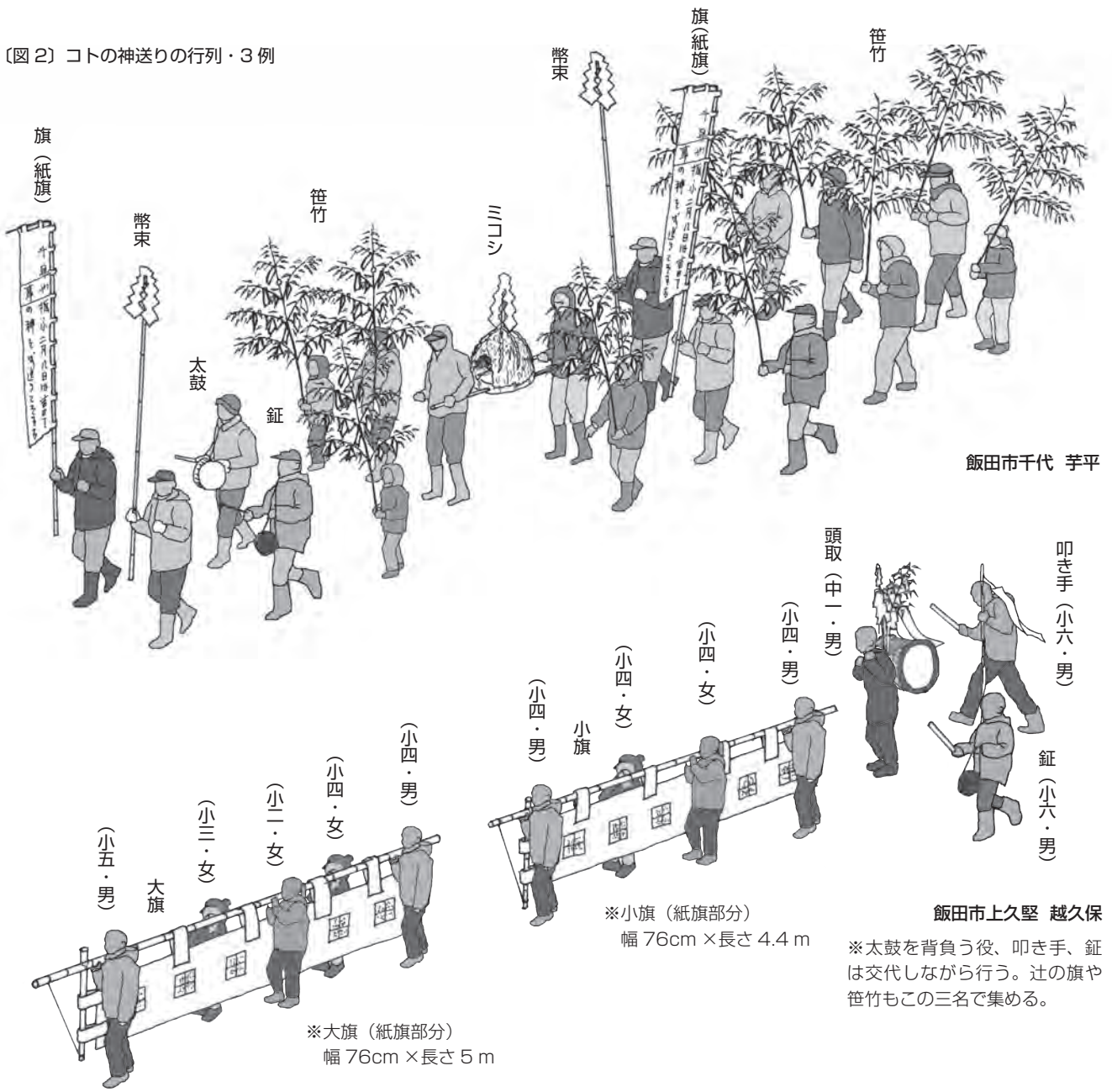
〔写13〕飯田市上村上町、参加者が一本ずつ持つコタカラづくり

〔写14〕飯田市上村上町、オワキ（藁ヅト）のオワキノサ（末社の小幣）

〔写15〕飯田市上久堅（越久保）、送り神の太鼓に差した幣束

〔写16〕喬木村氏乗、来年の幣束づくりに備え、サンプルを作成して保管する

〔図 2〕コトの神送りの行列・3 例



ところもある。

(二) コトの神送り・コトの神の依代(よりしろ)

①コトの神を送る笹竹と旗

コトの神を送り出すための道具は、家の中を祓い疫神を送る短冊の付いた笹竹や旗、幣束などと、集落の境まで送るために幣束を立てた藁の輪を据えたミコシなど、いろいろなものがある。

コトの神送りの前日や当日の朝には、各家では笹竹や旗、幣束を作る。作り方は集落や家ごとにまちまちであるが、まず材料を伐ってくる。笹竹の場合はハチク、マダケなどの細いものや幹の先端部分を使う。一・五～二メートル前後の丈で枝ぶりを整える。

そして幾枚もの紙の短冊を付け、疫神の乗りものとして「午(馬)」その守り神としての「申」と文字を書く。一年十二ヶ月分の疫神を祓うので十二枚付けるとも聞くが、枚数はまちまちである。古くは文字ではなく猿と馬の絵柄の版画が多かった。今日はその他にもいろいろな言葉が書き込まれる。笹竹は古くは「送り竹」「送り笹」「コトの神」「カゼの神」などと呼ばれていた。

この笹竹で家の中を祓って回り、疫神や風(邪)の神を乗り移らせ、家の外に送り出すのである。笹竹や旗は通りの辻に立てておくと、当番や行列が集めに来て、まとめて集落の境から外に送り出してくれる。

旗の棹には笹類(スズダケなど)を用いる。「マンダケ」と呼ばれる場合が多いが、今日ではハチクなどとも混同していてあいまいである。そしてその笹に縦長の紙旗を取付けたものを「旗」いう。紙旗には「御事の神送り」「御事の風之神送り」「奉納　風之大神」、「南無阿彌陀佛」と書くところもある。旗は「送り旗」「神送りの旗」「送り竹」「送り笹竹」などとも呼ばれている。

幣束は色紙を重ねて紙垂に切り、笹竹に挟む。

笹竹も旗も幣束も、おひねり状の紙包みが一つ取付けられる。これには洗米数粒、さらに家族全員のボンノクボの毛、爪を包むことになっている。ボンノクボは首の後のへこみ部分で、「昔は三つ子が転ぶと、神様が盆の窪の毛をつかんで起こしてくれる特別なところだから」などの口伝も聞かれた。ボンノクボの毛も爪も伸びる部分で、疫神を乗せて送り出す形代(かたしろ)であろう。

②幣束

幣束は、伊那谷では「タカラ」「オタカラ」「オンベ」「ノサ」などと呼ばれている。幣束はそれぞれの家で作る場合と禰宜が作って配る場合がある。さらに行列で禰宜や集落の役員が持つもの、藁の輪や藁ツトに刺すものなど、大きさも用途も様々である。

(三) コトの神送りのモノツクリ・藁と紙と竹と笹など

①藁製品の役割

幣束は疫神の依代ともなり、集落境の外に送り出されるが、その時に様々な藁製品が神座として用いられる。

藁の輪に数本の幣束を刺し、担ぎ棒などを取付けた「ミコシ」「コシ」「オカグラ」と呼ばれるもの、藁ツトを棒の先に取付け、幣束を刺す「オワキ」などと呼ばれるものがある。飯田市千代の芋平のミコシは、藁の輪の上に桧の葉枝で小さなドームを作り、内に「オトコガミ・オンナガミ」の二体の藁人形を立てる。天龍村向方では二重の藁の輪に二四本の幣束を立ててカゴ状のミコシを作る。平谷村の送り神では各家から持ち寄った幣束を茅(カリヤスとススキ)で作った大きな輪に村中の家の幣束を立てる。

これらの藁の輪やミコシは集落で当番や定められた人が作る。いずれも持ち帰ることはなく、送り場に捨てられる。

似通った行事として、泰阜村の「ハシカ送り」があげられる(注14)。また、桟俵の習俗にも通じるものがある(注15)。

②人形

飯田市千代の芋平の「オトコガミ・オンナガミ」の藁人形は疫神といわれている。泰阜村のコトの神送りでは紙人形を用いる。根羽村では各家が一体ずつ藁人形を作り送る。同村小戸名の六月八日の神送りの藁人形は、刈り入れたばかりの大麦の藁で作った。

②その他の道具立てと行事で食べるもの

コトの神送りの行列では紙製ののぼり旗、鉦、太鼓などが使われる。特殊なものとしては、飯田市のリレー方式による神送りの大屋敷で作られる木柱で「御神木」と呼び、終着地まで送る。

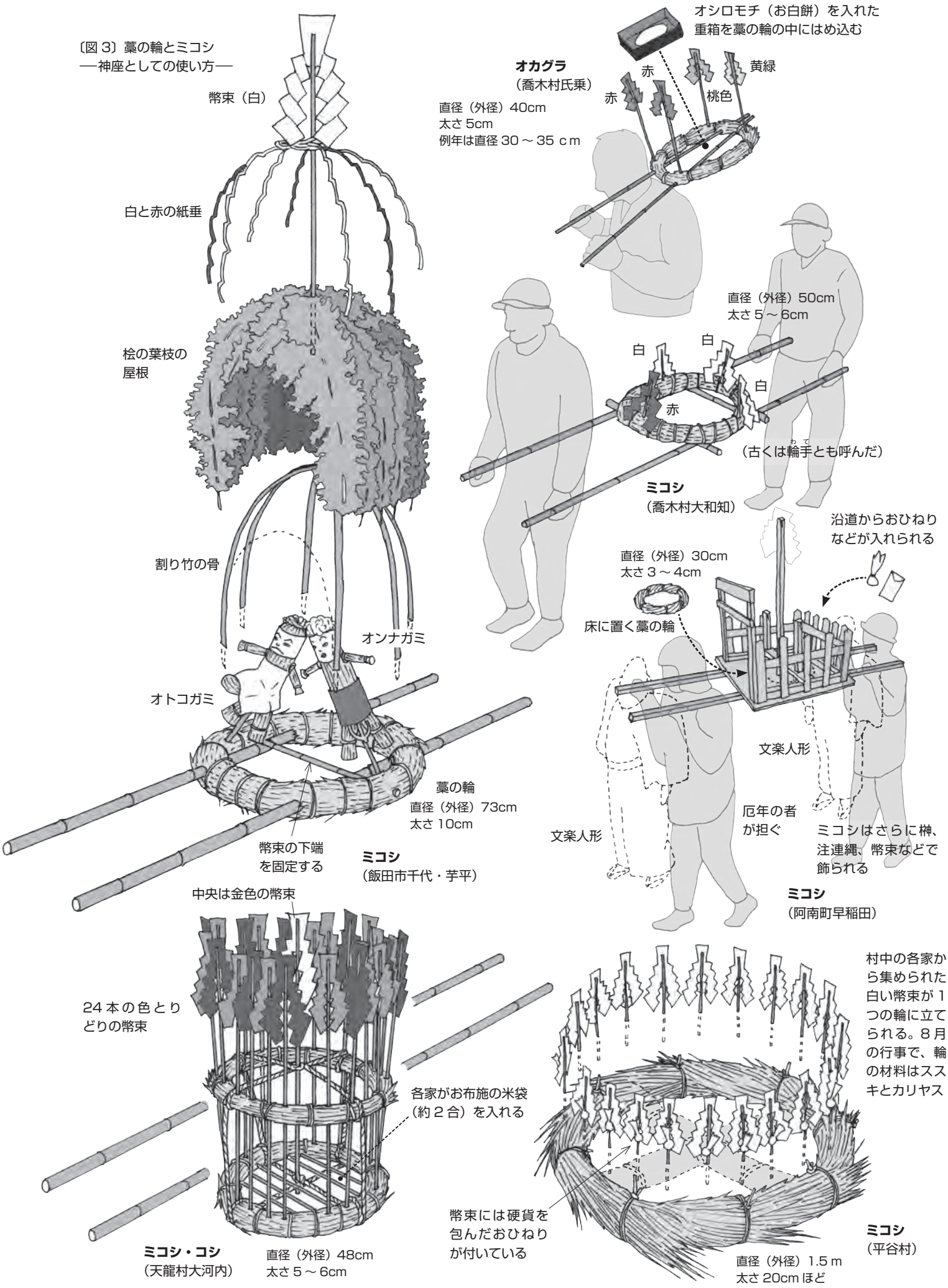
コト念仏とコトの神送りでは食べ物が関わってくる。「コトボ

(注14)『泰阜村誌　下巻』
ハシカ送り
茅の箕子を造り、この縁に紅白の切子を垂らし、その上に藁輪をおき、これに幣束を立てて紙人形を乗せ、米や酒を供えて村境まで送り出す。

(注15)『世界大百科事典』
桟俵・さんだわら
俵の両端につける円形の藁ぶたをさし、サンバヤシとかバセともいう。桟俵は神座や神饌の容器として、正月には年神の幣束をさしたり、鏡餅をのせるのに使われる。しかし、最も顕著なのは、疱瘡(ほうそう)や麻疹(はしか)にかかったり、はやったりしたときに、桟俵に御幣、赤飯、神酒などをのせて辻や村境に捨てたり、川に流す習慣である。

〔写17〕箕輪町北小河内中村、念仏前のおにぎりづくり

〔図 3〕藁の輪とミコシ
──神座としての使い方──



タモチ」と呼ぶボタモチ、豆腐汁、豆などで、供物というより参加者が食べる行事食に近い。住民から米を集めて直会に用いる事例も見られる。さらに白米を摺って（搗いて）水で練った粢（しとぎ）を「オシロモチ」「オシロジ」などと称して供物にし、撤饌して分け合って食べる。集落ごとの報告で詳しく述べる。

（四）コトの神送りの行列について

①行列

コトの神送りは行列を組んで行う。それぞれの行列では、役割ごとに並ぶ順番が概ね決められている。ところが飯田市のリレー方式による神送りでは、各集落の笹竹が次々と蓄積していくので、終盤になると「竹やぶが歩いてくる」ような状況であったという。

また、飯田市の尾科では、子供たちが四キロ近い道程の尾根道で笹竹の束を担ぐので、平地の行列とは異なり、身支度や鉦、太鼓のしばりつけ方に工夫があった。

飯田市のリレー方式による神送りは、集落の人びとだけで行うが、飯田市東部の遠山谷と伊那谷の南部の町村では、禰宜が行列を先導することが多かった。これらの集落では依代に幣束が使われ、笹竹は見かけない。禰宜は集落の住民で各集落ごとに「禰宜屋」などの屋号の家があり、村内の神事を宮司に代行していたが、現在は他出したり神事に関わらなくなり、近隣の神社の宮司がよばれている。

②唱え詞と歌

コトの神送りでは、笹竹で部屋を祓う時、辻に出す時、コトの神送り行列で送る時に唱え詞がある。

【笹竹で部屋を祓う時】

この時は「コトの神（疫病悪病の神・風邪の神）は、乗って出て行け」とか「風の神お馬に乗れ」などであるが、飯田市蛇沼では「京の都、奈良の都、行ってご繁昌なされ！」というのもある。

【行列の唱え詞】

行列では鉦と太鼓で調子を取って、歌うように唱え詞を口にする。本稿では「唱え詞」としたが、「囃子詞」「歌」と呼ぶこともあった。次のような唱え詞である。

「送り神送れよ　どこまで送れよ　○○まで送れよ」

飯田市上村上町のコトの神送りには「事の神送りの歌」という歌があり、行列では決められた三箇所でこれを歌う。二七番まである長い歌詞であるが、最後の二六番と二七番で疫神を送り出してしまう。（四章参照）

(26)浦（うらみさき）御先に八尋（やひろ）の船がみえにけり　あれこそ神の迎え舟なり

(27)行く先に花の都を持ち乍（なが）ら　なにとてここに長い生ずる

（五）コトの神送りの現状・行事の変貌と要因

伊那谷のコト念仏、コトの神送りの行事は衰退・変貌しつつある。コトの神送りを行っている地区・集落の多くは過疎化・高齢化が進んでいる。

二月八日、十二月八日の両日に行っていたところは、二月八日だけの行事になったり、両日とも中断したところも多い。抽出した資料から、昭和三〇年頃に五三箇所で行われていたコトの神送りも、現在は三〇箇所が中断している。

これは集落の人口減少と、それにともなう少子化が大きく影響している。子供が主体となるコトの神送りは、五三箇所中二八箇所である。リレー方式の神送りを行っている十六の集落でも、二つの集落では小中学生が一人もいない。発祥時から子供の行事であったかは定かでないが、少なくとも大正・昭和・平成は子供が担い手であるところが多い。

現在は親が手助けしたり、高齢者が代行する事例が急増しているが、手立てがないところは中断している。最近は二月八日の行事も二月の第一土曜・日曜などに変更するところが増えている。平日に学校や会社を休むわけにいかず、古くからの日にちより、週末の土曜・日曜が優先されている。

さらに疫神に対する思いも変化している。医療の進化、整備された道による医療機関への通院、薬剤の普及などにより、インフルエンザの流行などには気を使うものの、恐れは軽減している。これも衰退の要因の一つなのであろう。

〔写18〕床の間に供えられたコトボタモチ（小豆ときな粉）堂平

〔写19〕喬木村氏乗ではオカグラの中にオシロモチを乗せる

〔写20〕天龍村大河内では臼で米を搗いてオシロジを作る

二章・伊那谷北部から中部、箕輪町・駒ヶ根市・喬木村の「コトの神行事」

■（上伊那郡）箕輪町東箕輪北小河内中村　【一覧表・地図番号2】

一、北小河内中村、お念仏

地元の呼び方　お念仏、お念仏様

行事日　昭和五四年（一九七九）までは二月八日、以後は二月第一日曜日、平成二七年は二月一日（日）

場　所　かつては家押しの当家、現在は中村集会所

行事の特徴　宿（集会所）に住人が集まって行う念仏、直会で婦人たちが作るおむすびが振る舞われる。

話　者　常会長・久保田諭氏（昭和三一年生）、北小河内区資料調査委員会長・杉本正樹氏（昭和十三年生）、藤本清治氏（昭和十五年生）、根橋敏夫氏（昭和十七年生）、中村の皆さん

地区状況　中村常会は現在八二戸、三〇〇名前後で六組に分かれている。平成十七年（二〇〇五）ごろから近隣に工場誘致などを行って人口が急増。かつて水田は平均二反歩、多い人で五反歩ほどだった。畑は水田の三分の一程度で、明治以降は山を開拓して桑畑とし、養蚕を行っていたが、この地は近年、果樹園になった。

※平成二六年（二〇一四）、北小河内区中村常会の民俗行事として「念仏講」という名称で町無形民俗文化財に指定された。

（一）行事の概要

①行事の由来・歴史など

江戸時代に疫病が流行した時に、地域内を流れる用水の大堰が、西側を南下する天竜川とは逆に北上して流れているので天竜の上下に逆らっていることを、「神」に逆らっているからではないかとされ、疫病を祓うために念仏が始められたいう言い伝えがある。念仏には一年間の無病息災の祈願と犠牲者を弔う法要の意味合いが込められているという。江戸時代の疫病とは、安政五年（一八五八）に伊那地方に流行したコレラなどをさすものと思われる。（注1）。

大堰は農業用水で、宝永年間（一七〇四～一七一一）の村絵図に描かれているため、それ以前に引かれたものである。用水の源流は沢川で、耕地の周辺は田無川と呼ばれるほどの乏水地であったが、現在は大堰によって南小河内で二〇町歩、下流の北小河内で三〇町歩の水田が拓かれている。

また、中村常会には念仏の時に掛ける二幅の掛け軸が保管されている。一幅は「南無阿弥陀仏」の文字で無量寺第五〇代住職の書である。もう一幅は十三仏の掛け軸であり、作者、製作年代が不明であるが、表装し直しで掛けてある。これは二十三夜講が盛んであった文政期（一八一八～一八三〇年）頃のものと考えられている。これらの掛け軸が毎年の役である「当家」を巡り保管されてきた。

念仏の記録としては嘉永二年（一八四九）北小河内村の「御念仏数覚帳・観世音普門品経巻数覚」という、念仏を唱えた数の記録日誌がある。これには嘉永二年十一月二二日に始まり、翌年正月二〇日まで「百万遍ト七千二百遍」とある。

昔は当家に集まり、そこから回忌や葬儀のあった家、新盆の家に数珠を持って行って念仏をあげ、合間におむすびを食べ、空腹を満たしていたという。それが念仏といえば、おむすびを作るようになった始まりであろう。

北小河内には、中村常会と無量寺（久保地区、真言宗）の二箇所に合計3本の数珠が残されている。かつては多くの地区で念仏が行われていたが、明治以降、さらに戦後の混乱期に途絶えたところも多く、中村だけに継承されてきた。

②行事を行う場「当家」

念仏は平成十七年（二〇〇五）まで、皆が当家と呼ばれる世話役の家に集まり行われていた。中村常会では毎年「家押し」（一軒ずつの順番）で当家となる。現在は約八〇軒なので、八〇年に一回当家の役が回ってくる。ところが近年の戸数の増加や広間のない住宅事情により、一軒の家に地区の人々が集まるのは困難となり、平成十八年から集会所で念仏を行うようになった。

【図1】箕輪町東箕輪北小河内中村地区のガイド図（国土地理院・電子地図に加筆）

〔写1〕中村に向かう大堰、左奥の天竜川とは逆向き

（二）実施状況《平成二七年二月一日（日）》

①準備は中学生の米集めから

お念仏の準備は米集めから始まる。これは中学一年生から中学三年生が中心で、三年生が「親」になり、お念仏の一～二週間前に各家庭から米を集める。平成二七年は二週間前の一月十八日（日）に集めた。この米でおむすびを作り、念仏後の直会で会食する。昭和二〇～三〇年代は家族の人数も多く、三合から五合の米を出す家もあったが、平成十八年から一家族一合とした。現在、中学生は八名であるが、三年生一名と一年生三名の計四名が参加し、当家の指図で分担地域を回り米を集めた。

②午前中はおむすび作り（午前十時から十一時十五分）

集めた米は当家の所属する組の各家庭に分け、念仏当日の朝に炊いてもらう。それを電気釜のまま中村集会所に持寄り、午前十時頃からおむすびを作りはじめる。中村常会は一組から六組に分かれ、各組は十～十五軒で構成されている。当家の組の奥さんたちが米を炊き、おむすびを握る。

従って組の中を当家が一巡する十数年は、その組が毎年おむすびを作る。平成二七年二月一日のお念仏では、一四名が賄いを担当し、五合から九合炊きの電気炊飯器十台で炊き、八〇合分のご飯が持ち寄られた。直会で食べるおむすびには、およそ五五合分が使われ一七〇個余の塩ゴマおむすびができた。残りの二五合分は、お米を出してくれた家に配る「オゴフ」に当てられた。「オゴフ」は食品袋に入れ、組ごとに分け宛名を書き準備しておく。配るのは、米集めをした中学生たちである。

③増加する新住民への対応

中村常会は、平成十年（一九九八）ごろまで四組で、四五戸ほどであったが、現在は六組で八二戸に増加した。四五戸は古くからの本家と新家の住民で、新しく増えた住民は外から来た人たちで、五組と六組に固まっている。現在の当家は三組で、ほどなく四組に移るので、十数年で五組に当屋が回る。その時に困らないよう平成二六年から各組長（の奥さん）にも参加してもらって、準備の手順を体験してもらっている。

④お念仏・数珠回し

集会室の床の間に「南無阿弥陀仏」と「十三仏」の掛け軸が掛けられ、聖観音像、灯明一対（ロウソク）、洗米、塩、煮干し、御神酒、水が供えられた。部屋の中央十八畳ほどには、二〇枚の座布団が車座に敷かれ、その内に数珠、鉦と太鼓が置かれた。

十一時ごろから住民が集まり始め、十一時三〇分から挨拶があり、ほどなく古老の根橋敏夫氏の号令で数珠回しが始められた。太鼓と鉦は、その場で元気な子供に頼んで打ってもらう。数珠回しは休憩をはさんで二回行われ、無病息災・家内安全、今年も健康に過ごせるようにと祈願した。

・一回目（五分間）南無阿弥陀仏を九四回で、大珠が五回転
・（七～八分休憩）その間に根橋敏夫氏の話
・二回目（五分間）南無阿弥陀仏を一一四回で、大珠が五回転

（注1）北小河内区資料調査委員会編『おらがむら 第一巻・北小河内区誌』五九頁年表より

〔写2〕集会所の床の間（掛け軸、聖観音像、ロウソク、供物など、おむすびが供えられることもある

【図2】北小河内区 中村常会の組分け概要図

（国土地理院・電子地図に加筆）

数珠は、全長が約九メートルで大珠が一つ、珠が八四七個、その内補充したと思われる珠が四二五個であった。紐が切れ紛失した珠を古老が作り補充したものである。古い珠は塗りが施されているが、きれいに整形された珠と面取りされた不揃いの珠がある。

昭和二〇年代、七〇代の人たちが子供の頃は、白米がなかなか食べられなかったので「ナムアミダブ、ナムアミダブ、（腹がへった）、おむすびおくれ」と唱えていた。年寄りから「ちゃんと唱えないとおむすびはやらんぞ」といわれ、何時間も数珠回しをさせられたという。昭和二〇年代は日常、大麦（つぶし麦）を四割混ぜたご飯だったので、念仏で白米のおむすびが食べられることは、周辺の地域の子どもたちにうらやましがられていた。

⑤根橋敏夫氏の話（念仏の合間、子供たちに語りかける）

「ちょっと休んでいる間に。おじいちゃんが教わったことはね、いつも二月八日はお念仏の日と決まっとったの。今は土曜、日曜でないと人が集まらんもんで二月の第一日曜日と決めてあるんだけど。昔も集会所もあったけど、「家押し」といって家を順に回ってやっとったんだ。

今の家は二部屋も続くような部屋がなくて小さいもんしね、八畳二間とか十畳二間とか続けて、廊下まで人がいっぱいになるほど来た。おじいさん、おばあさん、そして子供まで家中来てね、おむすびをたくさん握ってもらってね。おじいさんたちも子供の頃は楽しみでね、二月八日になると、学校行っていても半日休んで来た。

そいで、じいちゃんが物心ついたころ、四つか五つか、今から六五年も七〇年もメエの頃は、ずっと各家を回ってね、当時、中村というところは四五か四六軒ぐらいしか家がなかったが、今は八〇軒超して九〇軒くらいある。ほんで昔は、一代に一回くらい当家をすればいいよと聞いとったがな。

この数珠の珠はいっぱいあるが、この大きいのが回ってきた時には、じいちゃんたちが教わった時には、額に当たるぐらいかがめてね、拝まならんね。回すのは左回り、時計と反対に回して皆でナムアミダブツを唱える。

大堰が天竜川に逆らって逆に流れていて伝染病が流行ったのではないかと。中村は戸数も少ないので、念仏を唱えて疫病にかからないように、一念いっぱい、皆で拝もうとなったようだ。これは皆の言い伝えだ。

今考えてみると長田新田（もみじ湖の上流部）というところから下で使った水を、一番川下の中村の衆は、よごれた水でご飯を炊いたり、洗濯をしたり、飲水に使っとって、そういうわけで病気にかかったのかなと判断するけど、集会所の入口のところ（パネル）にいろいろ書いてあるけど、自分たちが次の代の衆に教えてやらんとならんわな。

昔は、じいちゃんが覚えている頃は、皆着物だったな。こんないい座布団もなくて、皆畳の上でやったね。昔の家はネコとかコモみたいの敷いて生活しとった。そんな知ってることを話しただけだ。そいじゃまた、こいつ（大珠）が五回来るまで回すぞ。そうすれば今度は、おむすびの時間になるぞ。」

⑥机を並べて直会になる（昼十二時～午後一時）

集会所の中に長机を二列並べて両側に座布団を敷き、おむすびとお重を華やかに並べ、お吸い物が配られると直会が始まった。次々とお重を回し合うにぎやかな直会であった。

今回の参加者は四八名で、第三組の奥さんと各組長の奥さんを中心とした賄い方が一四名、念仏に来た大人が一七名、中学生以下の子供が一七名であった。

かつては白米のおむすびがご馳走だった昭和三〇年代頃までは、ほとんどの家が参加しておむすびを食べていた。お重は持ち寄りで、皆でおむすびを食べるのは楽しみの一つだったし、食べればお念仏のご利益があるといわれた。

おむすびと共に振る舞われるのは、「中村のお吸い物」と呼ばれている醤油汁である。豆腐・ちくわ・ねぎのお吸い物で、葬儀にも出される。さらに賄いの奥さんたちが重箱やタッパーで、漬物、煮物、工夫を凝らした一品料理、果物、デザートなどのご馳走を持ち寄っていた。ところが今は負担に思う住民もあり、他の行事でも会食の機会は減っているという。

⑦「オゴフ」を配る

米集めと「オゴフ」配りは中学生の役割である。今回米集めを

〔写3〕当番の組の奥さんたちが炊飯器をもって集まる

〔写4〕おむすびづくりと「オゴフ」のご飯を袋詰めする

〔写5〕中村常会の住民が集まって念仏

〔写6〕鉦と数珠

〔写7〕中村のお吸い物

〔写8〕直会の様子

した四名の中学生は、直会の時は別室で慰労した。直会が終了すると四名が呼ばれ、準備しておいた「オゴフ」を担当地区に配って歩く。六組の家々を四名で回るので、親や組長が加勢した。「オゴフ」は数珠回し参加者宅にも配られた。不在の場合は組長宅で預かり、夕方に再び訪ねていた。

かつてはもらった米の量を中学生が記帳しておき、三合とか五合とか多く頂いた家には、おむすびを三つ五つと相応のお返しをしていた。大半の家が数珠回しに参加していた頃は、おむすび戻しの家はわずかで、中学生は配り終えてから直会に参加していた。「オゴフ」を配り終え、集会所の片付けも一段落し散会となった。

■駒ヶ根市東伊那大久保（一覧表・地図番号10）

二、大久保、子供のコウトウネンブツ

地元の呼び方　コウトウネンブツ

行事日　一年に一回で二月八日（前後）、平成二七年は二月八日（日）午前十時から

場　所　かつては当番の家、現在は東伊那公民館大久保分館

行事の特徴　宿（集会所）に住人が集まって行う念仏、子供が主体である。

話　者　宮北修治郎氏（昭和十年生）

地区状況　大久保地区は四九軒、一四四名

門前常会二一軒（上組十軒・下組十一軒）

本村常会十三軒（上組八軒・下組五軒）

田甫（たんぼ）常会十五軒（北組九軒、南組六軒）

平均耕作面積は、田畑合計五～六反歩ほどで、水稲と養蚕で暮らしてきた。さらに古くは、窯業も行われ、宮北家を含めて四軒がダルマ窯で土瓦（どがわら）と呼ぶ焼成温度の低い屋根瓦を焼いていた。

①行事の由来と概要

明治の初年頃、全国的に疫病・肺炎などが多く、厄払いとして始まったといわれ、大久保の三常会（門前・本村・田甫）は、それぞれに念仏を行っていたが、昭和初期には本村だけになってい

〔写9〕中学生が「オゴフ」を配る（中村常会）

【図3】駒ヶ根市・大久保地区の常会区分

（国土地理院・電子地図に加筆）

た。そして昭和二六、二七年には、本村の念仏行事も一時中断したが、昭和四五～五〇年頃（一九七〇～七五）に復活した。

行事名の「コウトウネンブツ」は、新聞社などは「口頭念仏」の字を当てているが、大久保では、祈願すると仏様が答えてくれるという印象から「口答念仏」とも考えられていた。いずれにしろ、文書等に書かれているのは見たことがないという。また、「コト念仏」が訛ったということも、聞いたことがないという。駒ヶ根市のホームページの「駒ヶ根市の文化財」には次のようにある。

「この行事は、全国的に子どもの悪性感冒（風邪）が流行したため、その厄を祓うためと伝えられ、大久保地区では、古く江戸時代の終わり頃から行われていたようである。昔は節分の前日常会（集落）単位で当番の家に集まって行い、村中廻って歩いたと云われており、その後「白飯」「豆腐の味噌汁」「いわし」がつきものの食事をとったとのことである。」

近年の様子は新聞でも取り上げられている(注2)。当初は疫病除けなどを祈願していたが、目的が徐々に変化し、子供や集落の結束が主目的になりつつあるという。

②行事を行う場所と組織の変化

戦前～戦後、念仏はその年の当番の家に皆が集まって行われていた。本村十三軒と田甫の四軒、番所跡の四軒が加わり、二一軒ほどが木戸番（回り番）で念仏を行っていて、その順番は決まっていた。宮北家は昭和二四年、宮北修治郎氏が中学三年生で高校受験の年に当番を行った。

昭和二〇年代は、中学生以下の二五、二六名の子供が参加していた。他にも天神様などの子供の行事があり、高学年が低学年の面倒をみるやり方であった。小学校入学前であっても、念仏を行う家まで歩いて来れる幼児なら参加できた。さらに、大久保地区の他の地区の子供たちも参加できるようになった。

一時期念仏が途絶え、再び復活した後も、以前のように回り番で行っていたが各家庭に大人数が集まるのが困難な時代になり、平成十年（一九九八）頃から、東伊那公民館大久保分館（大久保いきいき交流センター）で行うようになった。念仏は育成会の事業の一つとなり、活動予算から費用が出されるようになった。育成会とはＰＴＡと自治組合からなる公民館の分館組織である。

③参加者の拡大を目指して

数年前から東伊那公民館を通して、東伊那の子供たちに参加を呼びかけている。毎年、大久保地区以外からも四～五名参加し、合計十五～二〇名で行っている。但し、今後は小学生の人数がさらに減少していくので、子供たちの親や一般の方々にも参加してもらおうという話も出てきている。

④念仏のやり方

昭和二〇年代に中断する以前の念仏では、年長の子供が当番の家の人と相談して段取りを決めていた。当番の家では、座敷を開放して家の人も加わって数珠を回す。

「コウトウネンブツ、ナンマイダー」を繰返して唱え、数珠の中にある木札（昔は古銭も付いていた）が回ってくると、頭を下げた。大数珠の中央に香炉を置いて線香を立て、消えるまで鉦を叩きながら念仏をあげる。かつては、現在よりリズムが遅かったという。

線香が一本燃えることを一炷（いっちゅう）といい約四〇分である。けっこう時間がかかるので、現在は線香を半分に折ってから焚いているという。

⑤数珠

戦後一時途絶えた時に、数珠が行方不明になり、再開時には念仏が途絶えた地区で数珠を譲り受けようと探しに行ったという。そして伊那街道を三キロほど北に行った火山（ひやま）地区（駒ヶ根市内）から譲り受けたという。周辺には念仏行事が途絶え、数珠だけを保管しているところがあったという。譲り受けた数珠は以前より細くはなったが、全長は七メートルほどある。大久保では、数珠を背負いカゴに入れて、翌年まで当番の家に預けていたという。

⑥念仏の直会

念仏が終わると直会で、昭和二〇年代から白いご飯とイワシの半身と豆腐汁、漬物などを出し会食した。さらにお菓子も出してくれるので楽しみだった。食事が済むと、トランプやカルタをやって楽しく過ごしてから帰った。

大久保は戦時中以外は、日常、白い飯が食べられ恵まれていた

（注2）長野日報、平成二〇年（二〇〇八）二月十一日、一四四頁参照

〔写10〕東伊那公民館大久保分館

〔写11〕平成二二年（二〇一〇）二月十四日の念仏

という。当時の賄い費用は、当番の家で負担していた。

現在は分館の活動予算なので、ショウケの飯（醤油の味付けご飯）と肉料理と豚汁にミカンなどと、けっこう贅沢になったという。近隣の施設に食事を外注しているので、年寄りが施設の調理場を使って、昔ながらの手料理を作ろうとの声もでている。

かつては午前十時ごろに集合して念仏を行い、食事をして遊んでから午後三時すぎに帰ったが、現在は昼食を取り、午後一時ごろには解散になる。

⑦子供だけの行事・天神様

コウトウネンブツの外に子供だけで行う行事は、三月上旬の寒中休みに行われる「天神様」である。かつては寒くて三月に五～七日の休みがあった。小学校の高学年の男女が夜、集会所に集まってコタツを作って、お菓子やミカンを持ち寄る。食べたり歌ったりして無邪気に一晩過ごすという行事である。

現在は三月の上旬に皆で昼食を食べて、自由に遊んでから帰るという会になった。

■（下伊那郡）喬木村富田　【一覧表・地図番号13】

三、富田上区（上富田）、コト念仏

地元の呼び方　コト念仏、お念仏、念仏

行事日　毎年二月九日、平成二七年（二〇一五）二月九日（月）、十九時から

場　所　（上富田）十一常会・城田宅

行事の特徴　宿に住人が集まって行う念仏、かつては子供の念仏であったが、現在は直会を含め、地区の行事の一つになっている。

参加者　鉦一名、数珠回し四九名、直会のみ参加六名、家族と手伝い五名、合計六一名

話　者　木下俊佐氏（昭和十四年生）、今村洪氏（昭二二年生）、木下令三氏（昭十七年生）、城田忠人氏（昭三一年生）

地区状況（富田の組織）※平成二六年（二〇一四）十二月

上区、一〇九軒・三八二名　七～十一常会、各常会に隣組（一組、二組）あり、コトの神送り担当

下区、一三三軒・四二九名　一～六常会　各常会に隣組（一組、二組）あり、風祭り担当

組に属していない　五軒・七名

◉合計　二四七軒・八一八名

（一）行事の概要

①富田のコト念仏とコトの神送りについて

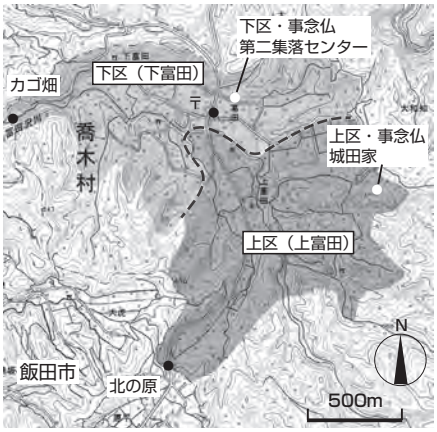
富田ではコト念仏は二月九日、コトの神送りは二月十日に行われる。十日に行われるコトの神送りは、九日に終了する飯田市のリレー式神送りのコースの延長線上にあるため、これまでもその関連が取り沙汰されてきたが、何とも確証のある史実は見られない。若干の関連した聞取りを「富田のコトの神送り」の節で述べることにする。まず、コト念仏について述べる。

②富田のコト念仏・神送りの史料

上区の中ほどにある今村家は、「大売屋」（大瓜屋とも）という屋号で、かつては富田に四軒あった回り庄屋の一つであった。当家の所有している文書の中に「神送り」「百万遍念佛」に関する記述が、次のようにある。

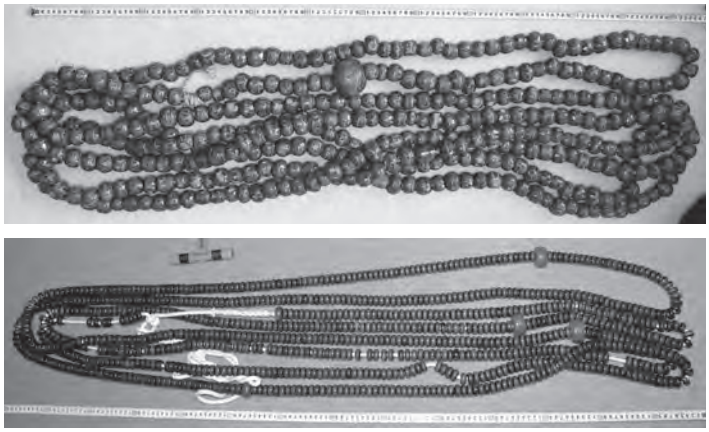
「一　村方二月九日神送り之儀　天明（不明）此年より相始り申候

一　二月八日の夜百万へん（遍）念佛い多し之儀ハ古来より有之尤　大洞平より竹之内、是より大門横道ヲ切り又其中奥市場石橋横道切下斗りニ而念仏申し候へ共、其後文化八年（一八一一）未年より上中此外小塩洞迄家順ニおしまわし念仏申候　此数珠之儀ハ伝右ェ門先祖寄進ニ而相つくり候故何方江持参念仏申候へ而も翌日相返し伝右ェ門方ニ而仕末い多し候仕来也又此たいこ（太鼓）ハ八郎左ェ門方ニ而とう（胴）ヲ出はりかい（張替）念仏仲間ニ而い多し候へ共念仏仕舞候へば八郎左ェ門方江阿つけ置（預け置く）仕来ニ御座候　尤其後仲間ニ而ふせか祢（布施金《伏鉦》）出来候へ共其後ふん志つ（紛失）い多し候　尤下村ニ而も組合念仏有之候」（大瓜屋古文書　平成五年拾弐月二十一日　黒川良一氏　解読に



（国土地理院・電子地図に加筆）

【図4】富田、上区と下区の区分（概要）と主要地点



【写12】上富田の数珠（上）と下富田の数珠（下）

よる）

文中の（　）は黒川良一氏が書き起こした原稿に加筆してあるもので、《　》は調査者の加筆である。文書に年代の記載はないが、次のことがわかる。

a. 神送りは天明（一七八一～一七八九年）に始まり、二月九日に行っていた。

b. 二月八日夜に百万遍念佛を行っているが、これは古くからあった。

c. 念佛は「家順に押し回す」とあり、今日と同じく宿が家押（やお）しであったと思われる。

d. 文化八年（一八一一）には念仏の範囲が拡大された。

e. 数珠は伝右ェ門の先祖が寄進したもので、借りて翌日に返す。

f. 太鼓と鉦があるが、鉦は紛失した。現在、太鼓は使っていない。

g. 下村（下富田、下区）にも「組合念佛」がある。

また、下区には「お火定（ひじょう）様」という阿弥陀堂があり、数珠、鉦、掛け軸、御札の版木が預けてある。堂に掲げてある「お火浄堂由来記」によると、天明年間に住職となった覚眞和尚が、天明二年（一七八二）二月、大飢饉による人々の苦しみを見るに、衆生済度の発願から聖火に身を投じ成仏されたという。この時から「お火定様」と呼ばれるようになり、二月の念仏と関わりがあるのではないかともいわれている。

③コト念仏とコトの神送りの分担

富田は上区下区合計十二の常会があり、各常会はさらに二組の隣組に分かれている。そして一つの組には十戸前後が所属していて、祭りや冠婚葬祭など行事を実施する単位になっている。

富田では、曜日に関わらず二月九日がコト念仏、翌二月十日がコトの神送りである。コト念仏は上区と下区で別々に行い、それぞれに宿（当番の家）が定められる。その順番は一軒ごとの回り番である。従って一度宿をやると百年以上回ってこない。

コトの神送りは上区下区の区別なく行うが、旗（笹竹）を集めの当番は上区だけが担当する。

平成二七年の場合、上区のコト念仏は第十一常会の城田家が宿で自宅で行い、下区のコト念仏は第二常会の桐生家が第二組合集落センターで、いずれも二月九日の午後七時から行った。翌二月十日のコトの神送りは第九常会の二組、九軒が担当した。

④上区のコト念仏、宿のこと

上では二月九日の念仏を「コト念仏」「お念仏」などと呼ぶ。念仏の会場は当番の家で、「宿」「お宿」と呼び、回り番で担当する。

次回の宿に不幸があった場合は順番を入れ替えたり、キリスト教徒などの場合は当番にはならない。最近は自宅だと手狭なので、集会所を借りることも多い。

宿になると、念仏の後の直会も行う。冠婚葬祭と同様に隣組の五～十軒が手伝いにきてくれる。費用は宿が負担してきたが、最近は会費制で行われている。百数年に一度のことなので、親戚を呼び、振舞いはついつい豪勢になる。念仏は上富田住民であれば誰でも参加できるので、多くの村人が集まってくる。

⑤かつてのコト念仏と直会

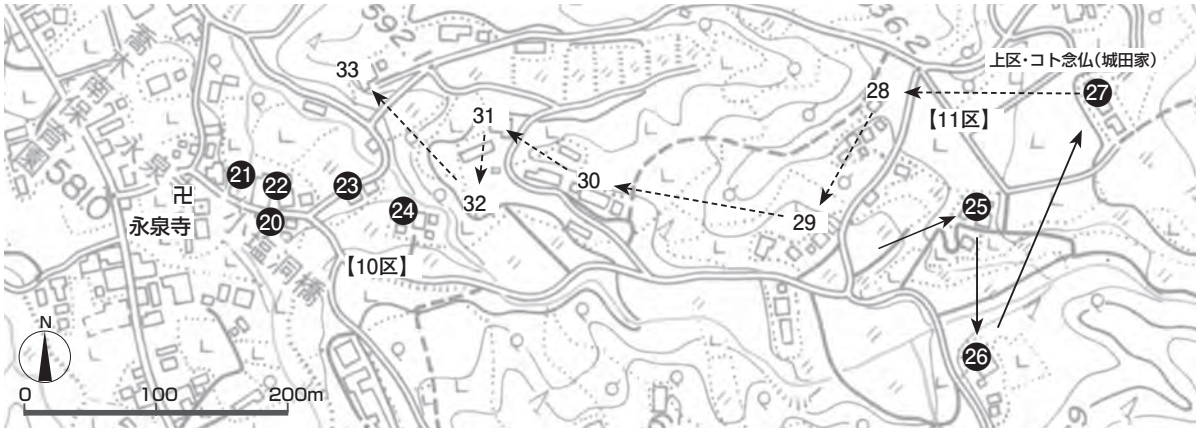
上区の今村洪氏は、昭和三四～三五年頃宿を行ったが、子供には炒り豆とキャラメルなどを配り、大人はお茶を飲む程度だったと記憶している。昭和四〇年には酒盛りが始まり、出席者も二千～三千円包むようになった。

第九区の木下令三氏（昭十七年生）が子供の昭和二〇年代は学校から帰ると四時頃に宿に行き念仏を唱え、家に帰ってから晩飯を食べたという。かつては子供だけで六〇人は参加していた。八畳を二間続きにして、数珠の内側と外側に座っても入りきれないと、二回に分けて数珠を回した。三回に分けたこともあったという。

子供が帰ると、今度は年寄りなどの大人が数珠を回し、後片付けをして、近所の者たちが残ってお茶を飲んで散会となった。

念仏から帰るときには、炒った豆（二〇～三〇粒）と米が少し入った小さな紙の袋と御札をもらった。紙袋には豆とミカンや干柿が入っていることもあったし、賄いの良い家にいくと、豆が砂糖でとじてあったりした。豆は家に帰るまでに全て食べてしまった。昭和五〇年代の半ばごろから、子供の参加が減り大人が増え始めた。

直会は平成五～十年頃から盛大な会になっていった。そして平



【図5】上区・コト念仏の宿の回り番状況
（数字は平成の年号）

（喬木村全図一万分の一に加筆）

上富田の念仏（城田忠人宅にて）

下富田の念仏（第二組合集落センターにて）

成二四年ごろに参加費を一人二千円と定め、タライ（寿司桶）の数、ビール、酒の量など申し合わせをすることになった。

⑥数珠と鉦と版木など、念仏の道具と準備について

上区の大数珠、鉦、御札の版木は、今村家で保管している。数珠は四代前のおばあさんが手作りしたといわれ、宿に貸し出している。材料は桐で長さ約十メートル。珠が三九三個、大きな珠が一つである。前述の文書の数珠より後のものと思われる。

鉦は、大売屋の文書に見られるように紛失したままであったのか、長らくドンブリを金属の箸で、鉦代わりに叩いていた。現在使用している鉦は、平成二〇年に第九区の木下令三氏が寄贈したものである。

念仏は座敷で行われ、床の間には「奉唱大念佛百万遍所」の掛け軸がある。家人が書いて、普通の掛け軸の上に仮貼りする。木下令三家が三〇年前に宿をやった時には、床の間の掛け軸も念仏の後の直会もなかったという。掛け軸は二〇年ほど前から始まった新しい慣習であるという。

宿の城田家では、前日に今村家から数珠、鉦、版木を預かり、当日に御札を一〇〇枚刷った。昨年の余りが七〇枚束ねてあったが、ついつい新調したという。直会の帰り際に御札を配る。

（二）実施状況《平成二七年二月九日（月）》

【念仏】

十九時〇五分　鉦を叩く役の木下令三氏あいさつ

十九時〇六分　「合掌、礼拝、お直り下さい。五穀豊穣、無病息災、家内安全を祈念してお数珠回しを始めます。」

十九時七分～一六分

ナムアミダブツ（三回）、ナームアーミダブ（繰返し）

九分三〇秒、約二八〇回念仏を繰り返す。

十九時十七分　「合掌、礼拝、お直り下さい。」

【直会】

十九時二五分～二〇時二〇分

お宿あいさつ、城田忠人氏（昭三一年年生）

献杯、昨年のお宿・木下家の奥さんあいさつ

〔写13〕上富田の御札（右）と下富田の御札（左）

〔写14〕上富田の直会（右）と下富田の直会（左）

宿・城田忠人氏は分家して四代目、宿が回ってきたのは始めてである。城田家は十一常会二組九軒目で最後、来年から宿は十一常会一組九軒へ移る。各組では一軒ごと順番に宿となる。

①直会について

念仏が終了すると長机が二列に置かれ、料理で埋め尽くされる。オードブル盛合せ、巻きずしなど盛合せ、フルーツ盛り合わせなどで、漬物の丼、ボタモチの重箱もあった。飲み物は日本酒二合瓶、ウーロン茶、子供たちにジュースが出されていた。出席者約六〇名の内、小学生以下の子供は六名ほどであった。

十九時半頃に始まり、二〇時を回ると子供ずれの家族から席を立ち始め、開始から一時間後、二〇時二〇分には全員が城田家を後にした。玄関では城田氏が念仏に参加してくれた御礼をいいながら御札を手渡し、子供たちには、準備しておいたお菓子などが入った紙袋を渡した。

②コトボタモチのこと

念仏の日にはボタモチを作って食べたり、翌朝まで床の間に供えたりする。木下令三家のボタモチは塩味である。現在のボタモチは砂糖で甘くしてあるが、かつては塩味が多かった。「アンコもきな粉も塩味にする。塩味の方がたくさん食べられる」という。見た目は同じである。昔はゴマのボタモチはなかった。

八年前に九二歳で亡くなった上富田の古老（オバア）も「昔は皆、塩だったぞ」と教えてくれたという。「コトボタモチ」と呼んでいた。上久堅で出会った古老も「昔は砂糖が尊かったので塩味だった」と語っていた。

■（下伊那郡）喬木村富田　【一覧表・地図番号14】

四、富田下区（下富田）、コト念仏

地元の呼び方　コト念仏、お念仏、念仏

行事日　毎年二月九日、平成二七年（二〇一五）二月九日（月）、十九時から

場　所　（下富田）第二組合集落センター

行事の特徴　宿の家に住人が集まって行う念仏。およそ一三〇年に一回、宿が回ってくる。

参加者　大人三三人、子供五人、幼児1人、合計三九名

話　者　木下俊佐氏（昭和十四年生）、木下昭司氏（昭十八年生）

（一）行事の概要

①宿について

宿は第二常会の桐生あい子宅で、第二組合集落センターで行った。下区のコト念仏の宿は、第一、第五、第六、第四、第三、第二常会の順番に回っていく。

平成二七年は、第三常会から第二常会に宿が受け継がれてから十七年経ち、第二常会最後の宿であった。

②念仏の道具（数珠、鉦、掛け軸、版木）と準備

下区の道具はお火定（ひじょう）様の阿弥陀堂に、数珠、鉦、御札の版木、掛け軸が保管されている。檀家五戸が管理し当番があり、数珠などを借りに来た常会に渡している。念仏の二週間ほど前になると宿の家に所属する隣組の衆が集まって、版木で御札の印刷が始まる。面倒な場合は、印刷したりコピーする場合もある。

御札は念仏に出席した家に配るだけではなく、一三〇枚ほど準備して全戸に配る。刷った御札は六つの常会の常会長などに渡して配ってもらう。

数珠の長さは一〇・五メートルほどで、大珠三個、中珠二個、珠約九一六個である。大きな珠を「でけぇジュズ」と呼んでいる。鉦は木枠に吊り下げて叩く。

③かつての念仏

コト念仏は子供主体の行事ではなかったが、かつては多くの子供たちが参加していた。

念仏が始まる際に、古老が行事に関する話をして、一家繁栄、無病息災などを祈願し、数珠を右回り（時計回り）に回して拝んだ。現在は、常会長、お宿の主人のあいさつが慣例化している。

④炒り豆から直会へ

木下昭司氏（昭和一八年生）は、昭和三五、三六年頃に宿が回ってきて、イロリで子供たちに配る豆を炒っていた覚えがあるという。訪れた子供たちに、お土産として茶封筒や、果樹園の袋掛け

【図6】下区・コト念仏の宿と集落センター、阿弥陀堂

（喬木村全図一万分の一に加筆）

の紙袋に豆と温泉ヌガー（飯田市・外松の製品）を入れて配っていたこともあった。皆、お土産の炒り豆をかじりながら帰った記憶があるという。

炒り豆のお土産が昭和四〇年代末には直会になり、昭和末頃からさらに豪勢になっていった。平成五～十年ごろが最も盛んで、第二常会長・木下勇人氏によると、平成十年頃に話し合いをして、お酒、さかなを制限し、ビールは出さないなど、宿に負担がかからないように工夫した。

それでも人数を予測して折（寿司桶）を準備するなど費用はかかる。親戚の少ない独居老人などは大変である。

（二）実施状況《平成二七年二月九日（月）》

【念仏】

第二組合集落センターで宿主は桐生あい子氏が準備を行う。床の並びに「奉唱大念佛百万遍」の掛け軸をつる。

十八時三〇分　第二組合集落センターへ、住民が集まってくる。

十九時　コト念仏と神送りの説明

（木下俊佐氏・コト念仏の歴史に関すること）

十九時二〇～二五　念仏、数珠をはさんで内外に分かれる。

（始まりのあいさつ）第二常会長・木下勇人氏

「それでは念仏を始めます。鉦が終わるまで回していただきたい。お数珠はまたがないように。

大きい数珠が来たら自分の願い事をすること。子供さんは自分の勉強のことを願って、年寄りの方は、長生きができますようにと、心の中で願って下さい。

「ナムアミダブ」で、最後に「ナムアミダブツ」です。」

（念仏が始まり、鉦の音がだんだん早くなる）

「百万遍になりましたので、「ナムアミダブツ」で終わります。第二常会最後ですので、念仏を一五〇回やりました。ご利益があると思います。」

【直会】

十九時三〇～二〇時二〇分

※子供は遠慮してもらいたいと学校からいわれているが、校長に話をしたので特別に許可

（料理）

オードブル・五皿、ボタモチ・五皿、フルーツ盛合せ・五皿、漬物盛合せ・五皿、焼き鳥・唐揚げ盛合せ・五皿、その他漬物、煮物、デザートなどの重箱、日本酒二合瓶、ウーロン茶など。

最後は全員起立して一本締めで終わった。

■（下伊那郡）喬木村富田【一覧表・地図番号15】

五、富田、コトの神送り

地元の呼び方　コトの神送り、送り神

行事日　平成二七年（二〇一五）二月十日（火）

場　所　上のお宮（上区の諏訪神社）からカゴ畑（第一常会の西のはずれで飯田市下久堅との境）に送る

行事の特徴　上区の常会の組が順番に担当して旗（笹竹）を集めて焼却する。下区は風祭を担当するため旗集めは行わない。

参加者　第九常会の二組（九軒）

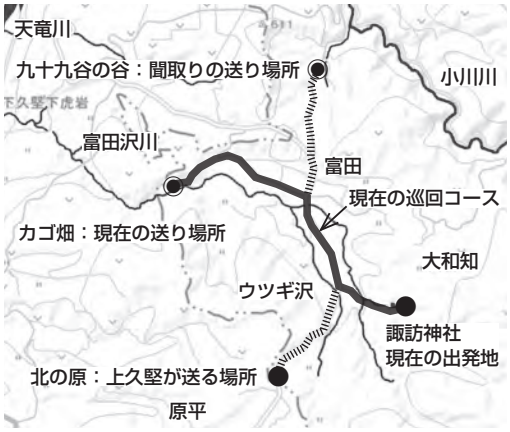
話　者　木下俊佐氏（昭和十四年生）、木下令三氏（昭十七年生）

（一）行事の概要

①コトの神を送る場所

現在、集められた旗（笹竹）は第一常会のはずれから富田沢川を下り、飯田市下久堅下虎岩境の川岸（字・カゴ畑）で焼却している。かつては小川川支流の九十九谷の沢に送ったという話もある。それは上久堅から送られてきた大量の旗を受け継いで送ったということであった。次のような話である。

第九常会塩田の木下令三氏は、二〇歳（昭和三七年）頃、第一常会西端の清水家に籾すりに行った際に、当時八〇代のおばあさんが嫁に来た時、この家の年寄りから聞いた話として、かつては「上久堅の旗を九十九谷の谷（現在の原家の手前あたり）にびしゃりに行った」ということであった。詳細は伝えられていないが、昭和三七年（一九六二）から逆算すること八〇～一〇〇年前のこ



（国土地理院・電子地図に加筆）

【図7】九十九谷の送り場所の推定

〔写15〕当日の朝、各部屋を祓う（下富田・木下俊佐宅にて）

とであり、幕末から明治初年頃のことになる。

木下令三氏は後に、飯田市上久堅柏原（原平）でそのことを古老に尋ねたところ、「柏原ではウツギ沢にしかびちゃらんぞ。」ということで、その先のことはわからなかったという。「ウツギ沢」とは、上久堅の人たちが「北の原」と称しているところで、谷を水田づたいに下ると、富田地区内のウツギ沢に流れ込む沢である。

②現在の富田のコトの神送り

コトの神送りの二月十日になると、富田では、上区・下区ともに各家では旗を作り、屋内を祓い近くの辻に置く。それを当番が上区・下区の順番に集めて回り、富田沢川の川下に送る。今日は焼却している。富田では、古くから神送りは子供の行事ではないという。

旗を集める当番は、上区（七～十一常会、上富田）が担当し、各常会の組（隣組）ごとに行っている。五つの常会でそれぞれ二組ずつあるので、順番に行うと十年に一回当番が回ってくる。平成二七年は、第九常会の二組が当番で、塩田と呼ばれる地域の九軒が手分けして、六軒（男性）が旗を集め、三軒（女性）が常会所（第九組合集落センター）の掃除と直会のお茶の準備を行った。担当の組以外の者は参加しない。

かつて昭和二〇年代は、常会ごとに集め、それぞれの当番がカゴ畑に送りに行っていたという。それらが統合され、上区（七～十一常会、上富田）がコトの神送りを担当し、下区（一～六常会、下富田）は四月に行われる風祭りを担当するという分担に分けられた。

以前は早朝に集めていたが、現在は午後に行っている。

③旗を作る

富田では、疫病神を送る短冊を付けた笹竹のことを「旗」「送り旗」「神送りの旗」「送り竹」などと呼んでいる。当報告では富田の場合は「旗」と呼ぶことにした。

旗には幅十五センチ前後で長さ四〇から七〇センチほどの短冊をつける。障子紙や中折紙で作り、墨書する。この部分を「旗」と呼ぶ人も多い。上区の今村家では、二枚の白い中折紙（幅十五センチ、長さ二五センチ）の間に赤い中折紙（幅十五センチ、長さ二五センチ）を一枚はさむ。全長七〇センチほどの短冊になる。

墨書は中央に「御事の神送り」「御事の風之神送り」「御事の悪神送り」などと書き、その下に「馬」という文字を家族の人数分書き込む。さらに「馬」の下に「子年の男」「巳年の女」など干支と性別を書く家もある。富田では、飯田市で見られる十五センチ角ほどの正方形の短冊は用いない。

笹竹の部分は「マンダケ」と呼ぶスズダケなどの笹類を用いる。細く二メートル前後の笹で先の二枝を残して使っていた。上富田は養蚕が盛んだったので桑の棒（枝）を使う家も多く、名古屋方面にナンテンを出荷していた時は、その枝も使った。

このマンダケの上の方に、洗米・爪・ボンノクボの毛を紙に包んでこよりや水引でしばり付けておく。豆を入れる家もあり、現在では洗米だけという家が多い。旗づくりは神送りの前日に済ませておく家が多い。

二月十日、コトの神送りの日の朝、家の各部屋を開け放っておいて、旗でお祓いをして「コトの神（疫病悪病の神・風の神）はこれに乗って出て行け」という。旗は最寄りの辻に立てておく。

（二）実施状況《平成二七年二月十日（火）》

①日程

十四時　第九常会二組の組長宅に集合
十四時六分　上のお宮着（諏訪神社）男性六名集合
　石段の下から社殿に向かい一礼
十四時十分　打ち合わせして出発
　軽トラ二台、ワンボックス軽一台
十四時五〇分　薪を拾ってカゴ畑前の橋着
十四時五四分　旗を降ろし、新聞と薪を加えて点火
十五時二〇分　後片付け
十五時四〇分　常会所で直会へ

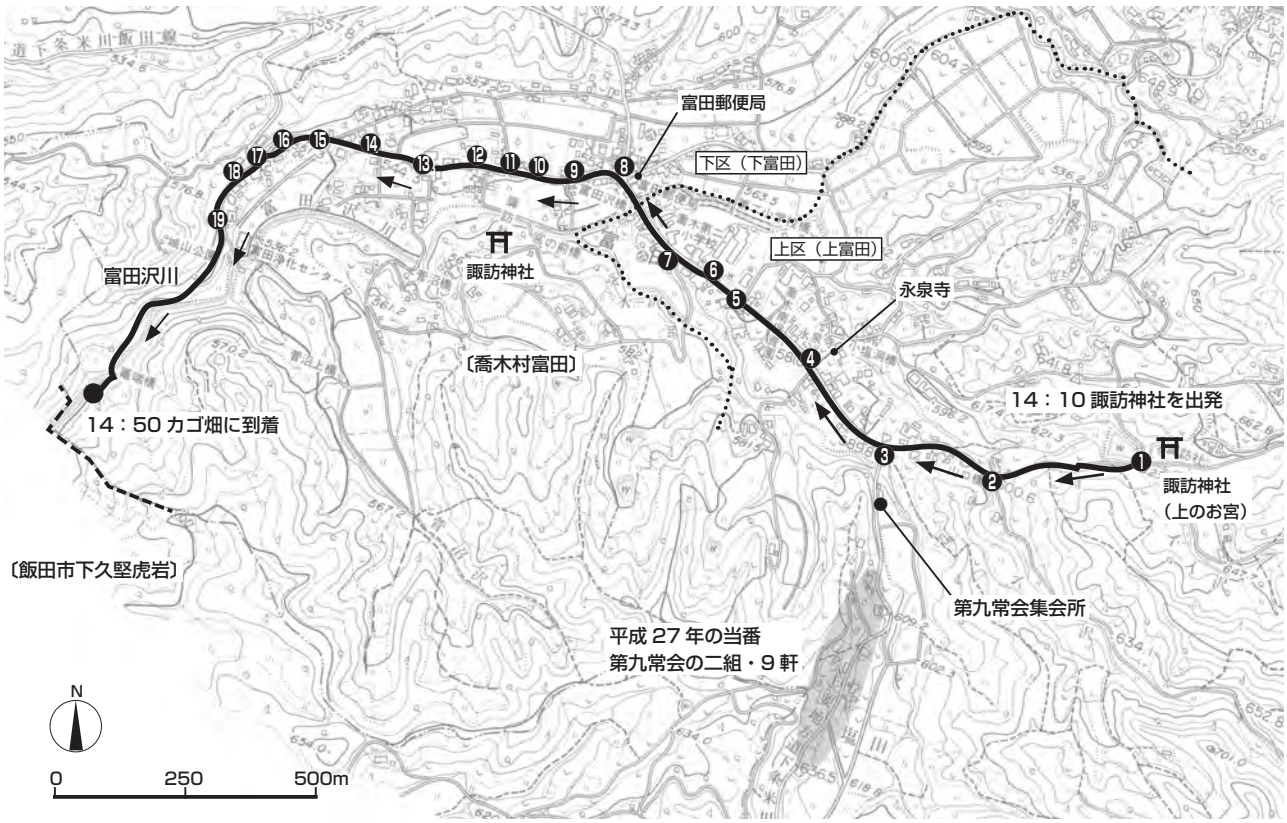
第一常会の西側はずれから富田沢川を二〇〇メートル下流に向かい、橋を渡ったところの字・カゴ畑で旗を焼却した。

富田沢川は飯田市下久堅下虎岩地区を通って天竜川に至る。かつては川に集めた旗をそのまま投げ込んでいたが、環境衛生の問

〔写16〕下富田・木下昭司宅にて、旗づくり

〔写17〕同右、旗で家の中を祓う

〔写18〕同右、旗を辻の石垣に刺す



（喬木村全図一万分の一に加筆）

【図8】富田のコトの神送りの順路（黒丸数字は、各家からの旗が置いてある辻、下表と照合）

（各辻と旗の本数）

❶上のお宮（諏訪神社）前……二本
❷口橋……五本
❸アラヤ……十本
❹亀屋（永泉寺かど）……二三本
❺木下屋（小学校バス停向）……八本
❻キキョウ屋……四本
❼ナカゴ屋……十本
❽富田辻……一本
❾出店……四本
❿イズミ屋……一本
⓫マチヤ……二本
⓬ハタモト屋……八本
⓭梅屋……二本
⓮中島……六本
⓯宮坂入口……二本
⓰西の宮……一本
⓱フルイ屋……一本
⓲木下……一本
⓳城下……二本
合計九三本

〔写19〕辻の旗（❺の様子）

〔写20〕軽トラックで、上から下へ旗を集めて回る

〔写21〕集めた旗は、村境のカゴ畑で焼却する

題から、平成十年ごろから焼却することになった。道中で鉦、太鼓、唱え詞などはない。

来年の当番は十常会の一組、再来年は二組である。

■（下伊那郡）喬木村氏乗【一覧表・地図番号16】

六、氏乗（うじのり）、コトの送り

地元の呼び方　コトの送り、コトウオクリ

行事日　毎年三月八日。旧暦の二月八日であったが、月遅れの三月八日にした。

場　所　集落の最南端小豆畑から小川川沿いに北に四キロメートル余、くるみ沢手前の大岩のたもとに送る。

行事の特徴　藁の輪で作るオカグラを担いでお白餅を配りながら、送り笹竹を集めて送る。

参加者（話者）

区長・伊藤勝司氏（昭和二〇年生）　準備のみ参加

役員・木下欽也氏（昭和二二年生）　管理部祭の当番として参加

当番・本島喜代美氏（昭和四八年生）下二常会、

下代表、子供四名（本島氏の子供）

当番　萩原博明氏（昭和四年生）中反常会、中反代表

当番　多田俊文氏（奥さん）　貸又常会、貸又・本谷

（一）　行事の概要

①氏乗区で作成した「コトの送り」解説書

※次の文章は、平成の初め頃、氏乗で書かれたもので、簡潔な解説であるため全文掲載する。筆者など不明（句読点等加筆）

「事の送り　民俗行事　氏乗部落

昭和五四年（一九七九）までは鬼ヶ城洞線に民家数軒あり、屋号大屋敷と本谷線小豆畑より隔年におこなっていたが、大屋敷が本谷部落に出て、鬼ヶ城洞が無住となった為に、以後は小豆畑より出発となる。当時は氏乗城山と部落境最後の地、小川川の端に隔年納めていた。

組織は氏乗集落（区）において年番制で廻り、下氏乗、中反、貸又と本谷で一名ずつとし、年番は魚重一重持参、他の費用は氏乗区で負担する。午後一時出発地、小豆畑に集合、祭事の支度、藁を束ねて輪にしたオカグラに幣束四本を立て、竹の棒二本で担ぐ、此のオカグラに重箱を乗せその中に洗米一合すって水でねった白粉、此を（ゴフ）と言い、参加者に与える支度が出来れば、年番にて三拝祭事を終わり、御酒を頂いて午後三時出発。道中各家庭より道路傍に出されている送笹竹を集め、集落最後の地点に納めて終わる。昔は行く道中空鉄砲を撃つなどした。子供も多かったので、多勢一緒に送ったが、今では車に乗って年番だけで集め、小川川の端へ送り納めている。

各家庭での行事

1、朝　笹竹を切って来る

2、色紙又は障子紙等長さ約一メートルぐらい、幅十五～十六センチぐらいに

3、奉納　送り　奉納　風之大神　と書く

4、家族全員のボンノクボの毛を少しずつ切って送り紙の頭に取り付ける

5、家族の人数だけ風之大神と書いた下側に馬と言ふ字を書く

6、此の送り笹竹を家中の各室を祓って廻り終ったら事う送りの通る道路に出して置き持って行ってもらう

7、此の日、各家庭　コトウボタモチを作り供へ頂く」

【解説文より】

❶「当時は氏乗城山」にも隔年で収めていたとあるが、参加者の記憶にはなかった。鬼ヶ城山の山麓と思われる。

❷　各家庭で準備する笹竹を「送り笹竹」と呼ぶ。

❸　4、文字を書く短冊を「送り紙」と呼んでいる。

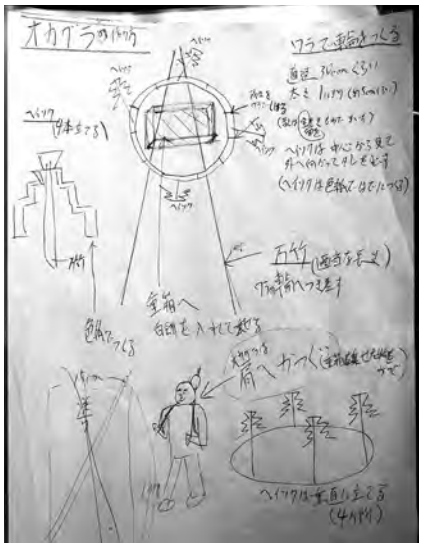
❹　6、コトの送りを「事う送り（コトウオクリ）」とも書いている。なお、当番が記載する記録帳には「氏乗区　事の神送帳」とある。当番や役員の人たちは口頭では「神送り」といっていた。

②コトの送りの変遷（明治の頃の話）

萩原博明氏が若い頃、祖父たちに明治時代の話を聞いた

（国土地理院・電子地図に加筆）

【図9】喬木村・氏乗集落の位置図



〔写22〕オカグラの作り方（メモ）

※（氏乗で作成）、イラストにメモ書きしてある。

・輪の直径は三〇センチくらい

・太さ一握り（約五センチくらい）

・所々をワラでしばる（昔は全面を巻き縄）

・ヘイソクは垂直に四本立てる

・ヘイソクは中心から見て外へ向かいタレを出す

・（オカグラをかつぐ竹）万竹（マンダケ）

・重箱へ白餅を入れて乗せる

・オカグラは肩へかつぐ（重箱を乗せて）

・オカグラ作りは当番が行う。

ところでは、かつてのコトの送りはオカグラをかついで、旗を持って家の中まで入り込んでいた。オカグラは毎年作る（今と同じ）ものであるが、当時の旗とは、曹洞宗真浄寺の末寺である梅春庵にあったもので「五色の旗」と呼ばれていたものを借り出していた。そのオカグラと五色の旗を当番が持って、各家の床に土足で上がり込んで、中から疫病神を祓い出していた。ワラジ履きは簡単には脱げないので土足で上がり込んでいた。

かつての家屋はほとんどが板間で多少汚れても大丈夫であったが、明治の終わり頃には畳が普及してきた。すると畳が泥だらけになるということで、前庭などにムシロなどを敷いて、屋内に見立て、巡回して来た当番が、そこでお祓いをするようになった。ところが、河岸段丘が険しく、道から各家に小路をいちいち登るのが大変で、各家で旗を作って各自でお祓いして道端に出しておけば、当番は集めるだけでよいということになった。明治の終わり頃のことと聞いているという。

だから五色の旗をやめても、オカグラの幣束に五色の紙を使うようになった。この五色の旗は、行者が梅春庵で行を行った時に置いていったものといわれている。

梅春庵は明治八年に氏乗分校となり、昭和三三年に廃校となった。現在は明治四〇年代に記念植樹された見事なシダレザクラで知られているところである。この頃から氏乗に別家（分家）が増えてきたという。

萩原博明氏は子供の頃から祭りや行事に出て、年寄りから昔話や行事のやり方を聞くのが好きだったという。

③小川川流域のコトの送り

萩原博明氏によると、小川川の下流の小川地区でもコトの送りを行っていたが、明治の新暦になってから氏乗と同じく行事日が様々に移り変わり、結局、途絶えてしまった。また小川には医院が開設され医者に掛かれるようになり、疫病払いの必要がなくなったからともいう。

現在の当番

氏乗には六つの常会があり、さらに一～三つの隣組に分かれている。

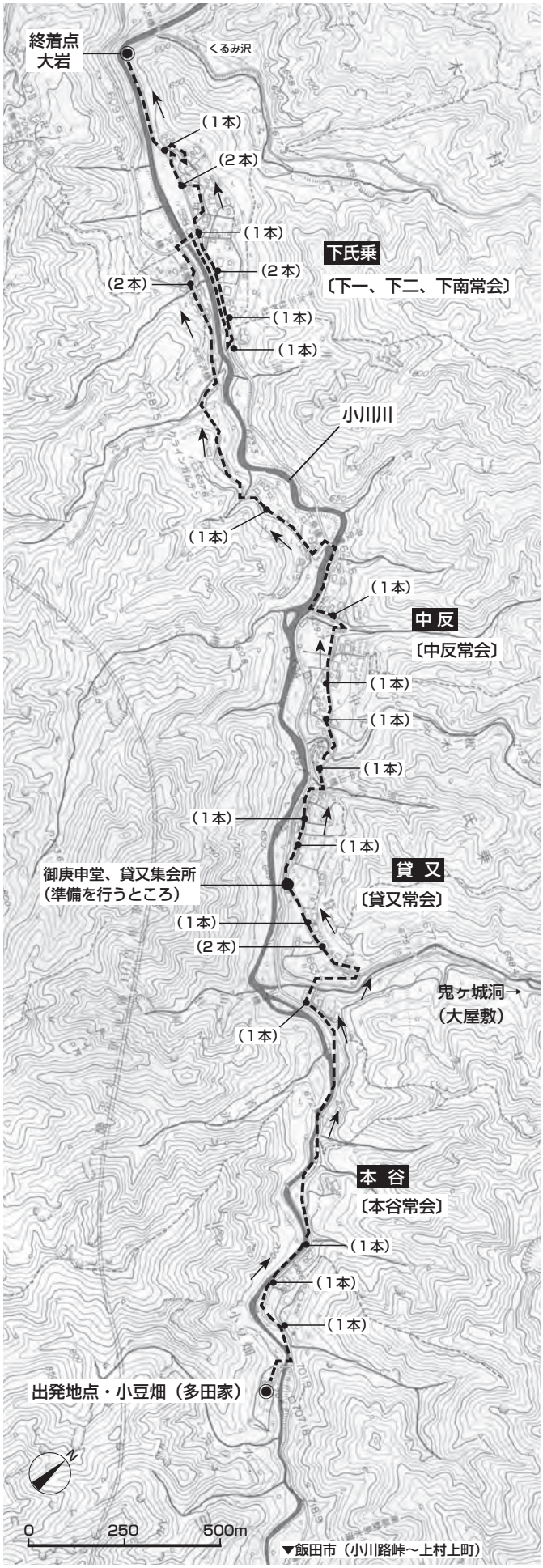
下一（しもいち）常会　1組
下二（しもに）常会　1組
下南常会　1組
※合計三〇軒、当番一人出る

中反（なかぞり）常会　3組
※合計十五軒、当番一人出る

貸又（かしまた）常会　2組
本谷（ほんたに）常会　2組
※合計十五軒、当番一人出る

「下」の当番は三〇年に一回、他の地域は十五年に一回当番になる。当番は「年番」ともいう。

【図 10】氏乗の六つの常会と「コトの送り」の順路、送り笹竹の本数



（喬木村全図一万分の一に加筆）

▼飯田市（小川路峠～上村上町）

氏乗も止めることを話し合ったらしいが、明治期は道がなく、簡単には医者に掛かれないので行事を継続することになった。病気にならないことを願うこの行事では、安心を得ることが大切だったので、続けられてきたという。

氏乗は南東の小川路峠を越えれば上村の上町であるが、道が険しいのでほとんど交流はなかった。上久堅の越久保、喬木村の大島へは道が通じ交流があったが、冬は閉ざされることもあった。飯田の市街地は、子供の頃には一、二回しか行ったことがなかったという。足が丈夫なので日帰りで歩いて行った。

④宿について

前述の行事の解説文のように、かつては最上流の小豆畑の多田家と後に大屋敷（屋号）の二軒が一年おきに宿となっていた。宿は、当番が行事の準備を行う場所である。その後、小豆畑の多田家だけが宿となり、平成二〇年頃から現在に至るまで、御庚申堂・貸又集会所を宿として準備作業を行っている。

かつては毎年当番が変わっても、小豆畑の多田家でオカグラなどの作り方を細かく教えてくれたので覚える必要がなかったが、現在は当番だけの作業なので、オカグラの作り方、幣束の切り方などサンプルやメモを作り、翌年への申し送りとしている。

⑤オカグラについて（萩原博明氏、製作中の話）

「これは「オカグラ」というが、昔は「オヨメサン（サマ）」ともいった。凶事なものなので、向こうへ行ったらびちゃる（捨てる）。「オヨメサン」というのは家を出ると二度と帰ってこないという意味で、昔は戻らんもんだったんだがの。」

「オカグラの輪に幣束が四本立っているが、昔は三本で三角形に配置する。手前が開いていて、厄が入り向こう側が幣束で閉じてあるので留まる。だから後ろを向くと手前の口から厄が出て行ってしまうと昔の人は言っていた。担ぐ人は下ろしてはいけない、つまづいてはいけない、もちろん転んではいけないので、始めから終わりまで一人で担いだ。オカグラ自体は軽いものではあるが、神送りの道中は四キロメートルほどあり、最後まで一人で担ぐのは大変であった。

昭和四〇年代末頃から軽トラックで巡回するようになった。オカグラは乗せたままで、途中で下ろすことはない。」

⑤お白餅（オシロモチ）

オカグラの輪の中にお白餅の重箱をはめ込む。「ゴフ」ともいう。コトの送りの一行を辻で迎えると一口分けてくれるので、その場で食べる。味は何も付いていないので美味しいというものではないが、食べると風邪をひかないという。お白餅は米をすり鉢で三〇分ほどすって、水を入れて練る。米はうるち米で水に一晩漬けておく。水分が足りないと硬くなる。

⑥コトの送りの行程

コトの送りは宿で準備をしてから出発する。四キロほどの行程は徒歩であったが、午後から出発しても歩いて回りきれたという。歩いて回る時は、一升瓶と杯を持ち、各家々や辻で待つ人に、「お白餅」を分け、酒を一杯ずつ配った。

お白餅は箸だと滑るので、送り笹竹のマンダケの葉を取って、それですくって手渡す。子供はその場でなめてしまう。

オカグラを担ぐのは大人である。コトの送りは大人の行事であるが、子供が付いて歩いて、旗（送り笹竹）を集めて手伝っていた。鉦や太鼓や掛け声もないが、子供たちが騒いでいる気配で行列が来たことを知り、家から人が出てくる。道端に立っていないと酒もお白餅も受けられないので、昔は辻々に住民が立っていた。現在も酒とお白餅を配るが、軽トラックで集めるようになってからは、ほとんど路上に住民がいない。

下氏乗の送り場所に到着すると、お白餅も酒も残ったものは全て処分する。場所はくるみ沢橋より上流の大きな岩が張り出しているところで、道から川に向かって投げ込む。その後解散する。厄をもってきてしまうので、直会などはない。

（二）実施状況《平成二七年三月八日（日）》

①日程

十三時頃　貸又集会所に集合、幣束・お白餅作りは集会所内で、オカグラは玄関前の軽トラックの荷台で作る。

十三時五〇分　オカグラ、お白餅など完成

集会所内の片付け、お祓いの準備（酒紙パック）

〔写23〕集会所前の軽トラックの荷台でオカグラを作る

〔写24〕集会所（庚申堂）でオカグラを供えて祝う

〔写25〕子供が手伝って辻の旗を集める

十四時三八分　お祓い（二礼二拍手一礼）
十四時四〇分「神送り、おめでとうございます。乾杯。」
「氏乗区　事の神送帳　平成二十四年新調」に記帳
「平成二十七年
当番
下　本島喜代美
中反　萩原博明
貸又・本谷　多田俊文
菓子　二斤
酒　一升
肴は当番各自五百円集金しこれに当てる
お白餅には上新粉使用
庚申堂　平成二十七年三月八日」
※上新粉と記載したが、本物のうるち米一合を使用し、当番の三名は一人五百円ずつ出して、茶菓子を買ってきた。
十五時十五分　コトの送りに出発（発車）
軽トラック一台、乗用車2台
大人4名、子供4名が分乗
十五時二〇分　小豆畑経由
十五時五五分　道端の住民に酒をつぐ（一名）
十六時三分　お白餅を住民に配る（一名）
十六時十六分　小川川のくるみ沢上に到着
◉集めた送り笹竹は、合計二四本
送り笹竹とオカグラを担ぐ。
十六時二〇分　大岩の脇に送り笹竹とオカグラを送る。
残っていたお白餅を分けて食べ重箱だけ持ち帰る。
十六時三〇分　解散、残ったお菓子を食べる。

■（下伊那郡）喬木村大和知　【一覧表・地図番号17】

七、大和知（おおわち）、コト念仏・コト送り

地元の呼び方　コト念仏、コト送り
行事日　（コト念仏）平成二七年一月十七日（土）
（コト送り）旧暦二月八日、平成二七年三月二七日（金）
場所　（コト念仏）無量庵（大和知のお堂）
（コト送り）集会所前から集落巡回、A・B二コースがある。
行事の特徴　輪手と呼ぶ藁の輪のミコシを担いで集落を巡回する。現在、念仏はコト送りとは別の行事として一月に行われている。
話者　横前兼雄氏（昭和九年生）、小沢利広氏（昭和二一年年生）、横前清氏（昭和十年生）ほか、大和知の皆さん
参加者　六名（男三名、女三名）子供一名（男）
地区の状況　大和知区（五五戸）一六三名
第一常会〈二〇戸〉
上（八戸）、下の一（六戸）、下の二（六戸）
第二常会〈十四戸〉
第二（七戸）、南（四戸）、協同（三戸）
第三常会〈二一戸〉
一（六戸）、二（五戸）、三（四戸）、四（六戸）

大和知の神社は大和社（やまとしゃ）といい、神職（シオ様）は忠平（ただひら）家で屋号は神田（じんでん）。竜東（天竜川の東側）はシオ様のいる地区が少ないといわれている。なお、シオ様はコト送り行列には参加しない。

大和知には神田とは別に「禰宜屋（ねぎや）」という屋号の家があるが、長年神事には関わっていない。

（一）行事の概要

①行事の変化の概要

横前兼雄氏によると、大和知では昭和二〇年代頃までコト念仏とコト送りを旧暦二月八日に行っていた。無量庵で行うコト念仏が終わると鉦と太鼓を持って村内を回り、二箇所（現在と同じ）に隔年で風の神を送った。六軒ごとの屋順（やじゅん）（家のある順番）で回る宿番（やどばん）（宿、当番）は、コト念仏とコト送りの両者の準備を行い、執り行っていたという。

現在では、念仏は一月の中旬から下旬に行われるようになり、「数珠回し」と呼びコト送りとは別の行事と考えられている。コ

〔写26〕旗を集め、軽トラックで運ぶ・氏乗

〔写27〕小川川の大岩の脇で川にオカグラを投げる・氏乗

ト送りは、今日でも旧暦二月八日に六軒ごとの当番が行っているが、一月の念仏は隣組（各常会の組）単位で別の当番が行っている。念仏は仏事、コト送りは神事という住民も多い。コト送りは風邪の神を送って、無病息災を祈願するものである。

②一月の「数珠回し」

平成二七年の数珠回しの念仏は、一月十七日（土）に行われた。第一常会（二〇戸）の上組合（八戸）が当番で六軒が参加し、三回ほど回したという。当番が御札を刷って全戸に配った。

御札は「家内安全」「蚕玉様」「大念仏百万遍」などと書いてあるもので、三種類ある。昔は養蚕が主産業だったので、「蚕玉様」も大切だった。

③かつてのコト念仏とコト送り

（昭和二〇年代頃、横前兼雄氏の話）

昭和二〇年代頃のコト念仏とコト送りは、無量庵が拠点だった。無量庵に大きな数珠がある。かつては午後二時頃集まって、当番の六軒の家人で「ナンマイダブ」を唱え、数珠を回した。鉦の有無は記憶がないという。形式的ではあるが、大きな珠が来たら頭を下げて拝む。数珠回しは六人で行うが他の大人や子供が参加してもよい。昔はコト念仏もコト送りも子供がいっぱで、二〇人ぐらいはいたという。

コト送りは念仏を行った無量庵から鉦と太鼓、準備しておいた輪手（わて）（藁の輪のかつぎもの）を担いで出発した。当時は多くの家が旗（笹竹）を出していたので、巡回の道筋は現在のコースより大回りであった。大平（おおびら）（北西の隅）の住民は、富田境の馬草田近くの辻まで旗を出しに来ていた。

輪手と旗を送る場所は二箇所あり、横前昌文（悦郎）宅裏側の山、横前和子宅奥の山林である。いずれも山で、川に直接送るわけではないが、小川川に向かっている。前者をAコース後者をBコースと呼び、隔年で巡行することになっているが、近年は距離が短いAコースが続いているという。

行列では鉦と太鼓は叩くが、古くから唱え言葉はいわない。

④コト送りのお白餅

かつてはコト送りが終わって、無量庵に戻ると米をすって粉にして水で練ったお白餅をもらった。手の平に少しずつであるが、そのまま食べていた。昔の何もない時代でも美味しくはなかったが、風邪を引かないということで、子供も大人も食べていた。

お白餅が配られたのは昭和四四年（一九六九）までである。「祭費帳」には次のようにある。

「昭和三一年　事送祭費帳　旧弐月八日

記

金拾円　色紙代

白米六合

御白餅用　壱戸壱合宛

藁　中折

右　宿番ニテ寄付」

とあり、米六合分で御白餅を作ったことがわかる。

ところが

「昭和四十四年　御事送祭費帳　四月八日

記

一、金参百円

当村会計より収入

一、金参拾円

色紙　中折　代

一、金弐百七拾円

子供に分配せる菓子代

一、藁代

本年はお白餅を廃し代って宿番壱戸拾五円宛を寄付し合計金九拾円を菓子として子供にくばる」

現在は子供の参加者がほとんどなく、参加者の直会の茶菓子代としている。

⑤輪手作り

当番の六軒は午前中に輪手作りを行う。竹を準備し藁で輪を作り、シオ様（神職）に四本の幣束を作ってもらい立てる。進行方向正面が赤で他の三本が白い幣束である。二本の竹の担ぎ棒を取り付ければできあがりである。当番二人で輪手を担いで、手分けして太鼓と鉦を叩きながら村を巡り、道筋の旗を集めて歩く。

〔写28〕行事に使われた太鼓の墨書
コト送りに使われ、破損して廃棄しようとした、締太鼓の刳抜き胴の内側に墨書があった。
「施主神主　忠平相模正福　同　□□」とあり、次に各職人の賃金年号などが記されている。
「寛政三（一七九一）辛亥　富ノ祭二月十七日」
さらに左端に古い年号がある。
「（安）永七年（一七七八）戌　二月吉日
コノ里　神主　忠平石見」
いつ頃からコト送りに使われ始めたかは定かでない。

ミコシの中央の藁の輪を「輪手」、さらにミコシ全体も輪手、ミコシと呼んでいた。「オカグラ」とは呼ばなかったという。

平成十年頃、大和社の拝殿を解体した時に、大変細い角材で作られた四角い神輿形のかつぎものが天井裏から二基出てきた。当時、九〇代の古老たちは「これは神送りで担ぐものだ」と言っていたという。輪手の担ぎ方も、時代ごとに異なっていたようだ。

⑥各家庭にて・旗の作り方

笹竹と紙の旗（短冊）を組み合わせたものを「旗」と呼んでいる。旗には「奉納　風の神御事送り　馬馬馬」と書く。馬は家族の人数分書く。

旗の地の紙は白・赤・緑・白・赤・緑の順に貼りあわせた色紙を使う。竹はマンダケ（主にスズダケなどの笹類）で、頭にはニボシ一～二匹と家族全員の盆の窪の毛を紙に包み、水引でしばっておく。家により異なるが、現在は洗米を入れる家が多い。旗は午前中に辻に出しておく。

（二）実施状況《平成二七年三月二七日（旧暦二月八日）》

平成二七年は小沢利広氏（昭和二一年生）から六軒が当番（宿番、宿）で小沢氏が世話役（当番頭）であった。

①準備

現在の神送りは、藁の輪作りなど下準備をして、お宮の集会所に午後二時に集まる。

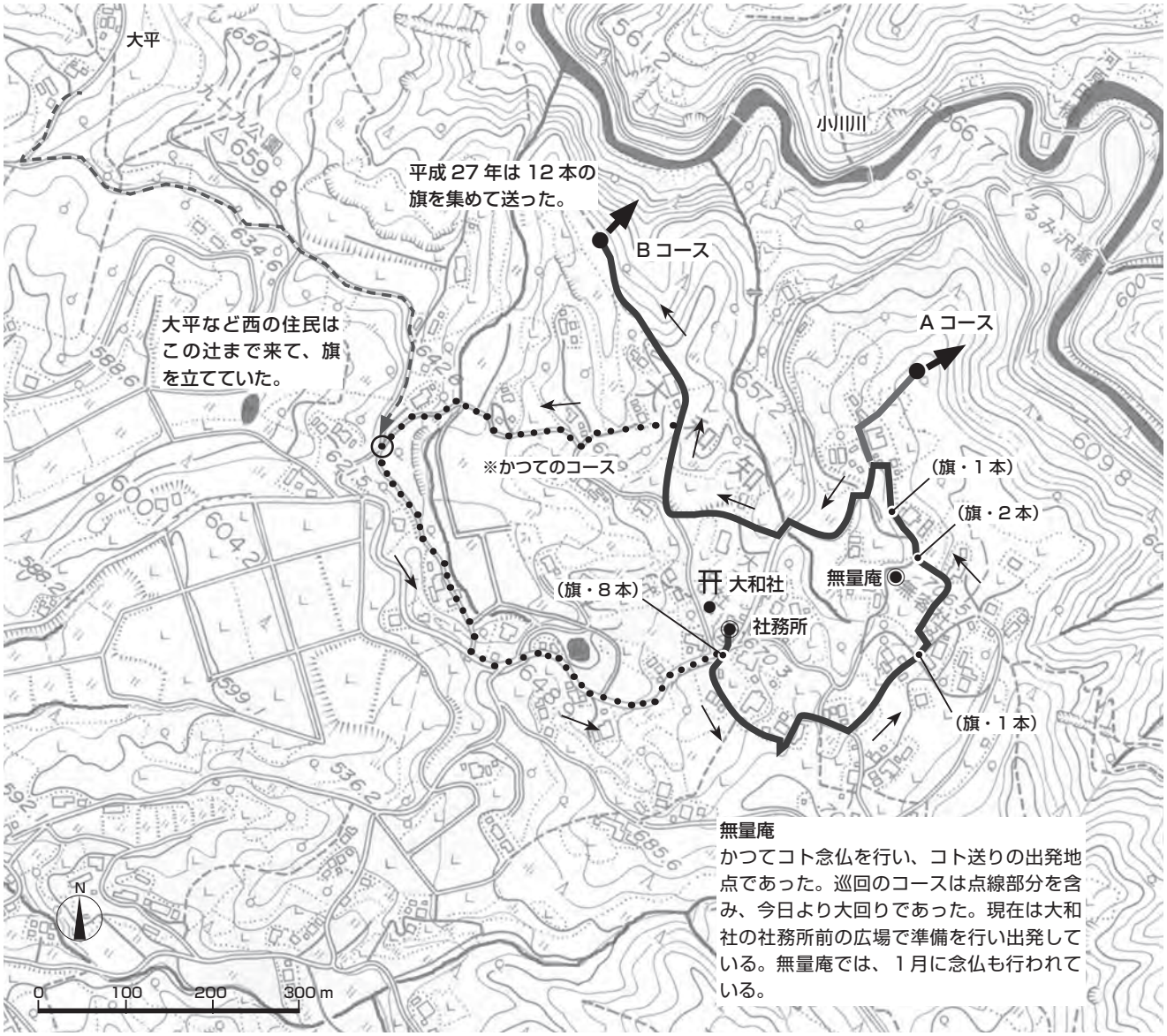
藁の輪、直径五〇センチ（外径）、幣束は四本、正面が赤色であとの三本は白い紙垂の幣束を差す。幣束は宮司の忠平氏（現区長）が作る。輪手の担ぎ棒の竹の長さ二・三メートルほどある。太鼓と鉦は昨年新調した。

順路は過去三年間Aコースだったので、平成二七年はBコースとした。参加者の古老の中には、「うるう年にはコースを変える」と聞いたことがあるという人もいた。

②日程

十三時四五分　準備開始（輪は当番頭が前日に作った）
十四時十五分　出発
十四時五六分　B地点着（十二本集めて送った）

【図 11】大和知・現在とかつての巡回コース　（喬木村全図一万分の一に加筆）



〔写29〕色紙を貼りあわせた旗

〔写30〕なだらかな丘陵地帯を行列が行く

十五時二〇分　直会

行列の順番は、鉦（男）と太鼓（男）、輪手（男二人）、旗（女二人）、子供（一人、春休み中）。コースは旧道、赤スジ、最後は雑木林の中を歩いた。

③旗の出る家、出ない家

平成二七年は回収した旗が十二本（全五五戸）であった。昭和五〇年代まで、ほとんどの家が旗を出していたので五〇本近く集まった。ところが平成に入って少なくなった。

七〇歳代のお年寄りが元気な家庭で、「明日はコト送りだから旗を出しなさい」としっかり意見が言える家は旗がでるという。ところが息子や嫁が「仕事に行くのが忙しいんです」と言うようになると、その家は旗が出なくなるという。

④コトボタモチ

昔は「コトボタモチ」を旧二月八日朝に作って昼に食べた。近年は夜に食べるともいう。

平成二七年は旧暦二月八日が三月二七日で、春分の日より後になっている。この年は春彼岸にボタモチを作らないという家もある。「コト送り」の「コトボタモチ」より早くボタモチを作ってはいけないといわれているからである。

■（下伊那郡）喬木村大島　【一覧表・地図番号18】

八、大島、コト送り・念仏

地元の呼び方　コト送り、念仏

行事日　両者ともに二月八日（昭和六〇年ごろに中断）

場　所　コト送りは集落域、念仏は阿弥陀堂（会所）。

行事の特徴　コト送りを朝に済ませて、午後に念仏と直会を行う。

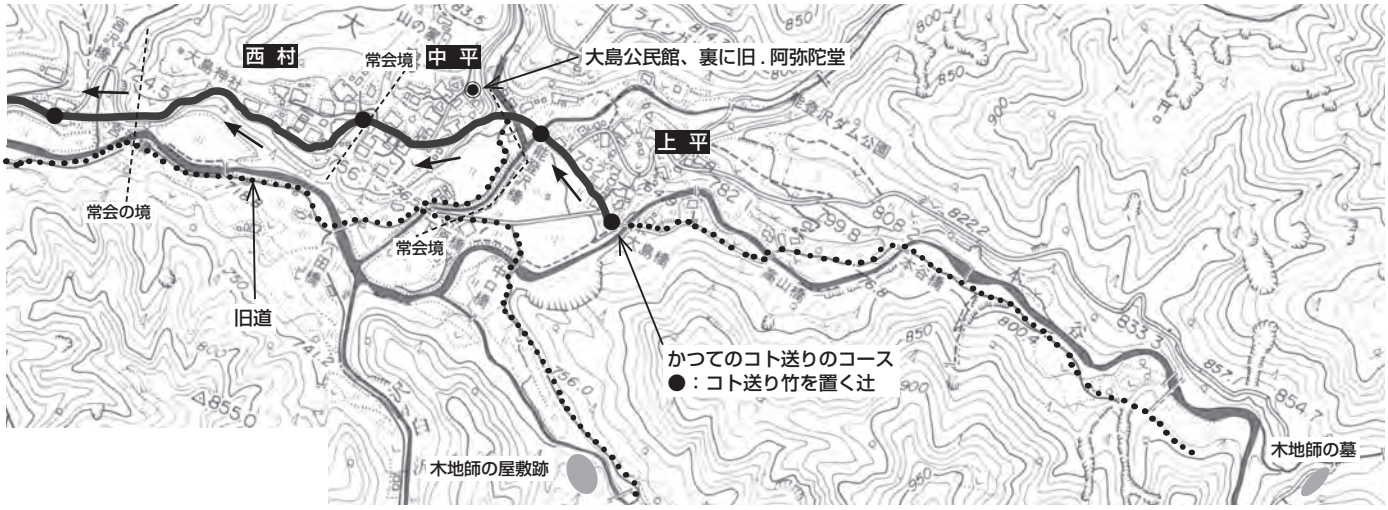
話　者　区長・山内光明氏（昭和十六年生）、山上賢亮氏（昭和十六年生）、筒井正司氏（昭和十八年生、村議会議員）

地区の状況　大島の四つの常会（下流側から）

牧畑、西村、中平（なかだいら）、上平（かみだいら）

戸数と人口・昭和四一年　七二戸　三六〇人

平成二七年　四四戸　九八人



【図12】喬木村大島地区・かつてのコト送りのコース図

(一) 行事の概要

①年番制度

大島には「年番制度」があって、十軒ずつが一年間、当番になる。常会などに関わりなく道に沿った回り番である。コト送りだけでなく他の行事にも用いられるので、現在も使われている。今は四〇戸余なので、四年に一回ほどで当番が回ってくる。今年は西村常会から九名と中平から一軒の合計十軒である。体の不自由な人と空き家は外していく。

年番は五月八日の花祭りも担当する。さらに「小祭(こまつ)り」と呼ぶ小さな神様の祭りが十余箇所ある。それぞれ小さな祠があって、山の神、秋葉様、津島様、蚕玉様などが散在し、祭り日が決まっている。一～三名で手分けして、幣束と御神酒を供えてお祀(まつ)りする。一年間の行事の分担が決まっているため、コト送りの担当者は十人の内、三～四名で手分けして行っていたという。

②念仏とコト送り

大島では曜日に関わらず二月八日の朝に各家が出した笹竹を集めるコト送りを行い、午後に念仏と直会を行っていた。

かつては現在の公民館の裏側に、明治期から「会所」と呼ばれ、阿弥陀堂を兼ねたところがあり、そこで念仏を行っていた。

コト送りは、昭和六〇年ごろ、笹竹を出す人がほとんどなくなり中断した。

③各家の準備

各家ではマンダケ(おもにスズダケ)を一メートルぐらいに伐ってきて、それに「絵馬」を取付けた。絵馬とは中折(紙)を四つ折りにして切った十五センチ角ほどの紙に刷った木版画のことである。一辺を切ってこより状にして、一本のマンダケに二～三枚の絵馬をむすびつけた。

絵柄は人物が馬を曳いているもの、猿が馬に乗っているものであった。いずれも粗削りな絵柄だったので、見よう見まねで各家で彫ったのだろう。市販とか、注文を受けて作っていた人などはいなかったという。版木のない人は文字で「馬」と書いていた。

この絵馬を取付けたマンダケを「コト送り竹」と呼んだ。単に「笹」ともいう。マンダケには絵馬以外はなにも付けなかった。

④コト送り

コト送りは午前八時ごろから始められた。各家では「早く出さないと、置いて行かれちゃう」などと言っていた。

当番が歩く道筋は今の県道で本道という。その本道の六ヶ所ほどの辻に竹が置かれている。昔は念仏をやる日の朝に「風の神、外へ出て行け」といいながら各部屋を祓い、「風の神お馬に乗れ」と言いながら辻まで持っていけと教わった。辻にはコト送り竹が立っていて、その脇をを通るときはつばをはきかけろと年寄りに教えられたという。

かつて七〇戸の時代には五〇本ほどのコト送り竹が集まった。集めて歩くことを「追い払い」といい、十軒の当番の内三～四軒が割り振られ、分かれて集めていた。コト送り竹を集める当番は大人で、子供の行事ではないため、子供が付いてくることはなかったという。

コト送り竹を送る場所は、県道の加々須の境で、日影坂(ひかげざか)とか灯消箱(ひけしばこ)と呼ばれていた。灯消箱は電気が通ってからしばらく、トランスが設置してあったからである。県道は昭和十一年ごろ自動車が通れる広さになり、昭和三二年にバスが開通した。この県道の下の加々須川の対岸(南側)に旧道があり、岩観音(いわがんのん)という祠がある。そこに向かって県道から、集めたコト送り竹を投げ込んでいた。旧道時代は岩観音に直接送っていたと思われる。

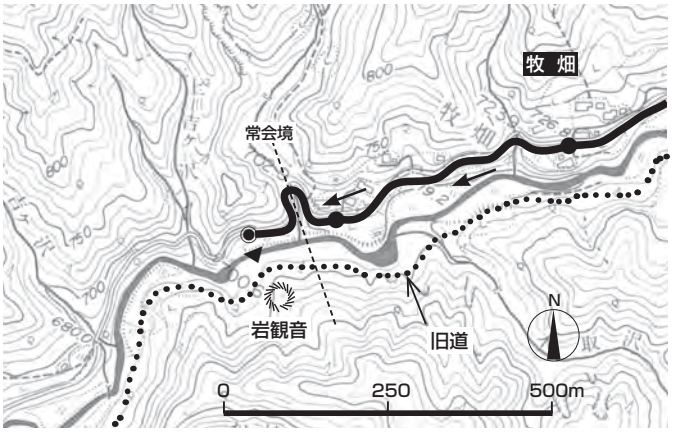
昭和四〇年代末には、コト送り竹を出す人も減り始めた。

⑤念仏について

念仏は「念仏」「ナムアミダブ」古くは「ナンベェナンボ」とも呼ばれた。念仏をあえて「コト念仏」とは呼ばなかったが、コト送りを行うといえば、念仏も含まれていたという。当番は念仏が始まる前に、版木を使って御札を刷っておく。御札には「奉修御祈祷百万遍如意攸(ゆう)」と書かれ、皆に持ち帰ってもらう。版木の裏には「昭和十二年二月八日 (家印)」とある。

念仏は午後一時ごろから行った。当番が鉦を叩き、十五～二〇分ぐらい「ナムアミダブ、ナムアミダブ」と唱えていた。数珠は長さ約九・八メートルで、大珠1個、中1個、珠は八〇四個ある。

〔写31〕本道(県道)から見た加々須川と「岩観音」



(喬木村全図一万分の一に加筆)

小ぶりで整った珠の数珠で、専門の職人が作ったものである。

念仏が終わるとお茶とかドブロクとかが出た。参加者は、多い時には三〇名くらいで、一軒からの人数や性別も決まりはなかった。ほとんどの家でドブロクを作っていたので、皆が集まるとドブロクで宴会になった。

(二) 大島集落について

①大島神社の「五社殿」

かつて大島には四つの地区が共に行う祭りがなく、大島神社の「五社殿」の祭りは、平成になってから始まったものである。区内の姓の五つ、佐々木・筒井・小椋・内山・山上で、それぞれの姓の氏神が決まっていて五つの祠が並んでいる。佐々木姓は天白様、筒井姓は八幡大神、小椋は小倉神社、山上・内山姓は白山社であり、各社村内にあった社を昭和三〇年頃、集めて「五社殿」とした。

②周辺地域とコト送り

喬木では四部落（しぶらく）といって、大和知、氏乗、大島、小川が財産区有林を持っていた。加々須は小川村に入っていた。コト送りもこれらの地域が単位になってそれぞれ行われていたという。

最下流の大沢が加々須との境で、加々須に入ったところの三枚添（さんまいぞえ）から沢沿いに山中に入ると氏乗に抜けられる。

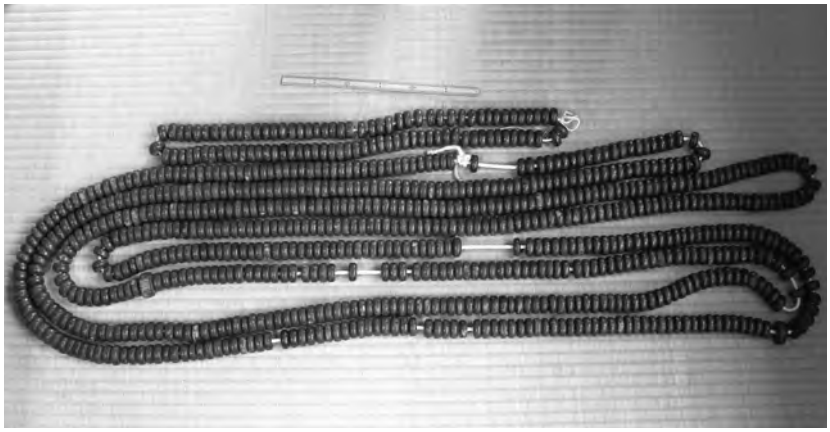
③大島の木地師と周辺の生業

大島に多く見られる内山・小椋姓は木地師の別家であるという。最も古い家は山上姓で、寛文二年（一六六二）からの記録が見られるという。村内の山に向かう旧道は馬合（まつう）で中口沢と荒道沢に向かう。中口沢の洞で木地師が活躍し、木地屋敷という字が残り、荒道沢には木地師の墓がある。

木地師の時代は古く、明治以降は林業と炭焼き、養蚕が主な生業であった。現在見られる家屋は明治末から大正初期に養蚕で稼いで建てたものが多いという。また数軒は牛車で木材の運搬をしていた。下流に帰牛原（きぎゅうばら）という村があり、十軒ほどが牛車によるの運送業を行っていた。

〔写32〕大島神社の「五社殿」

〔写33〕版木（昭和十二年）の裏表と御札



〔写34〕念仏で使われていた大数珠

三章・伊那谷中部、飯田市のコト念仏と東回りと西回りのリレー式コトの神送り

一、東回り西回り・リレー式コトの神送り

伊那谷中部、飯田市の三地区（千代・龍江・上久堅）の十六集落でリレー式のコトの神送りが、二日がかりで行われている。

この三地区は、いずれも昭和三九年（一九六四）に飯田市に編入されたところで、それまでは独立した村であった。

リレー式とは、各集落で集めた笹竹やミコシなどを集落境に送る（放置する）ことで、これを受けた隣の集落は、自らの集落の笹竹などを加えて、さらに隣の集落に送る。最後の集落ではそこまでに加算された総量を送るわけである。他の地区にこうしたリレー式のコトの神送りは見られない。

出発点は毎年、千代地区の芋平（東回り）、野池（西回り）の2箇所で、終着地は北の原（上久堅地区原平の喬木村境）で、ここで笹竹やミコシなどを沢に投げ入れて送る。なお北の原というのは通称で正式な字名ではない。

この東西のリレー式のコトの神送りは、野池神社を巡る二集落から始まり、標高七七二メートルの神之峰を東西に迂回する二つのコースで、東回りのコースでは八集落、西回りでも五集落が笹竹などを中継する。

西回りでは、さらに途中で合流する一集落、終着点の北の原で合流する二集落があり、合計十六集落が関わっている。二月八日と九日に行われ、コースと時間帯は下の地図の通りである。なお東側で単独に行う越久保は、図に記載してあるが四章で報告する。

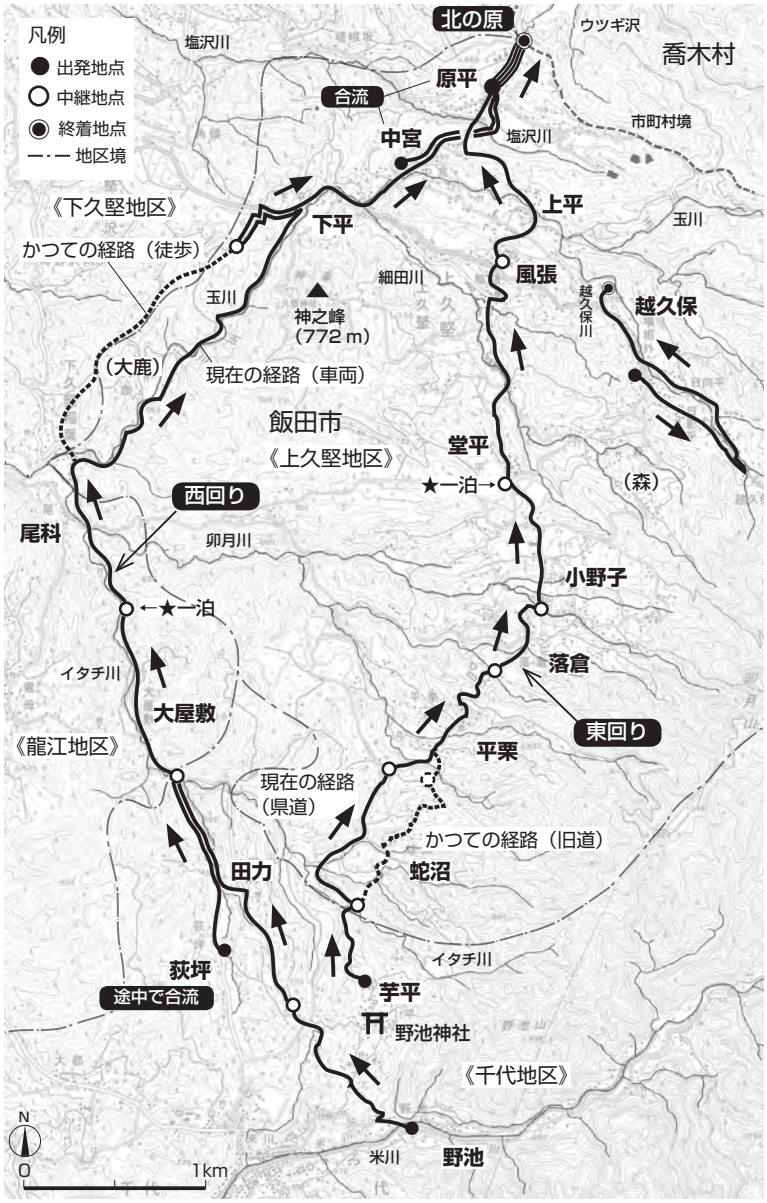
また、東回りコース周辺の森集落と西回りコースの大鹿集落はこのリレー式のコトの神送りには参加していない。

森集落は、飯田市美術博物館編集・発行の「上久堅の民俗」によると「昭和四〇年頃に途絶え、現在はおこなわれていない。（後略）」とある。家ごとの行事であったともいわれている。大鹿集落も同様であり、平成二六年の調査では、確かな記憶が伝承されていなかった。いずれも古くからリレー式のコトの神送りには加わっていなかった。

このコトの神送りに関わる十六集落の内、十の集落でコトの神送りの前後にコト念仏を行っている。ただし、昭和二〇年代に芋

リレー方式のコトの神送りコース図

（国土地理院・電子地図に加筆）



〔図1〕平成二七年（二〇一五）・リレー方式のコトの神送りコース図と日程、各集落の笹竹本数と戸数・人口　※【　】内は行事の呼び方

〔東回り〕

2月9日（月）

- ◉ 北の原 〈17：40 着〉
  笹竹：合計約 72 本
- ↑ • 原平集会所に集合〈17：16 着→ 17：30 発〉
  越久保（65 戸・197 人）※報告は四章
  【送り神】 笹竹 28 本【コト念仏】（2 月 7 日）
  風張（39 戸・117 人）、**上平**（35 戸・87 人）
  【送り神】 笹竹約 6 本【コト念仏】（2 月 7 日）
- ↑ ○ 公民館前〈15：25 着→ 16：50 発〉
  堂平（26 戸・70 人）
  【神送り】笹竹約 8 本
  ★ここで一泊　　2月9日
- ↑ ○ 木山入り〈16：17 着〉〈15：00 発〉

2月8日（日）

  小野子（63 戸・155 人）
  【コトの神】（風の神送り）笹竹 9 本
- ↑ ○ 中沢橋〈14：44 着→ 16：05 発〉
  落倉（19 戸・47 人）
  【コトの神送り】笹竹約 14 本
- ↑ ○ 小石沢橋〈14：25 着→ 14：25 発〉
  平栗（26 戸・60 人）
  【コトの神送り】笹竹 13 本
- ↑ ○ 現在・土林、昔・研屋の上
  〈13：21 着→ 14：00 発〉
  蛇沼（26 戸・60 人）
  【コトの神送り】 笹竹 8 本【コト念仏】（神送り後）
- ↑ ○ カジヤの上〈10：35 着→ 13：00 発〉
  芋平（20 戸・50 人）
  【コトの神送り】笹竹 14 本 【大将荒神】（中断）
- ● 芋平集会所　2月8日〈10：20 発〉

平は途絶えている。コトの神送りとコト念仏の両者を行うのは、このリレー式の集落と、北側に隣接する喬木村の三集落、根羽村の小栃である。

リレー式のコトの神送りは、いつ頃どのように始まったのであろうか。由来等は伝えられていないが、東回り、西回りの領域の集落は中世末の「知久領」という共通点があると『上久堅の民俗』には記されている（注1）。

■飯田市千代（芋平）【一覧表・地図番号20】

二、（東回り）芋平（いもだいら）、大将荒神（たいしょうこうじん）・コトの神送り

地元の呼び方　大将荒神・豆もらい、コトの神送り

行事日　（大将荒神）　二月七日（昭和二八頃中断）
（コトの神送り）二月八日（現在も実施）

行　程　準備は芋平集会所、集会所を出発して蛇沼境まで

行事の特徴　東回りルートの出発地点。桧葉のミコシ・人形・旗・幣束などを作る。

話　者　沢井義廣氏（大正十三年生）、妻・ふくみ氏（昭和五年生・女性、昭和二七年結婚）、芋平の皆さん

地区の状況　現在は約二〇軒

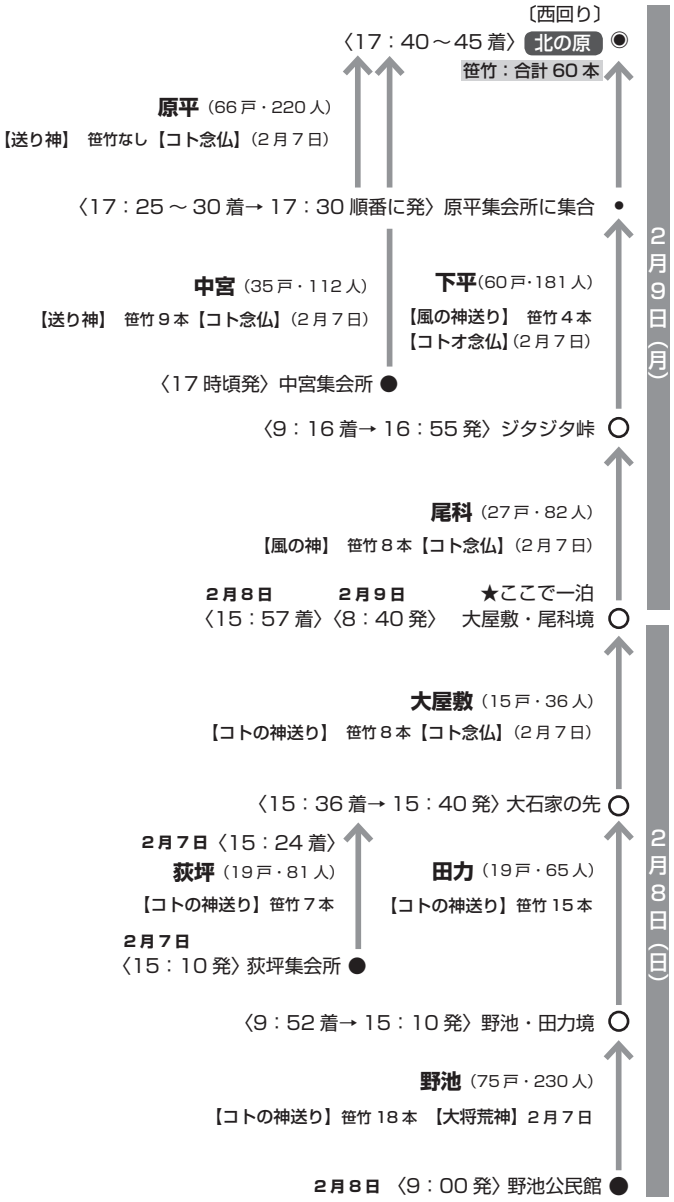
（一）行事の概要

【大将荒神】

①昭和二五年頃、子供たちの「豆もらい」

芋平では、二月七日に大将荒神と呼ぶ集落を巡回する念仏、二月八日にミコシやのぼり旗などを作ってコトの神を集落から送り出すコトの神送りを行う。

前者の大将荒神は昭和二八年頃に途絶えているが、コトの神送りは、現在も継承されている。送り出された笹竹やミコシは隣の地区に受け継がれ、一泊二日の行程で八地区をリレーし、喬木村境の北の原に送られる。これは神之峰を巡る東回りのルートで、さらに米川を含む隣村の野池を出発する西回りルートもあり、二日目の夕方合流し、「コトの神」を送る。



（注1）桜井弘人氏「Ⅱコトの行事」飯田市美術博物館編集・発行『久堅の民俗』二〇〇六年　二〇五頁
「神之峰の東・西まわりで結ばれる事の神送りは、水系でみれば米川―玉川、そして富田沢川辺にまで達し、江戸時代においては個々に独立した村々が連携されていたことになる。はたして、相互の村々をつなぐ行事を新たに始めることが可能だったであろうか。

さらに遡ってみると、（これらの村々は）慶長六年（一六〇一）以前の知久氏支配領「知久領」内に納まるのである。このことから、リレーで結ばれる事の神送りが「知久領」だった時代に成立したか、さもなくば江戸時代とはいえ過去の歴史を背景として色強く残る地理的な結束のもとに結ばれたことが想定できる。」

笹竹の短冊とミコシ（小野子にて）

二月七日の大将荒神という行事は、『飯田市誌民俗編重点調査報告書1　野池・芋平の民俗』(注2)によると「二月七日に、昔は子どもたちによっておこなわれた行事で、昭和一〇年代から青年となり、昭和二七・八年ころに絶えてしまった。」とあり、『千代風土記』(注3)では、学校から帰った子供たちが各戸を回り、夕方からは青年たちが各家の荒神様を拝んで回るとある。青年会による巡回が後から加わっている。

沢井義廣氏の話では、昭和二五年頃の大将荒神は次のようであった。

子供たちは学校から帰ってくると、布袋をもって二人か三人ずつで組んで家々を回り、炒った大豆をもらって回った。各家ではそれぞれの子供に一つかみの豆を袋にいれてくれる。子供の組は三～四組あるが、各組とも、同じ家は一回しか立ち寄らない。

当時、芋平は二五軒ほどであり、全戸回ると一升はもらったという。家によっては二つかみ、三つかみの豆を袋に入れてくれた。一つかみで四～六勺であり、各家では子供の総人数分の豆を準備していた。

子供たちは、もらった豆から自分の歳の数だけつまんで食べてから親に渡した。豆は夜のうちに、石臼できな粉に挽いておき、あくる日にボタモチにした。

②青年の「大将荒神」

子供たちの「豆もらい」が終わり、暗くなると青年たちの大将荒神が始まる。十七歳～三〇歳ぐらいまで、仕事から帰ってきてから、二人ずつ三～四組に分かれて回っていた。終了するのは遅い時で、夜の十一時以降であった。一軒ごとに上がり込んで鉦と太鼓を叩きながらエベスさん(『千代風土記』では「お荒神様」)に向かって「大将荒神、大将荒神」と唱える。各家を巡るが、太鼓の音が途切れないようにする。

ところが叩き方を間違えると、古老に「そんなもの、間違ってるじゃないか」と怒られやり直したという。そして家人と話をしたり、お茶をもらったりするが、酒を出されることはなかった。

行く組も回るので順路は定かでないが、屋号たまり屋の林家を一番先に回るとか、『千代風土記』には「最後の家は辻本家で拝む頃には鶏の鳴く時間になることもあった」とある。芋平の大将荒神は昭和二八年頃中断し、以後行われていない。

【コトの神送り】

①各家の準備、笹竹作り

現在も「風(風邪)の神様」を送るために「笹竹」が作られている。

かつてはどの家にも十五センチ角ほどの版木があり、これを紙に刷って笹竹に取付ける短冊を作った。版木の絵柄は馬、駒曳き猿などで疫神が乗る神馬であった。この短冊を笹竹に十二枚取り付けた。一年十二ヶ月分の疫神を祓うという意味があるという。現在は短冊に直接「馬」「午」「申」と文字を書きこむことが多い。さらに笹竹にはボンノクボ(盆の窪)の毛と爪と米を紙で包んで水引でしばった。この時、唱え言葉などはない。

笹竹は頭を詰めて、五～六尺の長さで使う。芋平の笹竹はハチク、マダケなどの細いもの、もしくは先端部分を使う。笹竹は頭を詰めておくと風に吹かれてもふらつかないという。かつては十二枚の版画が、枝ごとに一～二枚で、均等になるような枝ぶりの竹を選んだが、今は短冊の枚数も枝ぶりも気にしなくなった。

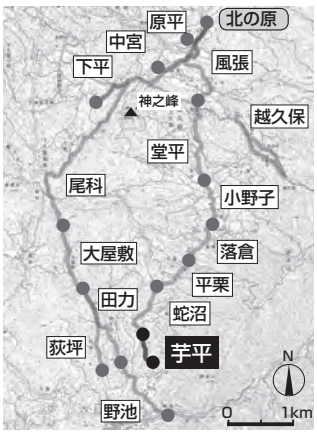
沢井義廣氏の版木は、明治初年生まれの祖父が彫ったものである。四分の一に切った中折紙に版を刷ると、馬の頭が左向きになり(右向きもあり)、上辺を切り込み、取付用のコヨリにするが、左向きの場合は左側がこよりの元になる。「馬は、頭に手綱をつけるものでケツにヒモ付けてはいかん」という。〔写12〕

②当日の準備

二月八日は午前九時頃から行列の出発地点となる芋平集会所でミコシ、幣束、旗の製作が始まり、十一時になると行列は出発する。

人形作りは沢井義廣氏が中心になって行ってきた。現在も要所を指導している。また奥さんのふくみ氏が顔を描いている。

「女は優しく描かねばならないが、うまく描けんの。今は若い衆も人形が作れるようになってきただに」と語っていた。ミコシを作る係、紙ののぼり旗に文字を書く役目など決まっていて、自然に作業が始まった。



〔図2〕コトの神送り・東回りガイド図(芋平)

(飯田市地形図一万分の一に加筆)

(注2)飯田市誌編さん委員会民俗部会編『飯田市誌民俗編重点調査報告書1　野池・芋平の民俗』平成十二年三月三一日・九三頁

(注3)『千代風土記』編集委員会編『千代風土記』昭和五八年三月・一六頁

〔写1〕芋平集会所で人形を作り、経験者が指導する

③かつての人形作り

現在はミコシと人形が出来上がるとミコシの前に人形を立ててお披露目を行い、カメラマンが一斉にシャッターを切るが、かつては村人の目にも触れないようにして作っていたと聞いた。

飯田市美術博物館編集・発行の『上久堅の民俗』にその様子が報告されているので引用する。

「現在は事の神送りのミコシを今は松寿庵（現在の芋平集会所周辺）でこしらえるが、戦時中までは芋平の大地主である林家「たまり屋」の庭（大きなカヤの木の下）や縁側を借りて行った。オトコガミ・オンナガミは縁側で極秘に作り、人形ができあがると「準備ができたで、持ってきてくれ」と林家の奥さんを呼んで、人形の頭と性器につける毛を持ってきてもらった。この毛を「先祖様の毛」とよんでいた。

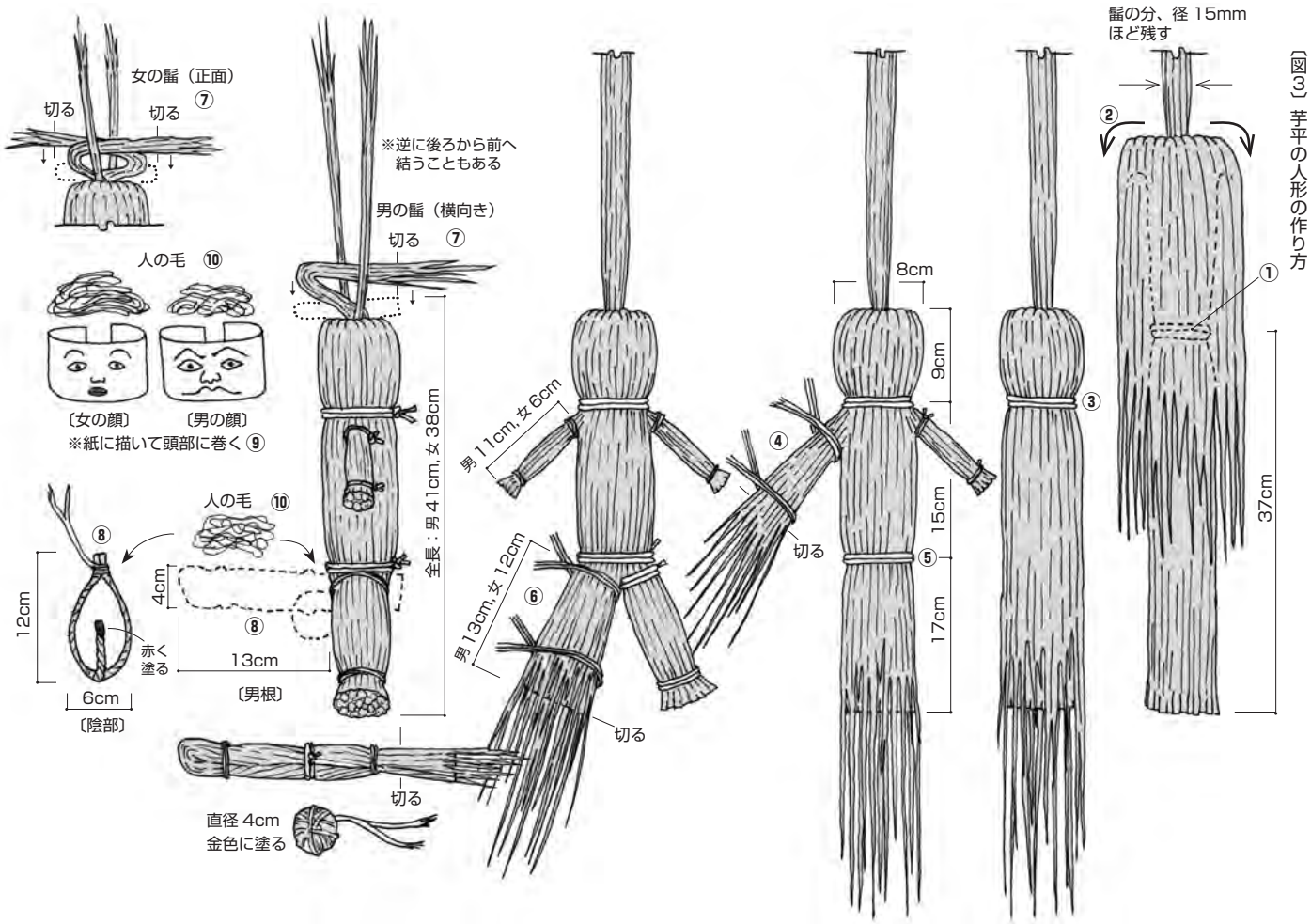
ミコシができあがると、すかさずその中に人形を入れた。したがって他の人の目に触れることはほとんどなく、作り方も秘伝だった。現在のように人形をミコシの前に飾ることはせず、他の集落のようにミコシの下をくぐることも、ミコシの中をのぞくことも禁じられていたという。」

④行列（二三頁、〔図2〕上図参照）

「コトの神送り」は「送り神」ともいう。コトの神送りの行列については、『千代風土記』に次のようにある。

「御みこしに白赤のたれを付けて準備を終り、台の上に安置し、鉦、太鼓で拝み出発となる。先頭に「ヘイソク」、旗、御みこし、其の後へ各戸より持って来た笹竹を男女問わず、全員で持ち行列が続く。道中鉦、太鼓の打方で進む。後方では空砲をドンドンと打ち、事の神送りとなる。

空砲は悪病を追い祓うようにと打つ。御みこしは村境沼塩迄送り、そこで御みこしを拝んで置いて来るのだが、後を振り返って見ない様に、又鉦、太鼓はたたかない様にして帰る。」



（人形作り）

①一束ほど（直径七センチほど）のすぐった藁を準備し、元をそろえ、元から三七センチのところでしっかり縛る。

②束の中心に髷分（直径十五ミリ）を残して藁を折り返す。

③頭部を九センチほど取り首の部分で縛る。

④首下の束から腕部分をすくい取り、縛って先端を切りそろえる。

⑤腰の部分の位置を決めてしっかり縛る。

⑥腰下の藁束をを両足分に割り、縛って先端を切りそろえる。

⑦髪を結う。

⑧別に作った男根と陰部をそれぞれに取付ける。

⑨顔を描いた紙をそれぞれに貼り付ける。

⑩頭部と性器に人の毛（パーマ屋から入手）を付ける。

⑪ミコシ取付用のスズタケを股に挿し、紙の着物（男は白、女は赤）を着せて出来上がる。

※工程⑪は仕上がり写真参照

（二）実施状況《平成二七年二月八日（日）》

【準備】

①人形作り

午前九時前頃から　※作り方は、前頁下図参照

②ミコシ作り

❶（九時開始）五～六束の藁束を準備し、輪になるように束の元と裏をつなぎながら、四束ほどで、外径七三センチの藁の輪を作る。輪の太さは十センチほどである。二、三本の藁で八箇所ほど粗止めし、さらに十二センチ間隔ほどに間を詰めて縛って形を整えていく。芯材はなく藁だけで作る。いつもは集落センターの庭で作るが、今日はミゾレ模様の天候のため、屋根のある裏の納屋で製作した。〔写2〕

❷ミコシの担ぎ棒となる二メートル、太さ三センチほどの竹（ハチク）を二本準備し、人が担げる幅（内々三五センチほど）で藁の輪に刺し、抜けないようにしっかり縛る。〔写3〕〔写4〕

❸直径三センチ、長さ三メートル弱ほどの竹（ハチク）を四つ割りにしてさらに削り、幅二センチほどに仕上げてから両端を削いで藁の輪に刺す。角度を変えながら三方から刺して小さなドーム型の骨組みとし、頂点を縛って固定する。〔写5〕

❹長さ一メートルほどの桧の葉枝を四方から、小さなドームが覆いかぶさるように差して藁でしばり止める。さらに前方の葉枝を整え、中が見えるようにカマクラ型に仕上げる。二日掛かりで運ばれるので念入りに覆っておく。〔写6〕

❺細竹（スズダケ）に付けた幣束を中央に上から差し入れ、横刺しの細竹で足回りを固定する。さらに幣束の串元から紅白の紙垂（しで）を四方に垂らす。〔写7〕〔写8〕

❻人形をミコシの口に立て、お披露目してから藁の輪に差す。正面から見て右側が女神（おんながみ）、左が男神（おとこがみ）。（午前十時十分完成）〔写9〕〔写10〕

③旗と幣束を作る

❶旗と幣束は二本ずつで竹竿に取り付ける。長さ三・三メート

芋平のミコシづくり

〔写2〕藁の輪を作る

〔写5〕四つ割り竹をドームの骨材にする

〔写8〕幣束の根本から紅白の紙垂を垂らす

〔写3〕担ぎ棒の竹（ハチク）を刺す

〔写6〕桧の葉枝でドームを覆っていく

〔写9〕男（左）女の人形を立て、お披露目

〔写4〕藁縄でしばって竹を固定する

〔写7〕幣束を立て、足元を固定する

〔写10〕人形を藁の輪に刺して完成する

ルほどで裏（末口）一～一・五センチの細いハチクを四本準備する。さらに旗用の二本は、上の節の枝を旗竿の横桟として残して加工する。

❷幣束は事前に作ってきたものを竿先に割り差す。

❸旗は書初め用半紙で朱の色紙を挟んで四枚張り込み、幅二四センチ、長さ二・七五メートルに仕上げ、「千早や振ふ二月八日は吉日ぞ　事の神をば送りこそする」と二枚とも墨書する。それに紙で「ちち」を付ける。全ての準備が整ったのは午前十時十五分であった。

【コトの神送り行列～直会】

①参加者　十七名（内、小学生男一名・女一名、幼児一名）

出発した時は二〇人ほどであった。

②日　程

十時二〇分　ぼた雪の中、芋平集会所前を行列が出発、空砲（猟銃）が鳴る。「よこね田んぼ」を見下ろす坂道を降りる。鉦と太鼓は叩き続ける。

十時三五分　ほどなくミコシが蛇沼（沼塩）の境に到着して雪面に置く。鉦と太鼓を叩く。無言で拝む。終わると空砲（猟銃）が鳴り、そのまま振り向かずに、行列は集会所に戻っていく。

十時五五分　芋平集会所に戻って直会になる。（十二時終了）

運んだ笹竹は十四本で、旗二本、幣束二本を加え、計十八本が蛇沼に受け継がれていく。

③鉦と太鼓

太鼓と同時に叩くが、鉦のリズムは次のようであった。

チンチンチン　チンチチチンチン　チンチンチンチンチンチン

歌や唱え言葉はなかった。

■飯田市上久堅（蛇沼）【一覧表・地図番号21】

三、（東回り）蛇沼（へびぬま）、コトの神送り・コト念仏

地元の呼び方　コトの神送り（子供・デンデンチャン）、コト念仏

〔写11〕「千早振ふ二月八日は吉日ぞ……」紙のノボリ旗に文字を書く

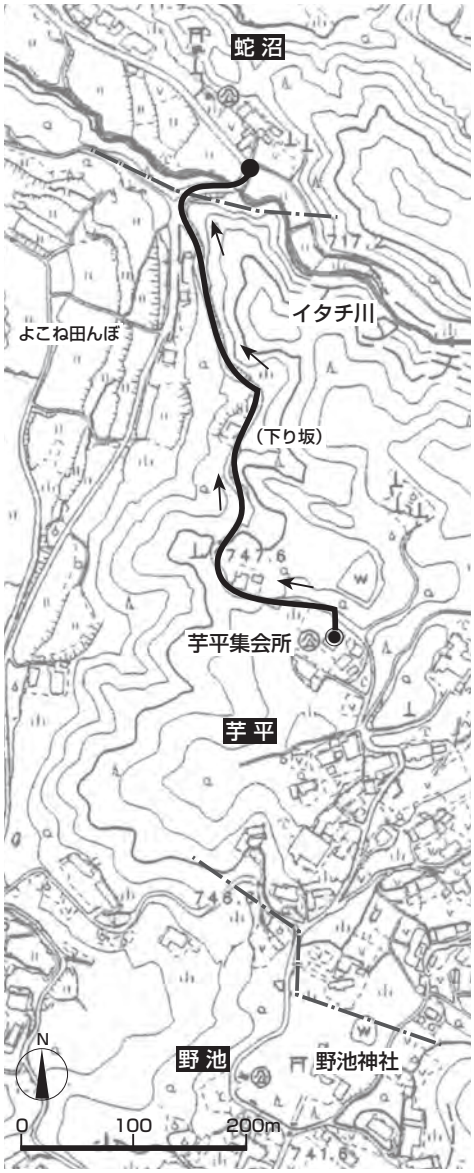
〔写12〕沢井義廣家の版木と版画

〔写13〕行列の様子、あいにくのミゾレ

〔写14〕行列の出発・終了時の空砲

〔写15〕コトボタモチ（上・アズキ、下、きな粉とゴマ）

〔図 4〕芋平のコトの神送り東回りコース図



（飯田市地形図一万分の一）

行事日　二月八日、雪混じりのミゾレ

行　程　神送りは「カジヤの前」～「土林」
　　コト念仏は蛇沼集落センター

行事の特徴　東回りルートの二番目の地区。神送りの終了後にコト念仏を行う。

話　者　塩澤薫氏（昭和四年生）、蛇沼の皆さん

地区の状況　蛇沼は現在二六戸で六〇名、蛇沼と沼塩が昭和三九年に一つになった地名である。昭和十四年（一九三九）には併せて三八戸、二百名がいた。なお合併以前から神送りは合同で行っていた。

（一）行事の概要と今昔

①コトの神送りの古道

現在の県道ができる前は、台地上で村の中央を通る道（旧道）が主な道で、コトの神送りも村の中を通っていた。塩澤薫氏は、昭和十一年（一九三六）小学校一年生でコトの神送りに参加したときに、この村の中の旧道で送った覚えがあるという。

芋平の笹竹を受取る場所は、昔も今も同じ所で、カジヤという屋号の家の前で「カジヤの前」と呼んでいる。現在はそこから県道沿いに進むが、旧道はカジヤの裏から丘の上に向かう。そして旧道伝いに沢を渡り、塩沢次夫宅（研ぎ屋、細工屋）上の峠に至る。ここから先は時代によって二つの置き場に別れる。

古くは、（研ぎ屋）上の峠で石仏が並んでいる所。平栗の人たちは沢を越えて真っ直ぐ登る道があった。

ところが昭和十四年（一九三九）に現在の県道を車が通れるようになると沢を渡る道が廃れ、土林（つちばやし）（ドリンともいう）を経由して登ってくるようになる。さらに自動車が普及し始めると、土林から軽トラックで登り、運ぶようになった。（この頃の写真「平栗」の項にあり〔写20〕）

それならば県道を通って神送りをしようということになり、平成の始めの頃、現在の土林が笹竹やミコシの置き場所になった。

②昔のコトの神送りについて

子供の頃は、この行事を「デンデンチャン」と呼んでいた。デンデンが太鼓でチャンが鉦の音である。太鼓と鉦を叩いて「コトの神を送れよ。研ぎ屋の上まで送れよ」と言っていた。

昭和二〇年代、蛇沼周辺は、近所に医者もなく子供が熱を出すと治療の手段がなかった。養蚕用に貯蔵してある氷を分けてもらって頭を冷やせればいい方だった。天然痘などの病気が家に入ったらなおさらで、家族は大変なことになった。

従って、コトの神送りが来ると、雪の降る中を熱のある裸足の子供を母親が連れ出して、「風邪を追い祓わねば」といって真剣にミコシをくぐらせていたという。

子供の悪病祓いを男の子供主体で行うわけであるが、ミコシ、鉦、太鼓は大人が担いでいた。そして終わると戦前はせんべい、戦時中は大豆、戦後は小麦の手づくりせんべいなどが配られた。

③蛇沼のコト念仏

蛇沼では今日もコト念仏が行われている。現在はコトの神を送ってから県道沿いの蛇沼集落センターに戻って行うが、以前は集落中央の妙寿庵（注4）で男性だけで行い、終わると茶碗酒を飲み交わした。

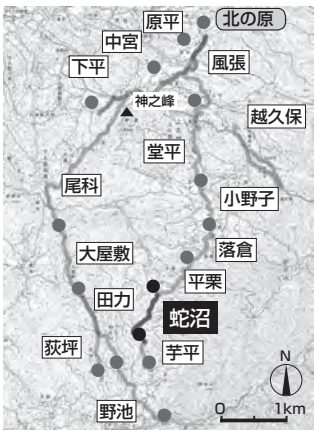
集団風邪などが流行っている年には百万倍（ひゃくまんばい）（遍）を回した。蛇沼の大数珠は、珠が手づくりで角張っていた。この数珠を「百万倍」と呼び、風邪などが流行った時だけに出してきて回した。毎年回すわけではない。珠が百個ある数珠を百回まわすので「百万倍」といい、一～百まで数字が書いてある数取り用のめくり板があった。それを皆が集まり、狭い妙寿庵の観音様の前で膝を突き合わせてやっていた。「ナムアミダブツ」で始まるが、最後には「ナンマイダー」になってしまう。

今は集会所で阿弥陀様の厨子を開いて念仏を唱えている。数珠回しは行っていない。

④各家庭でつくる笹竹

各家庭で作る笹竹はヒチクと呼ぶ竹（笹）を用いる。養蚕のメダナ作りの材料、傘の柄や野菜作りの手などに使う細い竹（笹）で、養蚕で奨励され、明治から大正期に導入したものだろうという。今、山はヒチクに占領され、切れば切るほど増えるという。

一節に枝が二本ずつ左右に向かって出るので、六節分で穂先を取り除くと枝が十二本になる。一枝に一枚ずつ紙の短冊を付ける



〔図5〕コトの神送り・東回りガイド図（蛇沼）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写16〕妙寿庵の外観と内部

（注4）妙寿庵

蛇沼の中央の沢筋に妙寿庵がある。一六八八年の絵図には集落の中央に描かれているというが、知久隆盛の時代にはさらに百メートルほど上流部の山中にあったといわれている。

ここは尼寺で、小野子の諏訪神社の隣にあった臨月山小野寺（しょうやじ）の分かれである。小野寺は知久十八カ寺の十七番目である。妙寿庵は何代かに渡り尼が勤め、文政三年銘の墓がある。明治以降は尼の記録がない。

と十二枚になる。戦前は、松飾りの竹を大切にとっておき、六節で切って十二枚の短冊を付けた。十二枚は一年十二ヶ月を表し、その間の厄神を祓う祈願であるという。

短冊はかつては読み書きの出来ない人も多かったので、木版を使っていた。馬の絵で、猿が曳いているものなどあった。版木は素人が彫ったもので、どこの家でも持っていた。現在は「事の神送り」「悪病神」「午」「申」などと文字で書くようになった。

最近は、笹竹が大きすぎると運ぶのに困るということで、三節で切り、枝が六本で六枚の短冊を取付けている。現在は十二枚の短冊を付けて出す家がめっきり少なくなったという。

笹竹には、米と家族皆の爪、盆の窪の毛を抜いて、紙に包んでくくり付けた。昔は「三つ子が転ぶと、神様が盆の窪の毛をつかんで起こしてくれる」といった。家で散髪していたので、盆の窪は刈らずに残しておいた。だからつかんだり、抜くことができた。丸刈りや刈り上げる時代になってから抜くのが困難になった。爪に関しては親に由来を聞かなかったという。

⑤笹竹で各部屋を祓う唱え言葉

塩澤薫氏の奥さんによると、母親が各部屋を祓うときに「京の都、奈良の都、行ってご繁昌なされ！」と唱えて笹竹を振っていた。なぜ京の都、奈良の都かは不明。笹竹を辻に出すときは、「出したら振り向いてはいかんぞ」といっていた。振り向くと風邪を背負ってきてしまうという。母親は千代から蛇沼に嫁に来た人であった。

⑥コトボタ

かつては二月八日の朝に「コトボタ」を供えた。大豆を挽いて作ったきな粉をまぶしたボタモチを「コトボタ」と呼んだ。神様に供え、腹をふくらして立ち去ってもらおうということである。アズキのボタモチは「コトボタ」とは呼ばなかったようであるが、今では両方を好んで食べるようになった。但し、ボタモチを全く作らない家もあるという。塩澤薫家も昔から作らなかった。

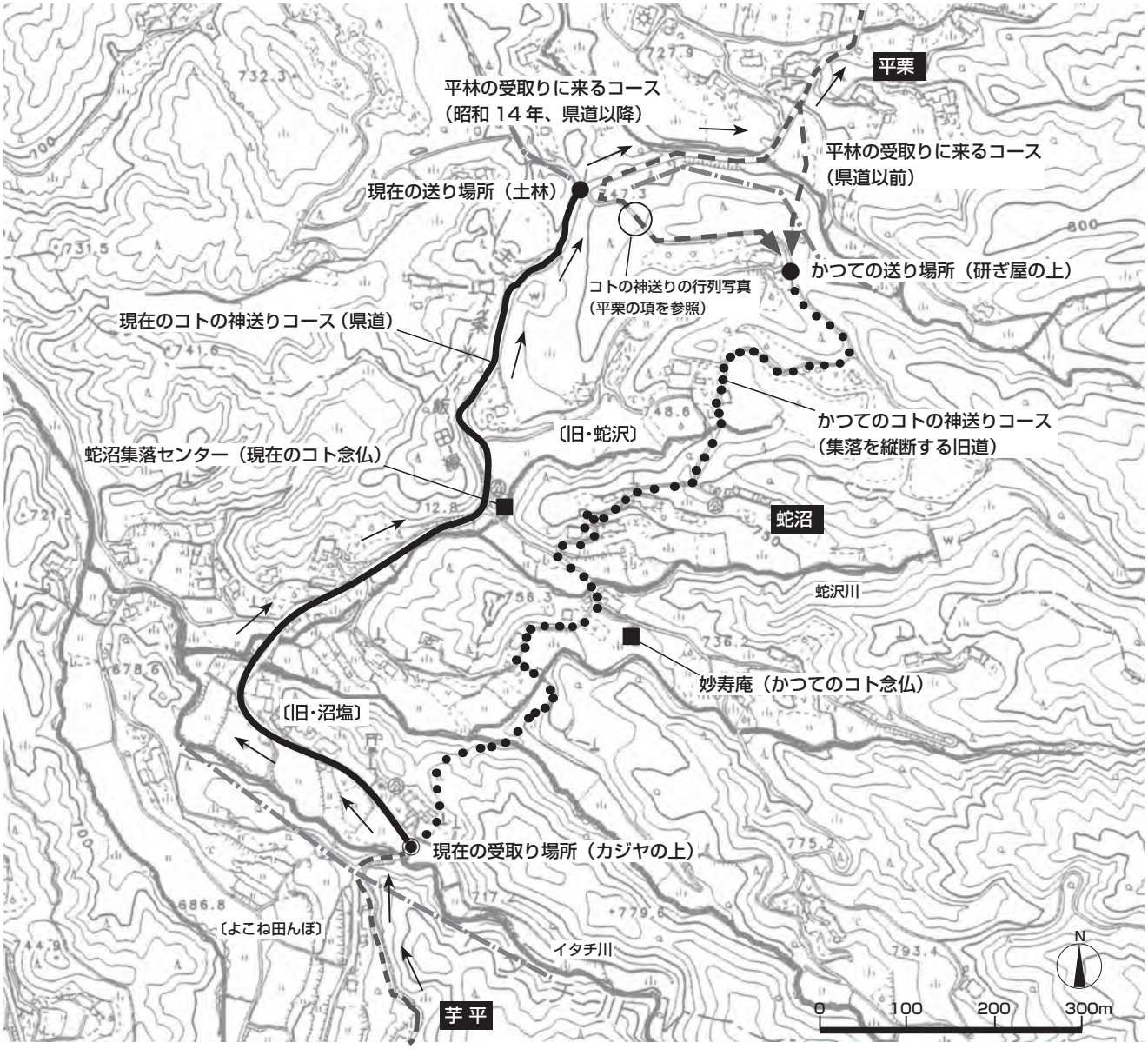
(二) 実施状況《平成二七年二月八日（日）》

①参加者 合計二六名

大人二〇名（男十三名、女七名）

〔図 6〕蛇沼、コトの神送り集落内の東回りコース今昔

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



中学生二名（男一名、女一名）
小学生三名（男二名、女一名）
幼児一名

②鉦、太鼓と唱え言葉

（ドンドン　チンチンチン）
事（こーと）の神（かーみょ）、送（おーく）れよ、土林（つちばやし）まで送（おーく）れよ
（ドンドン　チンチンチン）

③笹竹とミコシ

総数二六本（内、旗二本、幣束二本）
笹竹は受取り十四本、蛇沼より出された八本追加して二二本になる。ミコシは厄除け・厄落としといって、子供も大人もくぐり、神様（藁人形）を拝むようにと言っているが、以前は新婚だけをくぐらせた。

④行程

十三時　　カジヤの前出発（ミゾレ止む）
十三時十二分　蛇沼集会所前、休憩
十三時二一分　土林到着、ミコシくぐり
十三時二四分　集会所に向かって帰る
十三時三五分頃から　念仏、直会

⑤今日のコト送りの行列と念仏、住民の意識

行列は、区長が先旗（先頭を行くのぼり旗）を持ち、幣束、鉦、太鼓、ミコシ、子供優先で笹竹持って続く、さらに年寄りが続く。昔は男子が優先であったが、厳しい制限はなかった。

現在も二〇名以上が集合すれば軽トラックを使わないで神送りができる。今は住民の中に文化財としての認識、行事によって集落の親睦を保てるという意識が出ている。お祭りは一家で一人出ればいいと考えるが、神送りは家内誰でも参加できる。家族で笹竹を作って、二〇分程行列して、最後に念仏を唱えて一杯やるという気軽さがある。今の念仏は、女性も子供も参加し、昔の念仏とは雰囲気がちがうという。ナムアミダブツを九回繰り返すと終了で、もうお燗が付いているし、菓子が並んでいる。蛇沼の蛇沢と塩沼の二つの集落を支えてきた唯一の行事であるという。それでも近年は笹竹を出す家、参加する住民が減っている。

■飯田市上久堅（平栗）【一覧表・地図番号22】

四、（東回り）平栗（ひらぐり）、コトの神送り

地元の呼び方　コトの神送り
行事日　二月八日、出発時ミゾレ止む
行　程　土林（蛇沼内）～小石沢川の橋
行事の特徴　東回りルートの三番目の地区。
話　者　川手正稔（かわてまさとし）氏（昭和二一年生）、平栗の皆さん
地区の状況　二六戸、六〇名、四組に分かれている

（一）行事の概要

①コトの神送りの参加者など

行事名は「コトの神送り」で、毎年二月八日に行う子供の行事であったが、子供がいなくなってからは大人が行っている。参加者は、各組の代表三名ずつ十二名と、平栗区の役員十名が加わって計二二名で、さらに家にいた人などが参加する。豪雪、人出が足りないときなど、一部を軽トラックで運ぶこともあるが、毎年歩いている。

②曜日変更の打診

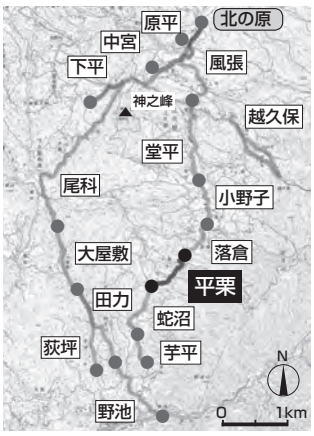
平栗は、役目を割り当てられるのが二二戸の内から、二〇人程になる。そして働いている人でも、仕事を休んで行事に参加しなければならない。かつてコトの神送りの出発地点の千代芋平に、毎年日曜日に実施してほしいと頼んだところ「冗談でない。昔からのことで、もし病気が流行ったらどうするんだ。千代は八日に送り出すから、お前さんたちは日曜日まで置いておけばいいじゃないか」といわれてしまったという。疫神なんだから、送られて来たら次へ送らなければということになり、二月八日に仕事を休んで続けることにしている。

③各家の準備

コトの神送りで使う竹は「笹竹」と呼んでいる。「コトの神」という人もいる。川手氏はハチクの小さいものを使うが、マダケ、シチク、モウソウチクを使う人もいる。家の中を祓って歩くので、長さは一・五～二メートルほどにする。それに短冊を付ける。「午」

〔写17〕蛇沼の行列

〔写18〕コト念仏で開く厨子



〔図7〕コトの神送り・東回りガイド図（平栗）
（飯田市地形図一万分の一に加筆）

「申」と書き、一番上の短冊には「事の神様送り申し候」と書く。全部で十枚ほど付けるが、枚数は決めていない。

さらに家族のボンノクボの毛、爪、米を紙でくるんで、竹の中程に水引で縛り付ける。これを前日の夕方に作り、ボタモチを供える。ボタモチは小豆ときな粉の二種類である。

翌、二月八日の朝には、各部屋を回り「風邪の神様乗ってくれ」といいながら笹竹で祓う。そしてそのまま県道まで持って行って差して置く。祖父と父に教わったやり方であるという。

④コトの神送りの行列

現在、平栗のコトの神送りは十四時集合としている。男衆は出発地点で口汚し（日本酒一杯）して、女衆にはお菓子を配る。各組の当番十二名と役員十名は参加するが、役職が重なるものもいるので総勢二〇名ほどになる。順番は幣束、のぼり旗、笹竹、ミコシ、笹竹、幣束、のぼり旗の順になるが、人数の都合で併せて持ったり、前後したりする。鉦と太鼓は順番を決めていない。

かつては子供だけで行列していた。昔は四月に一年生になる子供に幣束を持たせ、中学生の体格が良い生徒がミコシを担いだ。小中学生中心で、男女などの制限はなかった。

行列は鉦と太鼓を鳴らして行くので、家にいる人これを聞き道路に出てくる。そして、ミコシの下をくぐる。皆大騒ぎして笑っている。笹竹を置いたら、振り向いてはいけないことになっている。振り向くと「風邪が移るぞ」と昔からいわれている。

かつては神送りが終わると集会所などで直会を行っていたが、参加者が少ないため、現在は郵便局の脇の自販機で、缶ビールを一本ずつ配ってお開きにしている。

⑤受取る所、送る所

昔は蛇沼の塩沢次夫宅（細工屋）上の石仏のあたりに笹竹やミコシを受け取りに行った。沢を渡っていたが橋がなくなり、県道が整備されたので土林（つちばやし）を回るようになり、現在は蛇沼も県道を歩くようになったので、土林が受け渡し場所になった。（蛇沼の地図〔図6〕参照）

送る場所は小石橋のたもとである。子供の頃は悪いことを思いつくもので、橋の上から笹竹もミコシも沢に落として、次の落倉を困らせたりしていた。結局、皆怒られていた。現在も橋であるが、旧道ではなく、県道側の橋に置く。平成二七年は次の落倉の軽トラックが到着したところだったので、荷台に笹竹を積んだ。

（二）実施状況《平成二七年二月八日（日）》

①日程

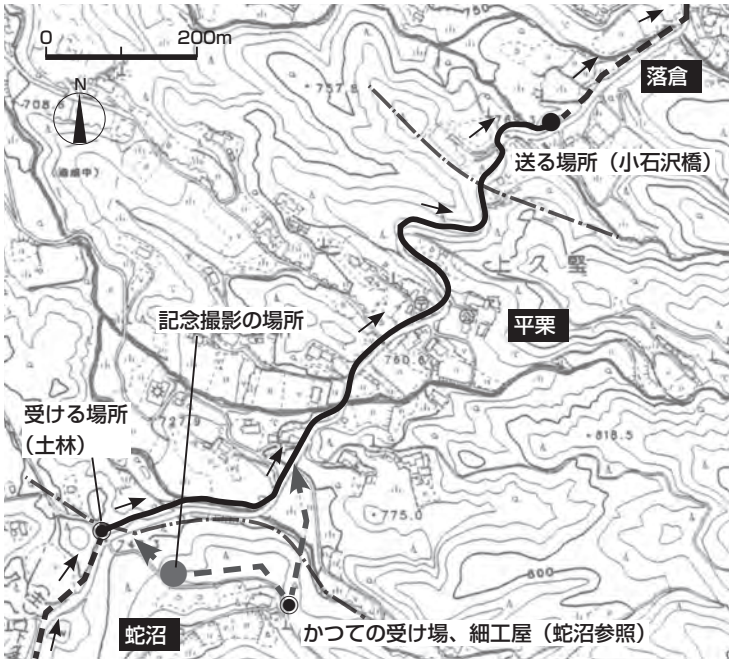
十三時五〇分頃　次第に集まり始める、雪止む
十四時　土林を出発
十四時二五分　小石沢橋着、落倉に笹竹を受け渡す
ミコシくぐりを行い、振り返らずに戻る

②参加者

二四名
大人二一名（男十三名、女八名）
小学生二名

〔図8〕平栗・コトの神送りの集落内コース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



〔写19〕平栗の行列

〔写20〕昭和末年頃の様子、「細工屋」～「土林」

幼児一名
（軽トラック一台）

③鉦と太鼓と唱え言葉

いくぞー！（鉦・チンチン）（太鼓・ドンドン）わーしょい！
事の神（こーとかーみょ）送るよ（おーく）、どこまで送る（おーく）、
小石沢（こいしさわ）の橋まで　送る（おーく）よ

④平栗と周辺地域の状況

川手正稔氏は、仕事の都合で平栗を離れ平成五年頃に戻ったが、この時には子供はなく大人だけの行列になっていたという。

地域内の様子を見ると、近い将来の子供の様子はわかる。現在は三歳と〇歳の二名で、小・中・高校生は一人もいない。近隣の小・中学生は学校まで片道四キロ以上を歩いて登校している。小学生になる頃、学校のことを考えて、高齢者を残して転出する親子が多く、三世代が同居している家が少なくなっているという。

■飯田市上久堅（落倉）【一覧表・地図番号23】

五、（東回り）落倉（おとしぐら）、コトの神送り

地元の呼び方　コトの神送り
行事日　二月八日、雪は小降り
行　程　小石沢川橋～中沢橋（旧、さくら屋）
行事の特徴　東回りルートの四番目の地区
話　者　北沢秀勝氏（昭和七年生）、落倉の皆さん

（一）行事の概要

①落倉の戸数などと学校事情

北沢秀勝氏の生まれた昭和七年頃は、三四戸で集落の戸数が最も多かった時代であるが、戦後は若い人が次第に松尾、竜丘、上郷など（いずれも飯田市）に転出し、現在は十九戸、四七名になった。それでも都会から落倉に二世帯が新たに加わった。

落倉は中学生になると龍江の竜東中学校へ通う。かつては歩いて通ったが、現在は親や祖父母が送迎する時代で、この通学問題から転出する家が多い。上久堅小学校の新入生は四名、全校生徒四〇余名になっている。

かつては平栗分校で北沢秀勝氏の時代（昭和十四年頃）には十四名の入学者があった。この頃は五、六年生になると風張の本校に通うようになり、全校生徒が百名以上いた。

②笹の準備

各家庭でつくる笹の名称は覚えていないという。まず、ボンノクボの毛を引き抜き（切ってもよい）、家族全員分を紙に包んで水引で笹に縛る。米は入れない。

笹には「午　申」と書いた短冊を十二枚付ける。十二ヶ月分の祈願といわれている。短冊は文字ではなく馬の絵の版画の家もある。

笹の種類は何でもよいが、マダケは落倉にはないので、ハチクなどの小さい竹を取ってくる。正月などに用いたものではなく、新しい竹を伐ってくる。マンダケ（スズダケなど）は用いない。長さは四尺から一間（一・二～一・八メートル）で、一家で一本作る。

ところが近年は皆、笹竹を作らなくなり、十九戸で十本出ればよい方であるという。二月八日の朝になると、家の内の奥の部屋から「風邪の神は乗り移れ」と唱えながら、各部屋を祓って回る。そして玄関から出て、辻の小高いところに刺しておく。

③受取るところ

平栗から来る笹竹とミコシなどは小石沢川の橋のところに受取りに行く。古くは旧道側の橋だった。

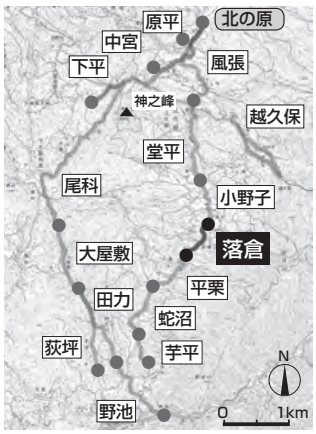
④かつての「コトの神送り」

二月八日の行事は、「コトの神送り」と呼ぶ。この行事に関しては平栗とは打合せは行わないし、打合せしなくても笹竹は来る。

昔は子供主体で、風邪の神を追い祓うのだといわれて参加していた。子供たちは下校時間が四時過ぎになるので、子供の時間に合わせて出発し、大人も同行していた。芋平からくるミコシと旗は大人が、笹は子供が手分けして持った。兄弟は五人いたが皆出ていた。

辻のところで止まると老人などが行列に加わり、風邪をひかぬということでミコシをくぐる。そして笹を送る場所の「さくら屋」を目指した。鉦と太鼓は大人が持っていて、かつては区長が号令

〔写21〕行列の途中、辻々で笹竹を拾い集める（平栗）



〔図9〕コトの神送り・東回りガイド図（落倉）
（飯田市地形図一万分の一に加筆）

をかけた。大人の参加者は家にいて出られる人だけで、決まりはなかった。

ところが序々に人手不足になり、平成十年頃から軽トラックで運ぶようになった。現在の行列は辻商店（落倉バス停前）に皆が集まり、平栗の連中がチンチンドンドンやってきたら、小石沢橋に七、八名で迎えにいく。軽トラックも一台同行し、笹竹は軽トラックに積んで戻ってくる。

辻商店からは行列で中沢橋まで送る。かつては橋のたもとに「さくら屋」という屋号の家があった。橋には、次の小野子の衆がいればあいさつし、いなければ雪の上に置いてくる。

昔は子供たちにお菓子など配り「振り返らずに帰れ」といった。今は、終わるとミカンとお茶が配られ解散になる。

⑤鉦について

鉦は庄屋をやっていた「タバタ」（屋号）という家にあり、吊る形式の鉦を使っていた。現在は子供が叩ける小ぶりなものを使用している。

⑥二月八日のボタモチ

二月八日の朝にボタモチを作り、神棚と仏壇の両方に供える。アンコときな粉だが、昔からきな粉の方が多く作った。ボタモチを昼食に食べてから、コトの神送りに出かける。

（二）実施状況《平成二七年二月八日（日）》

①日程

十四二五～三五分
　七～八名と軽トラックで笹竹を集めに来る。旗、幣束、ミコシは担いで運ぶ。ミゾレが小降りになってくる。
十四時三六分
　辻商店（落倉バス停前）に皆が集合して、行列を組む。
　幣束（手に笹も）、鉦、太鼓、旗、ミコシ、笹、幣束と旗、笹、順番は前後しながら
十四時四四分　中沢橋着、ミコシくぐり
十四時四七分　帰る（小野子はまだ誰も集っていない）

②参加人数

二三名
　大人二一名（男九名、女十二名）
　子供二名（小学生一名、幼児一名）

③唱え言葉

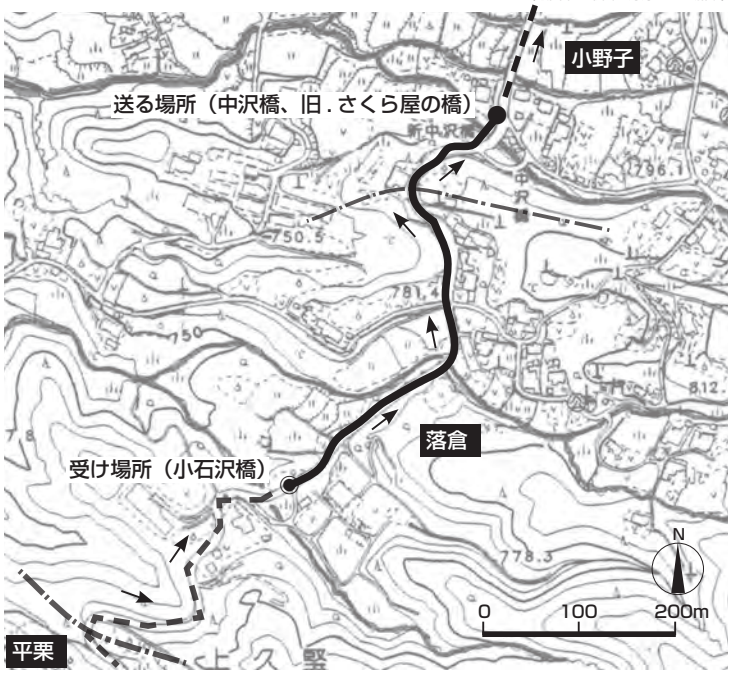
（鉦・チンチン、太鼓・ドンドン）わーしょい！
事の神（こーとかーみょ）送ろ（おーく）、どこまで送ろ（おーく）、中沢の橋まで送ろ（おーく）
かつては「さくら屋の橋まで送るぞ（おーく）」といった。桜屋は、昭和二七年ごろまでは、現在の新中沢橋の南側にあった。

④笹竹について

中沢橋にて　笹竹四九本（これまでの地区分を含める）
　旗二本、幣束二本（芋平から）
　合計五三本

〔図 10〕平栗・コトの神送りの東回りコース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



〔写22〕落倉、出発前にミコシくぐり

〔写23〕落倉の行列

■飯田市上久堅（小野子）【一覧表・地図番号24】

六、（東回り）小野子（おのご）、コトの神（風の神送り）

地元の呼び方　行事（準備～行列）は「コトの神」「コトー」、行列は「風の神送り」

行事日　二月八日、出発点の芋平より標高が低く雪も止んでいる

行　程　中沢橋～木山入り（きやまい）

行事の特徴　東回りルートの五番目の地区。送り場所である堂平の「木山入り」でミコシ、笹竹等は一泊する。

話　者　北沢孝臣氏（昭和二三年生）、小野子の皆さん

地区の状況　平成二四年・六二戸、一五五名

内訳は上組二一戸・四三名、中組九戸・二九名、下組三二戸・八三名である。

小学生が四名で中学生が三名、中学生になると部活動などあり、行事には参加しなくなる。昭和二〇～三〇年代は小中学生が五〇～六〇名いた。

（一）行事の概要

①行事の呼び方は年代で異なる

戦後の世代は、「コトの神送り」という。「コトの神」とも書く。短冊には「風」「風邪」と書く人もいる。

戦前の世代は「二月八日はコトの神の日」という。送り笹の準備から行列を含めてその日に行う行事を総称して「コトの神」といい、行列は「風の神送り」と呼ぶ。かつては「コトの神の日に、風の神送りをするんだよ」といういい方をよく聞いたという。またコトの神を略して「コトー」ともいった。「今日はコトーの日だ」という。

②「風の神送り」の変化

昔から「風の神送り」は、地区の全員で行う行事であるが、鉦、太鼓を叩いて「送り笹」を持って歩くのは、子供の役割であった。ところが現在は、子供が二、三名なので大人が担ぎ、担ぎきれない分は軽トラックで運んでいる。出発は毎年四時で、十五～二〇分で隣の堂平に到着する。

近年は行事への関心が低く、「送り笹」を作らない家庭が増え、送られてくる笹が昔に比べるとかなり少なくなった。それでも数名の子供では担げない。送られてくるミコシは小学校高学年が、いなければ大人が担いで歩く。

二〇年ほど前から、小野子の役員八名と一般の大人が三～四名、小学生数名が参加する行事となった。鉦と太鼓は諏訪社隣の「大昭館」（地区の集会施設）に保管している。

③各家庭の「送り笹」作り

「送り笹」「送り竹」と呼ぶ笹竹は、各家庭で準備する。マダケの頭の方を長さ一～一・五メートルほど伐ってきて、中折紙を四枚に切った短冊を付ける。四つ切りの中折紙の一辺を切り込み、コヨリにして取付用のひもにする。コヨリを上向きに菱形に向け、「午申」と上下に書く。この短冊は十二ヵ月分で十二枚準備する。

送り笹にはボンノクボの毛、爪、洗米を紙に包んでくくり付ける。ボンノクボの毛は抜くもので、昔は親が子供の毛を抜いた。ところがあまりに痛いので切ってもよいとなったが、今では付けない家も多くなっている。ボンノクボの毛は産毛、爪はのびるものだからといわれている。

送り笹は二月七日の夜に作り、家の各部屋を祓う。翌朝にお祓いをする家もある。疫神を笹に乗せ、送り出すのである。かつての竹は二～三メートルの丈で、現在のものより大きく、本数が多くなると担ぐのが大変だった。現在、送り笹を出す家は十軒前後であり、家の中を祓ってから出す家は一～二軒である。

④ボタモチ

北沢孝臣家では、二月八日の昼は必ずボタモチを作って食べる。アンコときな粉で、小野子では、現在でも作る家は多い。

（二）実施状況《平成二七年二月八日（日）》

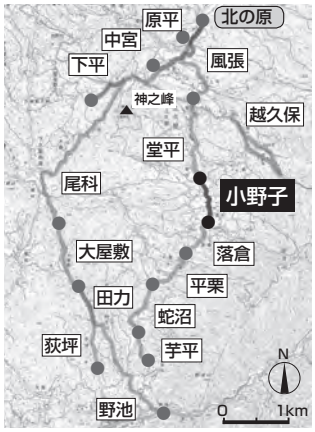
①参加人数　二三名

大人一八名（男一五名、女三名）

子供五名（男子小学生四名、女子一名）

犬一匹

（子供の役割）鉦（一年生男子）



〔図11〕コトの神送り・東回りガイド図（小野子）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写24〕小野子の風の神送り

太鼓担ぎ（五年生、六年生男子各一名）
太鼓叩き（二年生男子）

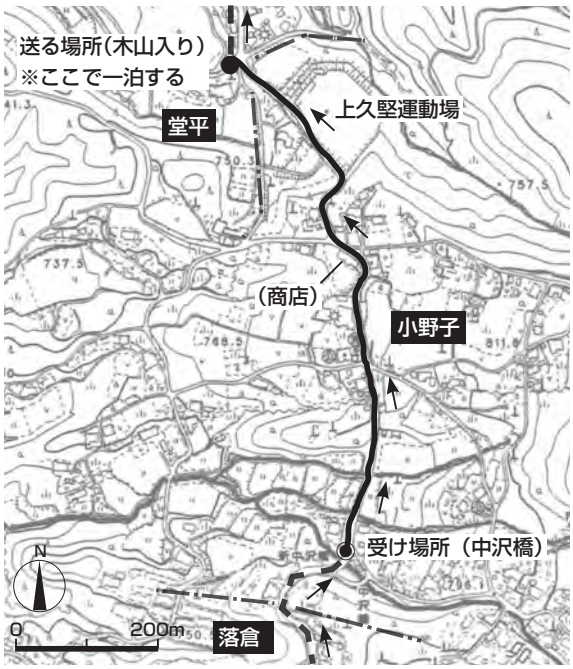
②日程

十五時四五分　小野子の人たちが中沢橋に集まり始める。
十六時五分　出発、旗類、鉦、太鼓（二名で担いで一名が叩く）ミコシ（二名）、送り笹
（軽トラなし）送り笹を拾いながら行列
十六時二〇分　堂平の「木山入り」と呼ぶ交差点に到着、置く場所は背後に竹林のある道際で雪溜まりとなっていた。皆でミコシくぐりをする。
十六時二三分　ミコシ、送り笹を置く。
帰り道では「やんかぼうず（きかない子供）」は「後ろを振り向くな、振り向くと風邪の神が乗り移るぞ」といわれて脅かされたという。

③送り笹（ミコシ、送り笹などは木山入りで一泊する）

木山入りにて　送り笹・五八本
旗二本、幣束二本　合計六二本

〔図 12〕小野子・風の神送りの東回りコース図



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

④行列の唱え言葉

（鉦・チンチン、太鼓・ドンドン）わーしょい！
事の神（かーみょ）送るぞ（どーこまーで送る（おーく））
北（きーた）のはずれ（はて）まで送る（おーく）ぞ
「送るぞ」「送れよ」など世代や人によって異なる。

■飯田市上久堅（堂平）【一覧表・地図番号25】

七、（東回り）堂平（どうだいら）、神送り

地元の呼び方　神送り、風の神送り、コトの神送り
行事日　二月九日
行　程　木山入り（堂平）から上久堅公民館前（風張）
行事の特徴　東回りルートの六番目の地区。二日目の開始地点。
話　者　島岡彦男氏（昭和三生）、堂平の皆さん

（一）行事の概要

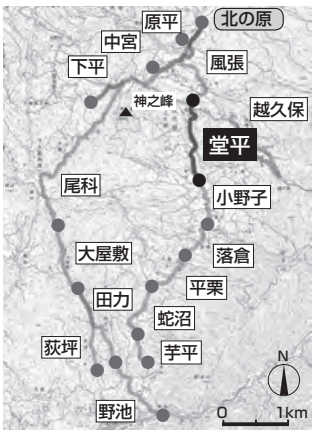
①行事の伝承

堂平では二月九日の行事のことを「神送り」と呼ぶが、「風の神送り」「コトの神送り」ともいう。

二月八日に千代の芋平を出発したミコシと集落ごとに追加された笹竹などは、堂平の小野子境で「木山入り」呼ぶところで一泊し、二日目は、堂平を午後三時に出発する。

話者の島岡氏によると、神送りが今日まで続いてきたのは、出発地点の芋平の人たちが、手間のかかるミコシを音を上げずに作り続けて送り出してくれるからであり、子供のいない集落では大人が代わりに行ってきたからであるという。また戦前に、一回だけ中止した年があったが、集団風邪が流行り再開したと聞いているという。

さらに、笹竹やミコシはいくつもの集落で受け継がれて運ばれるが、関わる地区が連携した会合や打合せを行ったことがない。どんなに雪が降っても忙しくとも、ミコシや笹竹は必ず来るもの、何としてでも次の集落に送らねばならないものと決まっていて、「もういやだからやめよう」など話したこともないという。



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔図 13〕コトの神送り・東回りガイド図（堂平）

〔写 25〕床の間に「風の神」を立て、コトボタモチを供える（堂平・島岡彦男宅）

〔写 26〕「風の神」で各部屋を祓う（同右）

②各家で作る笹竹「風の神」

八日の晩に、各家では笹竹を作る。島岡彦男家では「風の神」と呼んでいる。これは竹や笹の枝ではなく、芯のある幹の先端を二メートルほどの長さに切って用いる。頭（先端部分）のないものは縁起が悪いともいわれ、さらに枝葉のあるものを切ってくる。竹の太さは親指ほどがよい。

そしてその竹に紙の短冊を結びつける。短冊には馬・午・申・風の神・風・風邪などと書く。紙は中折（紙）で、四等分にして片隅に切り込みを入れ、これをコヨリにして小枝に結ぶ。枚数は奇数の九枚、もしくは一年の月の数で一二枚付ける。

さらに、家族全員のボンノクボの毛、米を中折にくるんで、水引で幹にしばり付ける。これは現在は行わない家もあり、若い夫婦などで知らない家も増えてきた。

翌朝、この笹竹で各部屋を祓いながら「風の神様、移って下さい」という。そして辻に笹竹を立てておく。すると行列が来たときに持って行ってくれる。

③コトボタモチ

八日の夜、出来上がった「風の神」は床の間に飾る。飾るといっても倒れないように立てかけておくだけであるが、これには「コトボタモチ」を供える。

島岡家では床の間、仏壇、神棚に「コトボタモチ」を供えた。「コトボタモチ」はもち米だけで作り、半殺しにつぶす。「コトボタモチ」は小豆ときな粉の二種類で、もち米ときな粉は、塩味にする。

④行列の今昔

かつてはどこの家にも子供が多かった。特に前日、二月八日に行列してくる小野子は子供の多い地区で、毎年六〇名ほどが参加していた。それぞれが大きな笹竹を抱えて坂を下って来るので、見上げていると竹やぶが動いてくるように見えたという。

以前は堂平の行列でも鉦と太鼓があり「わっしょい、風の神を送るよ、北の原まで送るよ」と囃していたが、現在は行っていない。

子供の行事なので、終わるとお菓子を出したが、行列に参加しなかった家からは、子供たちが「出不足金（でぶそくきん）」を集めた。それで駄菓子屋で飴などを買って皆で分けた。一銭で黒飴が一〇個買えた時代なので、一〇銭も貰えれば大したものだったという。

堂平は、昭和四〇年頃まで子供だけで行列を組めたが、現在は小学生から高校生までが一人もいない。さらに平日の夕方に参加できるのは高齢者が中心になるので竹を担げなくなった。一〇年ほど前から、参加者が小ぶりの竹を持ち、ミコシを担ぎ、あとは軽トラックで、次の中継地点の風張の公民館前まで笹竹を運ぶようになった。当初は「神様を軽トラックで運んでよいのか」などの意見もあったが、今では当たり前になったという。

行列が終わると自販機で買ったお茶が配られ、一息ついてから戻る。振り返ると「風の神」が付いてくるといわれ、振り返らずに帰る。

（二）実施状況《平成二七年二月九日（月）》

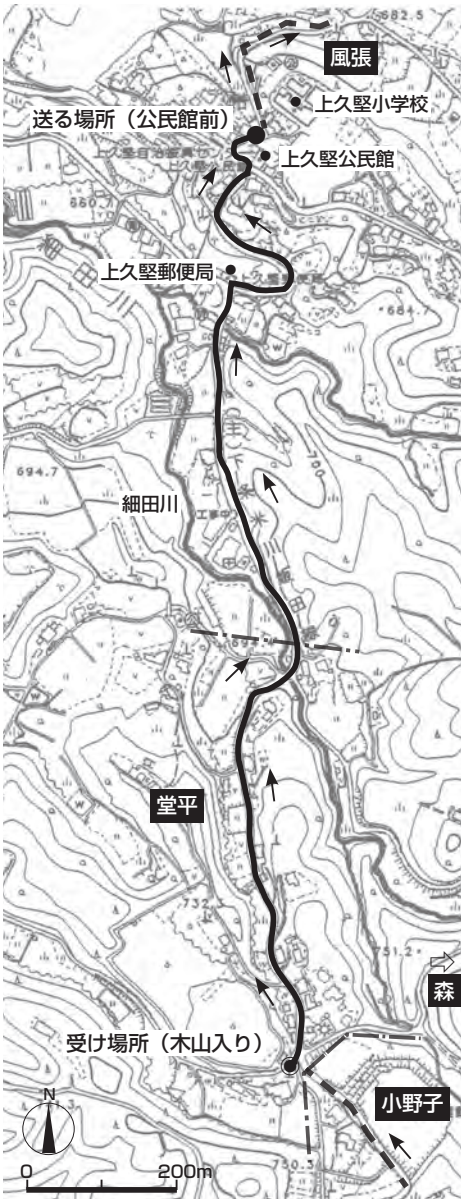
①日程

一四時四五分ごろ　堂平の参加者が集まり、軽トラックに笹竹を積み、ミコシくぐりを行う。

一五時　それぞれに持ち物を分担して出発。

現在の行列は、旗と御幣各一名が先頭、ミコシ（二名）、笹竹を手にした参加者、軽トラックが三台（平成二七年）、

〔図 14〕堂平、送り神の東回りコース図



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写27〕堂平の行列

最後に旗と御幣各一名が付く。

※鉦、太鼓、唱え言葉はない。

一五時二五分　公民館（上久堅支所前）に到着。笹竹を降ろし、ミコシを置く。皆でお茶を飲んでから戻る。

②参加人数

一八名

大人一七名（男九名、女八名）、幼女一名

③送り笹

木山入りにて　送り笹・六六本、旗二本、幣束二本、

合計七〇本

■飯田市上久堅（風張・上平）【一覧表・地図番号26】

八、（東回り）風張（かざはりかみだいら）・上平、子供のコト念仏・送り神

地元の呼び方　コト念仏（口頭では、コトウ念仏、コウトウ念仏）、送り神・風の神送り

行事日　コト念仏　二月六日（近年は二月の第一土曜日）

送り神　二月九日、道際にはほとんど雪がなかった。

行　程　公民館前～北の原（終着点）

行事の特徴　東回りルートでは七番目、最後の地区。

話　者　小池健一氏（昭和十八年生）、

柴田房子氏（昭和二〇年代生）、風張・上平の皆さん

（一）行事の概要

【昭和三〇年頃のコト念仏】

①行事の呼び方

二月六日の念仏は「コトウ念仏」「コウトウ念仏」というが、文字にすると「コト念仏」になる。現在の子供たちは「コトネンブツ」という。

二月九日のコトの神送りは、風張では「送り神」「風の神送り」と呼ぶ。

②念仏の伝承

小池健一氏によると、子供の頃、昭和三〇年頃の念仏は、頭取が口述で伝えたり、黒板にひらがなで書いたもので覚えた。現在の念仏と細かくは異なる。学校から帰ると集会所に集まり、自分たちでイロリに火をおこして二時間ほど練習した。特に新兵（新しく入った子供の呼び方）は何もわからないので頭取が教えた。

現在は、練習を行う集会所に額装した念仏の墨書が掲げてあるが、これは柴田安人氏（大正一〇年頃生）が住職から念仏を教わり、平成二〇年ごろ納めたものである。〔写29〕

③子供の行事、コト念仏の参加者と頭取

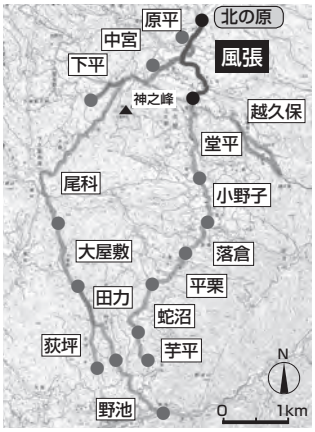
昭和三〇年頃は、風張と上平の一〇歳から一五歳の男の子で、長男だけ、もしくは一人だけがコト念仏に参加できた。長男は六年間参加できるが、次男は長男が一五歳を過ぎねば参加できない。年子だと一回だけになる。

飯田市美術博物館編集・発行の『上久堅の民俗』では「参加者は小学二年生から中学二年生までの男子であったが、昭和六〇年頃から女子も参加するようになった。平成十五年には合計十二人、うち女子が五人で、頭取の親一人が付き添った」とある。

かつては一五歳が頭取と呼ばれ、行事の一切を仕切った。一五歳が複数いれば子供たちで代表を選ぶ。当時は風張五〇数戸、上平四〇数戸で合計九〇戸近くあり、該当する子供も四〇人以上いた。各戸を念仏して歩き、金銭（現在はお布施という）が貰えるのが楽しみだったという。営林署、駐在所、学校なども回り、戻るとたいがい夜一〇時を回っていた。もらった金銭を持って、店で菓子と小瓶の酒を購入し、残った金銭は頭取が全員に分けた。四〇人で分けるとたいした額ではないが、お金を貰えることが嬉しい時代だった。菓子は皆で食べ、酒は太鼓の皮の養生に吹きかけた。おおらかな時代だった。

念仏では頭取、金集め、鉦、太鼓の役目があった。かつては食事とか休憩はなかったが、人数が多かったので、自分の家の近くになると役目を交代してもらい、家に食事に立ち寄った。たいがい食事は飯と豚汁と決まっていた。

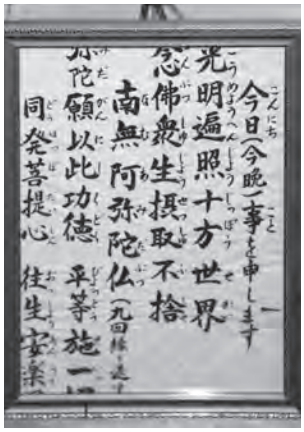
役の子供たちは、事前に山に行き、鉦と太鼓のバチ用の枝を採りに行った。特に樹種にはこだわらず、真っ直ぐな枝を太鼓のバチに、先の曲がったものを鉦のバチにした。バチは毎年新調していた。



〔図15〕コトの神送り・東回りガイド図（風張・上平）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写28〕風張・上平の練習の様子（集会所にて）



〔写29〕集会所に掲げられている唱え詞の額

④ボタモチ

コト念仏の日には小豆ときな粉のボタモチと豚汁を食べた。これを「ボタモチ」と呼んだ。豚汁は家による。ボタモチは先祖様（仏壇）と神棚に供えた。

【昭和三〇年頃の送り神】

①送り神について

二月六日のコト念仏に参加した者は、二月九日の送り神にも参加しなければならない。

昭和三〇年頃の送り神の行列は、送られてきた旗と幣束が先頭で、鉦と太鼓が続いて歩いた。ミコシは、子供が四人で担いでいた。その後に笹竹を持った子供たちが続き、総勢四〇名ほどになった。一年の行事で、子供だけで行うのはコト念仏と風の神送りだけだった

送り神には喧嘩がつきもので、北の原にミコシや笹竹を送った後に、上平の坂で、下平の子供たちと小競り合いが起こった。半分は余興であったが、学校の先生が仲裁に入るほどの騒ぎになったこともあった。中宮は下平の子どもと共に喧嘩に加わっていたが、原平は別行動で喧嘩はなかったという。

送り神に関しては他の地区と一切打合せをしたことがない。戦時中は分からないが、堂平からミコシや笹竹が来なかったことはない。堂平は大人が行列して運ぶが、ミコシと笹竹を置き役目を終えると静かに帰っていく。送られてきたものは、また送るだけと、暗黙の了解で決まっていた。雪も雨も関係なく、頭取が風邪をひけば代わりの者が頭取となり、ミコシと笹竹を北の原まで送った。

②笹竹

風張・上平では、昔から笹竹を出す人が少ない。それまでの各集落から送られてくる笹竹があまりに大量であるため、親たちが子供を気遣い多くは出さなかったという。子供たちは担ぎやすいようにしばって運び、沿道の笹竹を拾い集めながら北の原に向かった。そして歩きながら送り神の歌を歌った。（後述）

送る神は「風邪の神」で厄も送ると考えられている。

（二）実施状況《平成二七年二月七（土）、九日（月）》

①参加者

参加者は三名、中学生が全員中学三年生以上になったので、小学生だけで行った。それぞれの父親が付添った。

六年生・男子　頭取・太鼓
三年生・女子　集金係
三年生・男子　鉦
子供たちの父親三名　付添い

②練習

一週間程前から、一七時から一九時頃まで集会所で練習する。コト念仏と唱え言葉を何回も繰返して練習したり、一人ずつ順番に唱えたりする。練習の仕方は頭取が決める。

合間に休んだり遊んだりする。親や幼い兄弟もその場にいたり、出入りしていた。

【コト念仏・平成二七年二月七日（土）】

①日程

十五時四五分　集会所（風張生活改善センター）に子供と親が集まり始める。センターに隣接する薬師如来堂の扉は開放され、お供えが並んでいる。

十六時五分　集会所前の広場（薬師如来堂前）に子供たちが出てきて念仏を始める。念仏は向きを変えながら、八方向に向かって唱えた。

十六時一〇分　三名の小学生にそれぞれの父親が付添い出発。鉦は直径二五センチあり重いので、父親たちが交代で担いだ。

十六時一八分　一番目は久堅神社と境内の祠などで念仏を唱えた。その後上平地区の家々を巡る。約四〇箇所で念仏を唱えた。

十八時二〇分　集会所に戻り、子供たちの母親や役員が作ってくれた夕食のカレーを食べて一休みする。

十九時　再開。後半は風張地区を回る。西から回り、診療所

〔写30〕コト念仏は各家を巡回し念仏を唱える

〔写31〕決められた祠で念仏を唱える（上平の若宮様）

〔写32〕念仏のお布施をもらい、丁寧にお礼をする

まで南下し、JA上久堅支所で一休みし、東端の越久保境を巡り、上久堅小学校に立ち寄った。夕食後は、約五〇箇所で念仏を唱えた。

二一時二〇分　集会所に戻る。出発時と同様に八方向に念仏を唱える。集会所の念仏を含め九二箇所で念仏を唱えた。

二一時三〇分　一休みしてから、頭取の姉が加わり別室でお布施を精算する。菓子代や食事の材料費などを差し引き、残金を三名で分け、のし袋に入れ、頭取が「お疲れ様でした」と手渡す。饅頭がお布施の時代もあったというが、今も昔も住民の子供たちへのねぎらいの気持ちがお布施や菓子になっている。二二時半ごろに解散となった。

②念仏のやり方

家々を訪ね玄関ブザーを押すと、家人が玄関先に出て来て念仏が始まる。頭取の「さんし」の合図で「今日事申します」と始まる。練習を重ねてきたので、二〇秒前後で終わる。集金係が頭を下げてカバンを掲げると家人がお布施を入れてくれる。皆で頭を下げてから次の家に向かう。お布施を隣家に頼んである留守宅も数軒あった。

一七時半頃になると薄暗くなり、子供たちが一番星をさがしてきょろきょろする。一番星を見つけると「今日事申します」が「今晩事申します」に変わる。

③念仏

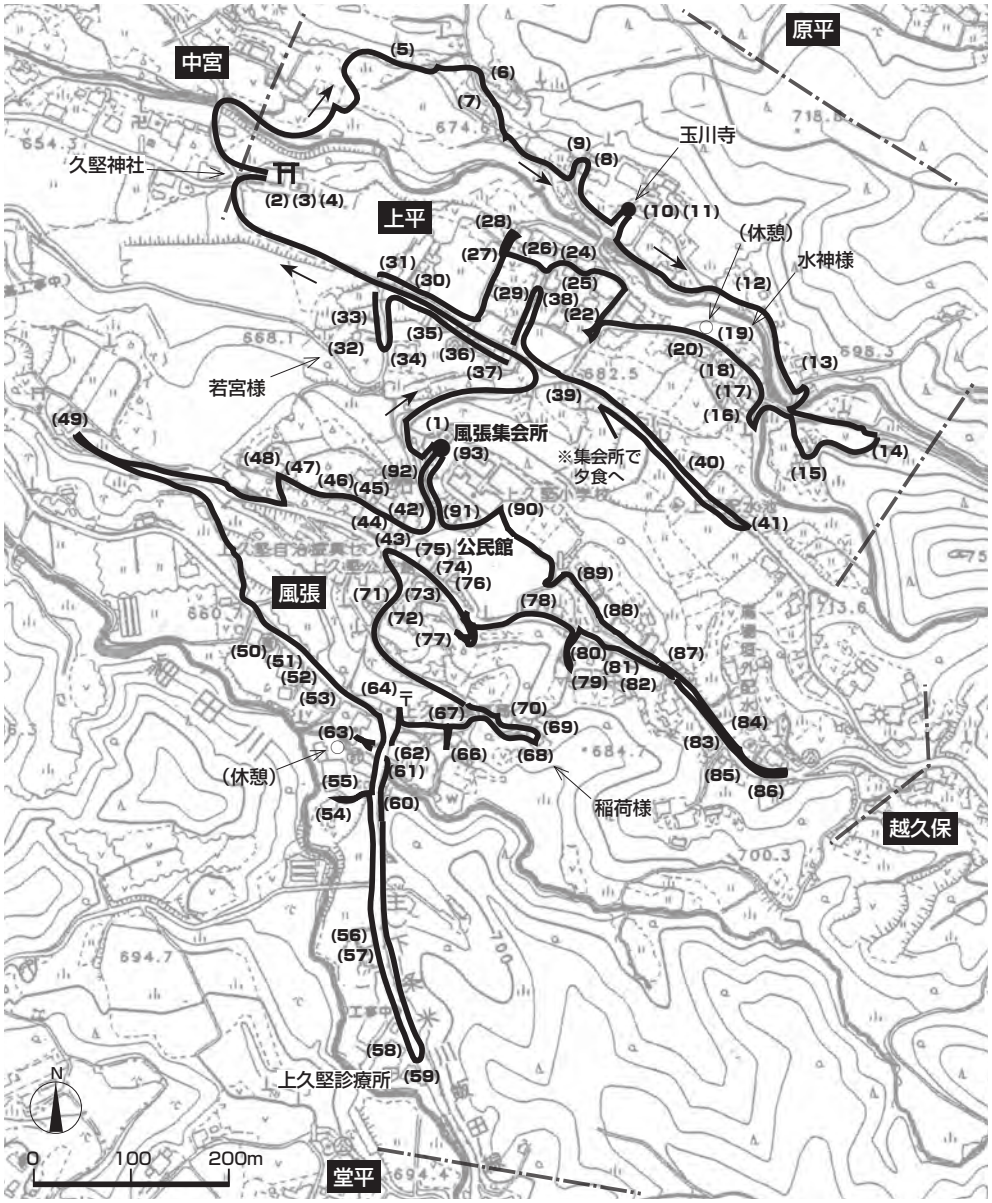
（文字とずれるので子供たちの念仏をひらがなで記載する）

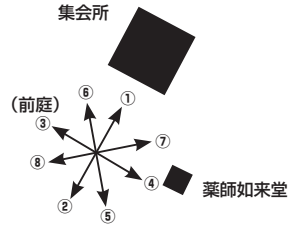
さんし（頭取のみが合図）
今日事申します（日没後は「今晩」）
こうみょうへんじょう　光明遍照
じっぽう　せかいねんぶつ　十方世界
しゅじょう　せっしゅ　ふしゃ　念仏衆生　摂取不捨
なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ
南無阿弥陀仏
みだが（ん）にしくどく　弥陀願以此功徳
びょうどうせぇいっさい　平等施一切
どうほつ　ぼだいしん　同発菩提心
おうじょう　あんらっこく　往生安楽国

※文字では「世界」「念仏」は区切れているが、口頭ではつなげて唱える。またかつては、最後の「こく（国）」がなく、「あんらく」で終わっていた。

〔図 16〕風張・上平のコト念仏コース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）





集会所前で八方向に念仏

丸付き数字は、その順番

一五年ほど前に、柴田安人氏が玉川寺住職に教わって念仏を文字に書き起こし額装してから「国」を発音するようになったようだ。

【送り神・平成二七年二月九日（月）】

①原平集会所、西回りと合流して北の原へ

送り神には、コト念仏と同じ小学生三名とその幼い兄弟二名、大人六名の合計十一名が参加した。風張の公民館前を出発し、原平（柏原と呼ぶ）の集会所に向かった。数年前から、東回りの風張・上平、西回りの下平、中宮集落集会所から北の原まで行列する中宮、原平集会所から北の原に向かう原平の四地区（風張・上平の二集落を一地区として）が一旦、原平の集会所に集合してから、北の原に向かうようになった。その順番は決められていないし、先を争うこともない。

北の原はウツギ沢の支流の上流部で、飯田市と喬木村の堺を喬木村側に数メートル入ったところである。北の原は字名ではなく、送り神の時にだけ用いる通称である。

北の原に到着すると、それぞれが順番に道路から笹竹などを谷に投げ入れる。次に一地区ずつ投げ入れた場所の道路際に一列に並び、念仏を一回唱える。かつては二回唱えたり、鉦と太鼓のバチを投げ捨てたという。

このとき子供たちは他の地区の念仏を耳にして、地区ごとに念仏の言い回しや鉦と太鼓の叩き方が異なっていることに気づく。どの地区も自分たちが一番正しいと思っているので、他の地区の念仏を聞いて笑っている。同じ念仏でも長い年月の口伝えの繰り返しにより違いが生じていた。

②参加者

コト念仏を行った子供（三人）とその兄弟（六才、四才の二人）、親と役員（六人）の合計十一人。

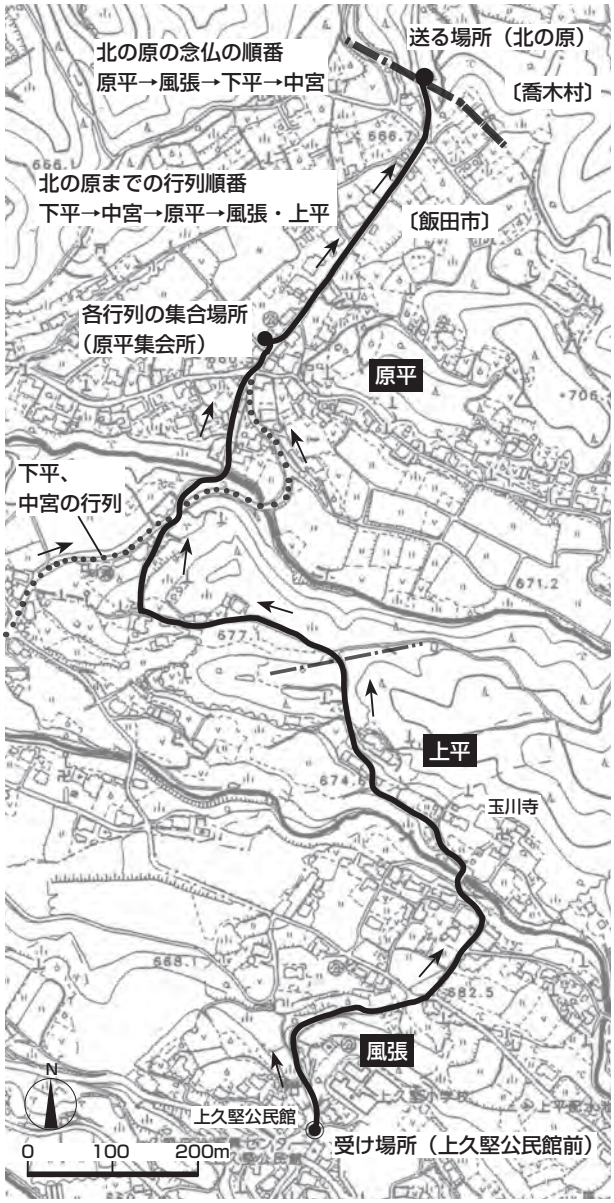
②日程

十六時三〇分　子供の父親の一人が、笹竹約六〇本を軽トラックに積む。ミコシ、旗などは路上に残し、人手で運ぶ。

十六時四〇分過ぎ　参加者が置き場に集まってくる。

十六時五〇分　出発

〔図 17〕風張・上平の送り神東回りコース図　（飯田市地形図一万分の一に加筆）



十七時十六分　柏原の原平集会所に到着、他の地区が揃うのを待つ

※各集落との合流の状況は「十四、下平」八二頁以降を参照

十七時三〇分　西回りの下平、中宮、原平の行列と合流して原平集会所を出発、北の原まで行列

十七時四〇～四五分　北の原に到着した順に、ミコシ、旗、幣束、笹竹を投げ込む

十七時四六分　原平念仏

十七時四七分　風張念仏

十七時四八分　下平念仏

十七時四九分　中宮念仏

皆、ぞろぞろと（振り返らずに）各地区に戻っていく。

③送り神の唱え言葉（現在）

サンシ（頭取のみが合図）

送り神を　送れよ

何神を　送れよ

〔写33〕風張・上平の送り神行列

風の神を　送れよ
どーこまで　送れよ
北の原まで　送れよ
そーりゃ　（チンチン）
それ（チンチン　チチン、チン　チチチン）
そーりゃ
※鉦のチンと同時に太鼓も同じリズムで叩く。

《※ここから西回りのコトの神送り》

■飯田市千代（野池）【一覧表・地図番号27】

九、（西回り）野池、子供の大将荒神・コトの神送り

地元の呼び方　大将荒神、コトの神送り（風の神送り）
行事日　大将荒神　二月七日（二月八日の前の土曜日）
　コトの神送り　二月八日、ぼた雪状態の湿雪
行　程　大将荒神　野池地区内巡回
　コトの神送り　公民館前～田力（大石家）
行事の特徴　西回りルートの出発地点。前日に行う念仏行事を「大将荒神」と呼ぶ。
話　者　宮下賢一氏（昭和二三年生）
　宮嶋秀行氏（六〇代）、野池の皆さん
野池区の状況　合計七五軒
　第一小組合・十六軒　第二小組合・六軒
　第三小組合・十九軒　第四小組合・十七軒
　第五小組合・六軒　第六小組合・八軒
　第七小組合・三軒

（一）行事の概要

【行事の由来・歴史など】

①『千代風土記』「大将荒神と事の神送りについて」（注5）

野池　熊谷瑞穂著（大正四年生）※故人、原文のまま

「二月七日、八日の両日に行われる行事である。其の起源は明らかではないが、その行事に使われる数珠の一番大きい玉に天保四年（一八三三）とあるから、その年から始まったと思われる。

天保三年と云えば、歴史にのこる日本の大飢饉の一つで、当地方も其の極に至ったと思われる。住民は飢と栄養失調のため、病人は続出、死人相次いで難渋して居る時、当地を訪づれた名高い行者の御告げで、これは仏様の四天王の内の、大将軍、金神様のたたりだから、数珠を繰り乍ら、大将軍、金神と唱え祈るようにとの事で、それから今日まで続いて居るものと思う。

長い年月のため、大将軍、金神と唱えたのも、「たいしょうこうじん」と変り、その使う数珠も、始め三百六十五箇の珠をつないであったものが、今日では半分位になって居る。」

「二月七日の（大将荒神）は子供の行事であるのに対し、翌八日の事の神送りは大人の行事である。

事の神送りは、風の神送りとも云い、早朝竹の小枝に十二枚の紙片に、馬と書きそれをつるし御洗米、家人のかみの毛、爪など少し入れたものをつるし、家の内を祓い、御茶を供えてから、辻々迄出して置く。やがて時間を決めて村人達は、それを集め乍ら一定の場所に、集合する。

集合出来ると、隣部落境迄、紙ののぼりを立て、鉦、太鼓をたたき、空の鉄砲を打ちながら送って行った。」

【かつての大将荒神】

①昭和二〇年代の大将荒神

二月七日の午後は「大将荒神」で、十五歳以下の子供たち（小学一年生から中学三年生まで）が集まり、「大将荒神」と唱えながら野池の全戸を巡った。大将荒神は子供たちの行事である。唱える詞は「大将荒神」の繰り返しであるが、大数珠を左回り（反時計回り）に繰り、大珠がくると額に当てるように掲げ祈願する。

戦前までは男子だけが参加していたというが、昭和三〇年ごろには女子も参加していた。当時野池は百三〇軒もあり、回るのは大変だった。子供たちも各学年ごとに十人以上いたので総勢百名以上の行列であった。

〔写34〕野池神社を後にして米川を目指す一行

〔写35〕第六子組合では数珠を掲げて万歳三唱も

（注5）『千代風土記』編集委員会編、千代公民館発行、昭和五八年三月　十六頁

当時二月七日の大将荒神に参加する子供たちは、千代小学校では早引が許され、午後二時には下校して、三時には野池神社を出発した。野池神社に集合すると最上級生の中学三年生が、もらう大豆を入れるための大きな布袋を幾枚も準備していた。子供たちは大将荒神専用の半纏を作ってもらった。両袖の下に振り袖のように大きな袋が縫い付けてあり、もらった大豆などを一杯に詰め込んでいたという。

地区内の巡回は夜中十二時を過ぎ、一時、二時になることもあった。小学校低学年は第六小組合が終わるまで、小学校高学年は第三小組合が終わるあたりまでで、それまで貰った豆などを均等に分け与えられて解散した。その後は中学生だけで回り、数珠、鉦、太鼓を保管場所の宮嶋家に無事に返すまでが役目であった。

皆へとへとで足を引きずり歩くうちに、重い鉦の足が地面に当たって取れたり、数珠が切れたりしたという。数珠を引きずらないようにと、体に巻き付けて運んだこともあった。中学生は無事に役目を果たすと、もらった金銭を分け合った。

貰い物は大豆、地豆（落花生）、榧（かや）の実、裕福な家は干し柿、大半の家は柿の皮などであった。柿の皮とは、干し柿を作る時に出るむいた皮のことで、干すと菓子の代用品になった。昭和三〇年代には菓子が多くなり、現金も貰うようになった。

②大将荒神の変化

大正生まれの世代は、一軒ごとにもれなく回っていたというが、昭和三〇年頃、宮下賢一氏（昭和二三年生）が参加した時には集会所に住民が集合する形式になっていた。住民が増え、回りきれなくなり、集会所を巡ることになったという。現在もこの形式で行っている。

鉦と太鼓を叩きながら、数珠が三周するまで大将荒神を唱え、次の集会所に向かう。台地の上にある野池神社から米川河川敷に下り、上流を目指す。

野池神社域の第一小組合の次は、米川流域の第四小組合、公民館脇の第六小組合、上流に向かって第三小組合、第五小組合、最後が第二小組合である。午後一時に出発し、二時半頃終了する。その場で参加した子供たちに菓子や文房具を配って解散する。

平成十五年頃から、野池区の行事となり、予算を組み、子供たちに配るものを決めた。初めは文房具などであったが、現在は図書券を配っている。大将荒神は千代小学校のＰＴＡが取り仕切るようになり、二月八日のコトの神送りの前の土曜日に行うことになった。

③木地師の作った数珠

大将荒神で使う数珠、鉦と太鼓は野池神社近くの宮嶋家が保管している。長さは八メートル余あり、大数珠が一個、中数珠が一個、小数珠が二六一個ある。

宮嶋秀行氏によると、かつては中数珠が四個あり春夏秋冬を意味し、小数珠が三六五個で一年を表していたという。長年の使用で数度紐が切れ、そのたびに数珠の数が減っていったという。大数珠と中数珠には、次の紀年銘が刻まれている。

《大数珠》

施主　村中

天保四癸巳年七月吉日（一八三三年）

施主　　大平新右ェ門

同世話人　宮嶋圓左ェ門

《中数珠》

小椋吉右ェ門藤原義近　作

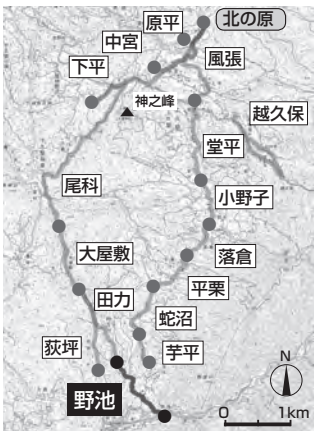
「同世話人」の「宮嶋圓左ェ門」は宮嶋家の先祖で、古くから数珠を保管してきたという。小椋吉右ェ門藤原義近は、製作者の木地師であろうが、在所は不明である。

【かつてのコトの神送り】

①西回りコースの一番手、昭和三〇年代のコトの神送り

野池はリレー式のコトの神送り・西回りの出発地点である。東回りとの違いは、「コトの神」の依代が笹竹だけで、ミコシも幣束ものぼり旗もないことである。その理由は定かでない。途中の大屋敷で「御神木」が加わるが、二つほど先の集落である。

大正生まれの人たちの話として、野池も紙ののぼり旗と出発時などの空砲があったということだった。昭和末年に、芋平と同じのぼり旗を作り空砲を撃ったが、その後は行われていない。

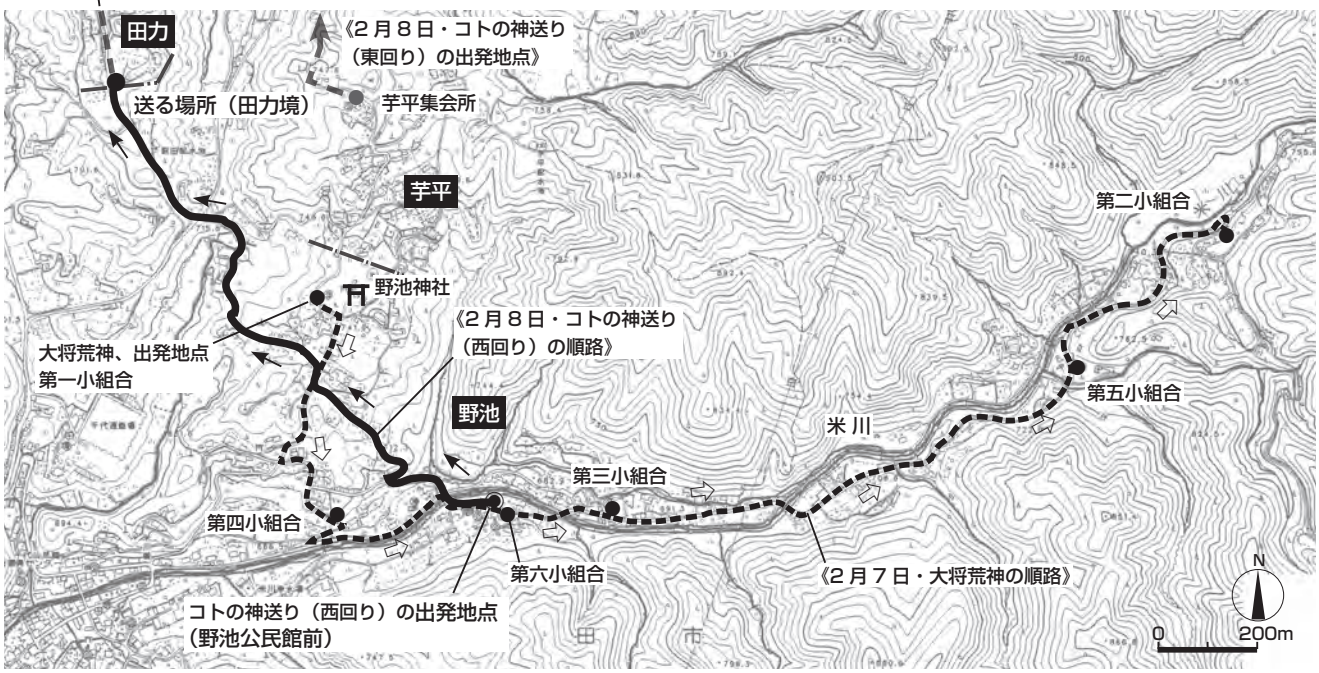


〔図18〕コトの神送り・西回りガイド図（野池）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写36〕数珠の年号と製作者

〔図19〕野池、大将荒神とコトの神送り西回りルート図



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

コトの神送りが最も盛んだったのは昭和三〇年代で、戸数も一〇〇戸ほどあり、一〇〇本近い笹が送られていた。当時は米川流域の山々での炭焼や山仕事が多く、平日でも参加する人数も多かったが、既に勤め人もいた。行事の後の直会は盛大で、男衆より多くの女衆（婦人会員）が集まり、豚汁などを振る舞いにぎやかだった。学校を休んで参加する子供も多かった。

②現在のコトの神送り

現在のコトの神送りも、曜日に関わらず二月八日である。参加者は勤め人以外の高齢者が中心で、毎年十五名前後である。笹竹は三〇本ほど出される。およそ戸数の半分ほどであるが年々減っているという。

笹竹は「笹」などと呼ばれ、一・五～二メートルほどの高さで、ハチクなどの細い竹を選ぶ。「馬」「風の神」などと書かれた中折紙の短冊（十五センチ角）が吊るされている。十二枚といわれているが、現在はまちまちである。

コトの神送りは、二月八日の午前九時三〇分に野池公民館前を出発し、三～四箇所の辻で出されている笹を拾いながら、隣の田力に向かう。道中では鉦と太鼓を叩くが、唱え言葉はない。

笹が五〇本以上になり、手に余る時は軽トラックに載せたこともある。軽トラックの帰路には鉦と太鼓、足の悪い高齢者を載せて帰る。参加者は公民館まで戻り、一時間ほど直会を行ってから解散になる。

（二）実施状況《平成二七年二月七日（土）、八日（日）》

【大将荒神・平成二七年二月七日（土）】

①参加者

行列参加者・合計　約三〇人

中学生九人（鉦・一人、太鼓二基、二人、いずれも三年生）

小学生十人

幼児二人

付添いの大人（PTAと役員）七～八人

各集会所で待っていた住民は参加者とは別に六箇所合計で、約五〇人

〔写37〕平成二七年の行列はミゾレ混じりの雨

〔写38〕平成二六年は朝から大雪だった（記念写真より）

②日程

十二時五〇分　野池神社境内（社殿前）に集合。
役員の挨拶後、子供たちが十分程練習してから神社境内隅の第一小組合集会所へ移動。

十三時六分　第一小組合集会所（住民四～五人待つ）皆で輪になり大将荒神（四五回）、鉦と太鼓が大珠が二度回ったのを見て連打して終了した。

十三時二四分　第四小組合集会所（住民五人、幼児二人）
時間が早かったので二回行う。一回目大将荒神（三六回）、二回目大将荒神（六〇回）

十三時四〇分　第六小組合集会所（住民九人が待つ）
一回目大将荒神（六六回）、二回目大将荒神（四八回）
「今年が最後だから」というおじいさんが先導して数珠を差し上げ万歳三唱。

十四時　第三小組合集会所（住民十五人、乳児一人）
一回目大将荒神（六六回）、二回目大将荒神（四七回）

十四時二〇分　第五小組合集会所（住民七～八人）

十四時四〇分　第二小組合集会所（住民六～七人）
その後、子供たちに図書券とジュースなど配り解散。

【コトの神送り・平成二七年二月八日（日）】

①参加者

大人十三名（内、女性一人）

②日程

八時四五分頃から　野池公民館前に集合

九時　出発。みぞれで積雪あり、天候が悪いので八〇代の高齢者が来なかった。上流部の第二、第五、第三小組合から持ち寄られた笹を含め、野池公民館前の笹を参加者で手分けして持つ。笹の出も少ないため軽トラックの必要もなく、途中の辻に出されていた数本の笹を拾いながら早足に歩いた。

九時五二分　境の峠から百メートルほど坂を下りたところの辻の置き場に到着する。二七年の笹は計十八本だった。一名が「コトの神が来たぞー」と田力集落方向に叫ぶ。
境の家の庭木ヒメコマツに笹を立てかける。

九時五六分　恒例の記念撮影をしてから、公民館へ向かう。

十時四〇分頃～十二時　野池公民館で直会。賄いを含め約十五人が参加した。公民館には平成二〇年からの記念写真の額が掲げてある。

■飯田市千代（田力）【一覧表・地図番号29】

十、（西回り）田力（たじから）、コトの神送り

地元の呼び方　コトの神送り、コトの神

行事日　二月八日

行　程　野池境（新墓地峠（しんぼち）の下）から大石家（田力のはずれの家の屋号）の先

行事の特徴　西回りルートの二番目の地区。

話　者　萩元文雄氏（昭和二六年生）区長
嶋岡一蔵（いちぞう）氏（昭和十一年生）、田力の皆さん

地区の状況　田力は現在十九戸、六五人ほど（終戦直後は引揚者などで二七戸あった）

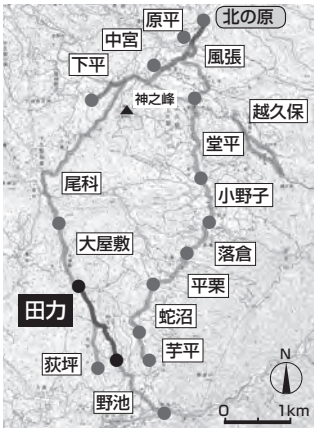
（一）行事の変化と現状参考文献

①参加者

現在の参加者は大人であるが、元は子供が主体であった。子供とは、国民学校の高等二年が長（ちょう）であったが、昭和二二年に六・三制になると中学三年生が長としてコトの神行列の先頭を歩くようになった。平成五年頃から大人が関わるようになった。

現在も小学校と連絡を取り、午後三時出発で小学生が参加して行っている。かつては地域の行事、祭りの時は学校を休んだり早引することができたが、今は学校の終わる時間に合わせて、親が車で迎えに行くこともある。

行事の終了後は、田力区の助成によって子供たちに菓子を出して交流会（直会）を行っている。行事を子供たちに継承していこうとしている。



〔図20〕コトの神送り・西回りガイド図（田力）
（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写39〕子供が書いた短冊

〔写40〕出発地点、子供たちが笹竹を分けて分担する

②笹竹の作り方

笹竹に短冊を付けたものを「コトの神」「笹竹」と呼んでいる。竹の種類はハチク、シチクと呼ばれる小ぶりな竹である。マダケは大きいので使わない。

その竹を採ってきて、穂先を少し切り詰めてから背丈ほどの高さに切断する。穂先を詰めない人もいる。そして枝を上から五本もしくは七本目までの奇数にして、その下の枝は切り取る。そして紙で作った十二枚の短冊をつるす。

短冊には「馬」「風」という文字を書いたり、馬の絵を描く。版を押す家もある。疫神を馬に乗せて運ぶという意味であるという。現在は家ごとに自由に短冊を書いている。

さらに家族全員のボンノクボの毛と爪を紙に包んで笹竹の一番下の枝の元のところ当りにくくり付け、洗米を乾かして別にくるんで一番上にくくる。洗米をくくらない家もある。二〇戸ほどの集落であっても家ごとに作り方が異なる。毎年十五本前後が辻に出される。

③笹竹の置き場

野池の「コトの神」を受取る場所は新墓地（しんぼち）峠だったが、平成十五年頃から峠を田力集落側に下った辻のところに移った。道路改修で現在地が広くなったからである。

笹竹を置く場所は田力のはずれの北澤家（屋号・大石屋）の前の沼塩川を渡ったところなので、送る時は「大石屋まで持っていく」という。一・二キロほどの距離である。

④神送りの行列

かつては中学生に毎年リーダー格がいて、下級生に鉦と太鼓を叩かせ、大声で唱え言葉を言わせた。現在は大人が先導するようになっている。今の子供たちは保育園児の時から参加しているので、皆、唱え言葉をよく覚えている。鉦と太鼓は誰でもよく、自由に交代して叩いている。

大屋敷境までは三〇分ほどで到着するので、毎年徒歩で行っているが、平成二六年は記録的な大雪で、この時は野池から送られてきた笹竹を大人が車で運んだ。

大屋敷境に着くと、例年、大屋敷の人たちがすでに集合して待っている。その場に置いて受け渡しをして、振り返らずに戻り、集会所に向かう。集会所で子供たちはジュースを飲んだり菓子を貰って帰る。大人たちは直会で一杯飲む。

田力の子供たちが通っている千代小学校は協力的で、先生が参加することもあり、クラス単位で参加したこともある。中学は竜東中学だが、中学生になるとクラブ活動などが楽しくなり、地域の行事にはほとんど参加しなくなる。

⑤念仏について

田力では、年間を通じて念仏の行事はない。しかし、集会所内には薬師如来のお堂が移設してあり、数珠も保管しているという。いつの頃までか定かでないが念仏行事が行われていたのであろう。現在の昭和生まれの住民に、伝承としても記憶している人はいない。

⑥行事の今後について

田力ではこれまでに子供が全くいなくなったという年はないが、乳児や幼児の動向をみると、今後はその可能性もある。千代小学校でも新入生がなく、入学式がないということが何回もあった。この行事は大人だけでもできるので、まだまだ継承は可能であるが、子供たちに伝えていくことも重要であると考えている。常会などで地区の住民の参加を促し、学校とのつながりやインターネットなどで外部との交流を大切にしていくことも重要であると話し合っている。

また、行事に関しても受け継いで行っているが、コトの神送りの意味もわからず、隣の地区がどのようなことを行っているか、最終的にどうなるかなど行事に関する知識がないのも問題であり、世代が変わるごとに変化するので、守るべき伝統を知らねばならないと話し合っている。

（二）実施状況《平成二七年二月八日（日）》

①参加者　総勢三四人

大人十九人

子供は小学生と幼児で、乳児一人を含め、一五人

（地区の小学生は全員で八人である）

〔写41〕田力の屋並を行く、にぎやかな行列

〔写42〕笹竹を送る場所で参加者の記念撮影

※例年は参加者が二〇名程だが、日曜日と重なり、子供を連れて里帰りしていた家族の参加などがあり、例年より多かった。

②日程

十四時五〇分　田力の住民が集まり始める。開始直前まで雨が降る。雪のことはあるが、雨天は始めてであるという。

十五時十分　行列を作り、鉦と太鼓を先頭に出発する。道中、五箇所の辻で笹竹を集めながら進む。

最終的に田力からは十五本の笹竹が集まった。

十五時三六分　大屋敷境、大石屋の先に到着。

送る場所には、二月七日にコトの神送りを行った西隣の荻坪の七本の笹竹と旗一本が到着している。野池から受け継いだ十八本を含め、四〇本の笹竹が大屋敷に渡された。

既に大屋敷の住民が待っていて「すごい人数だな、どっかから借りてきたのかい？」と声がかかる。

十五時四〇分　置き場で記念撮影をして、振り返らずに戻っていく。

十六時過ぎから　集会所で直会

子供たちにはお菓子と飲み物が振る舞われ、大人たちは一杯やって賑やかに語らい、散会となった。

③囃子詞

鉦と太鼓で

（チンチン、ドンドン）

よーい、よい　事の神（こーとかーみ）送れ（おーく）、何神（なーにがーみ）送れ（おーく）

■飯田市千代（荻坪）【一覧表・地図番号29】

十一、（西回り）荻坪（おぎつぼ）、コトの神送り

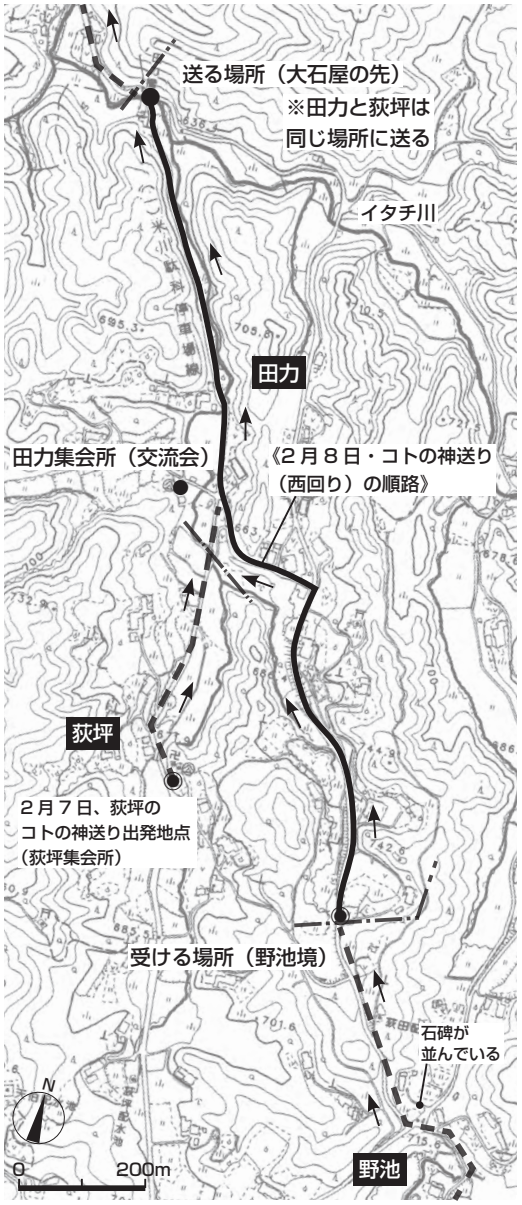
地元の呼び方　コトの神送り

行事日　二月八日

行　程　荻坪集会所前～田力・大屋敷境のT字路

行事の特徴　西回りルートの田力と平行するコースで置き場も同じであるが、二月七日に先行する。

〔図21〕田力・荻坪、コトの神送り西回りコース図



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

話　者　荻坪行列の皆さん

（一）実施状況《平成二七年二月七日（土）》

①笹竹

名称不明、「笹」「竹」と呼ぶ場合が多いようだ。短冊は十二枚というが、実際は多い。短冊の文字には「事の神」「風の神」「交通安全」「午」「申」など、「千早振る二月七日は吉日ぞ、事の神をば送りこそする」も見られた。

行列の先頭に「事の神送り」と書かれた紙の旗が掲げられたが、新聞社の取材があるとの連絡で、住民のひとりが急あつらえしたものである。毎年のものではないが、行列の目印となるため、以降の地区も受け継ぎ、北の原に送られていった。

②参加者

合計十人　子供六人、大人四人

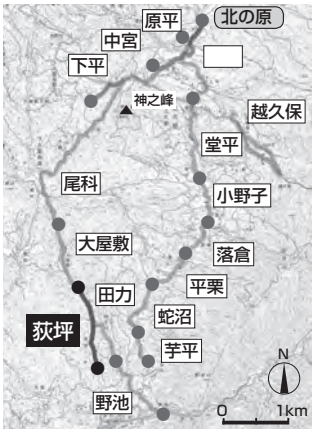
内訳　子供　小学六年生　男子・二人

（二人で太鼓担ぎ、前がのぼり旗、後ろが叩く）

小五年生　女子・一人

小四年生　女子・一人

〔写43〕平成二七年の行列で初めて作ったのぼり旗



〔図22〕コトの神送り・西回りガイド図（荻坪）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

小二年生　女子・一人
保育園年中組・一人
大人　男性・三人（一人鉦を持ち叩く）
女性・一人

③日程

十四時五〇分頃　参加者が集まり始める
十五時　分担、やり方など打合せ
十五時十分　出発
十五時二四分　到着

〔写45-1〕集会所でコト念仏（大屋敷）

④唱え言葉

事の神（こーとかーみ）送れ（おーく）（チンチン、ドンドン）よーい　よい
風の神（かーぜかーみ）送れ（おーく）（チンチン、ドンドン）よーい　よい

徐々にペースが早くなるものの、絶え間なく唱えていた。笹竹を送った後は「振り返るなよ、悪い神様や風邪の神様が付いてくるから」と大人が子供たちをさとしながら帰っていった。

■飯田市龍江（大屋敷）【一覧表・地図番号30】

十二、（西回り）大屋敷、コト念仏・コトの神送り

地元の呼び方　コト念仏、コトの神送り・風の神送り
行事日　コト念仏　二月七日
　コトの神送り　二月八日
行　程　コト念仏　各家の回り番（現在は集会所）
　コトの神送り　田力境～尾科境
行事の特徴　西回りルートの三番目の地区。集落内で御神木を作りコト念仏で拝み、コトの神送りで笹竹と共に送る。尾科境で笹竹と御神木は一泊する。
話　者　中山與文（よふみ）氏（区長）
地区の状況　十五戸三六人（子供は一人もいない）

（一）行事の概要

【かつてのコト念仏】

①当番と参加者の変化

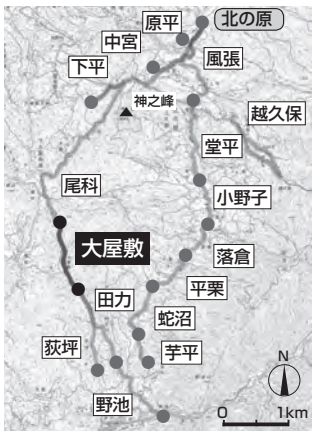
平成二二年頃まで家並びの順に当番（宿番、宿ともいう）があり、その家に集まってコト念仏を行っていたが、高齢者が大半なため家を片付けたり準備するのが大変なので、集会所に集まって行うやり方になった。集会所では当番の家が音頭をとる。

昭和三〇年代は大人と共に、いつも小学生が二四、二五人集まっていた。一戸から何人参加してもよく、楽しみとして参加していた。現在は一戸一人出るようにと呼びかけている。

②昭和五〇年の公民館報より

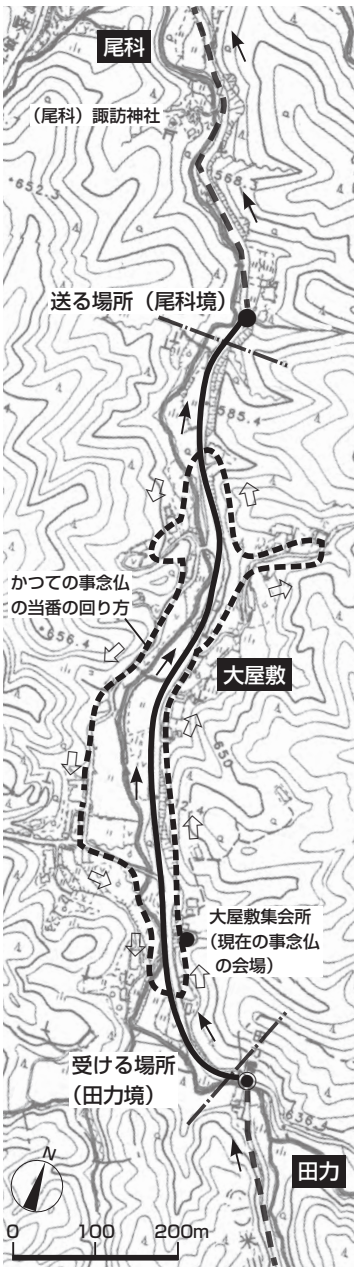
龍江公民館報『龍江新聞』昭和五〇年二月一日土曜日版による

〔写44〕荻坪の行列は旗、担ぎ太鼓、鉦と続く



〔図23〕コトの神送り・西回りガイド図（大屋敷）
（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写45-2〕集会所の祭壇、掛け軸、笹竹、中央に御神木、左に積まれているのが袋詰めの大豆



〔図24〕事念仏のかつての当番の回り方（点線）と事の神送りの順路

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

と、「事の神送りの前夜は、（大屋敷、尾科部落）共事念仏といわれるものが行われ、大屋敷部落では、毎年二月七日の晩に、当番の家に老若男女が大ぜい集まり南無阿弥陀仏と書いた心木を前に出席者の年長者が念仏の音頭をとり、当番の家から順に「何某家安全南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱え全戸の祈願をする。このあと豆や茶菓子の接待を受けて一夜を楽しく過ごすのである。」

文中の「心木（しんぼく）」は現在「御神木」と書き「ゴシンボク」と呼ぶ人が多い。南無阿彌陀仏の回数など、今日の念仏と異なる部分もある。

③コト念仏の「御神木」

コト念仏を行う地区で、毎年、御神木を新調して拝み、コトの神送りで送るのは大屋敷だけである。

御神木は大屋敷の元大工職・溝下昌氏（八〇代）に、当番が注文して準備する。平成二七年の御神木は高さ二一寸（六三センチ）正面幅一寸二分（三・六センチ）側面一寸（三センチ）のヒノキ製の四方柾に近い角材で、十二段の三方刻みがついている。素人では作れない。ここに「南無阿弥陀仏　平成二七年二月七日」と書き込む。ご本人は年齢的に「神木作るのは今年でおしまいだ」と言われていた。

④祭壇

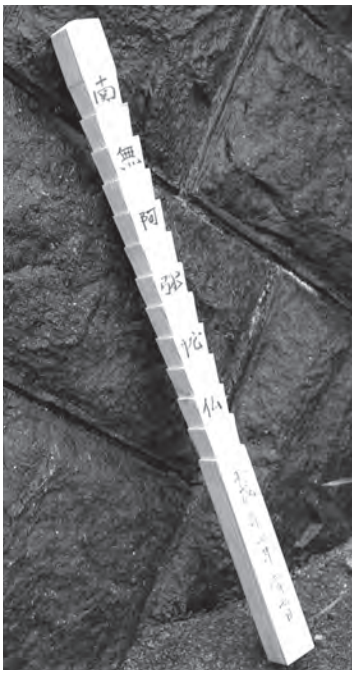
当番の家でコト念仏を行っていた時は、床の間に「南無阿彌陀佛」の掛け軸を掛け、御神木を立てかけ、ロウソク、供え物を並べ、鉦を叩く年長者が御神木の前に座り、その回りを参加者が囲んでいた。その後、集会所で行われるようになると、長机をに供え物を並べ、祭壇とした。

平成二七年の祭壇には、正面に掛け軸、隣に御神木、さらに笹竹（当番の家のもの一本）が立てられ、机には塩、神酒（一対）、ロウソク（一対）、菓子器に炒り豆（大豆）、袋入りの持ち帰り用大豆（十数袋）、鉦と木槌が置かれた。

⑤豆食い（大豆）

コト念仏は「豆食い」と呼ばれるほど豆を配る。家に持ち帰った大豆は、食べると病気にならないと言われ、家族皆で一～二粒ずつ食べ、残りは神棚に上げて夏までおいた。夏に雷が鳴ると食べ、雷除けにしたという。かつては田の畦豆として作り、炒り豆にして一握りずつ中折に包んで渡したが、今は袋に入った大豆を買ってきて皆に配っている。

この豆と直会の酒、飲み物、菓子、つまみ等は当番の負担で、お布施が貰えるわけではなかった。今は御神木代を含めて、常会の費用で負担している。



〔写46〕御神木（高さ六三センチ）

〔写47〕大屋敷の行列

【かつてのコトの神送り】

①昭和五〇年の公民館報より

龍江公民館報『龍江新聞』昭和五〇年二月一日土曜日版に、次のように紹介されている。

「野池を出発した事の神は、田力を経て大屋敷の境まで送られてくる。ここで待っている子供や大人は（事の神＝笹竹を）一本残らず各人にわけてもち、鐘や太鼓を先頭に行列を作って県道を「コトノカミオークレヨ、デンデンチャンチャン、オークレヨ」と言いながら大屋敷部落の風邪の神を集めながら尾科境まで運ぶのである。部落境につくと全部まとめておき、後をふり向かずに家路にと急いで帰っていく。」

田力と荻坪から送られてくる笹竹を受け継ぐ場所、次の尾科に渡す置き場の名称（字など）はない。終わったら振り向かずに帰り、流れ解散になる。

②笹竹について

各家で作るのは「笹竹」という。「笹」ともいうが、細い竹の先端部分で一・三～一・五メートル程の長さにする。その笹に六～七枚の短冊を付ける。かつては中折で作ったこよりでしばったが、今は水引も使う。

短冊は中折紙を切って作る。地区や家によって異なるが、大屋敷は小さめで長方形も多く、中折一枚から八枚の短冊を作ることもある。

短冊には「事の神」「風の神送り」「家内安全」「無病息災」「馬」「申」などと書き込む。さらに家族全員の髪の毛と爪を切って中折でくるんで、水引で笹にむすぶ。

笹は玄関の前に置き、午後三時までに県道に出しておく。

（二）実施状況《平成二七年二月七日（土）、八日（日）》

【コト念仏・平成二七年二月七日（土）】

①参加者　大人十六人（内、女性十人）※五〇代以上

②日程

十八時頃　当番や婦人たちが集まり、直会の飲食などの準備をする。

十九時　コト念仏開始、六分ほどで終了する。

十九時十分　直会

③念仏のやり方

当番の家が皆に声をかけ、祭壇の前に集まり念仏が始まる。御神木を作った溝下氏が年長者として祭壇の前に座り、各家の屋号（家名、エナともいう）をいうと全員が「ナムアミダブ」を八回唱え、同時に溝下氏が鉦を叩く。最後に鉦を連打して次の家を拝む。

「それじゃオオムラ（当番の家の屋号）から、ナムアミダブ（皆で八回唱える）」終わると鉦六回連打。

「次はサカモリ、ナムアミダブ（皆で八回唱える）」鉦六回連打。

このように一六戸に対して順番に念仏をあげ、「どうもご苦労様でした」とねぎらい、念仏は六分ほどで終わる。引き続き、直会になる。直会が終わると当番は、祭壇の笹竹と共に御神木を集会所の外の道際に出しておく。翌日のコトの神送りで運ばれていく。

【コトの神送り・平成二七年二月八日（日）】

①参加者　十一名が参加（いずれも大人で男六人、女五人）

②日程

十五時　受け取り場所に集合、七日にコトの神送りを行った荻坪の笹竹七本と旗一本が既に置かれている。

十五時三六分　田力の一行が到着し、笹竹を置く。

十五時四〇分　大屋敷の行列が出発。

十五時四五分　集会所前を通過、笹竹二本と御神木を拾う。その後二箇所で六本（一本と五本）を拾う。毎年出す家が出ていないので、玄関先まで声を掛けに行くが不在。

十五時五七分　尾科のはずれの三石宅の下に笹竹と御神木を置く。

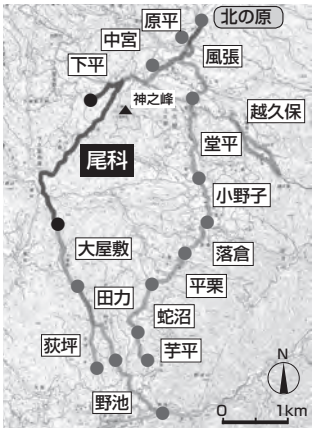
野池の十八本、荻坪の七本、田力の十五本、そして大屋敷の八本を併せ、四八本を運んだ。そして振り向かずに家に向かった。

③唱え言葉

コトの神送りは、鉦と太鼓を叩いて、言葉を唱える。

（デンデン、チャンチャン）

〔写48〕尾科境に笹竹と御神木を送る（大屋敷）



〔図25〕コトの神送り・西回りガイド図（尾科）
※次頁を参照

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

送れよ、事の神送れよ、北の原まで送れよ
なお、太鼓は二〇年ほど前に壊れてから叩いていないという。

■飯田市龍江（尾科）【一覧表・地図番号31】

十三、（西回り）尾科、コト念仏・風の神

地元の呼び方　コト念仏、風の神
行事日　コト念仏　二月七日
　　風の神（風の神送り）二月九日
行　程　コト念仏　各家を巡回（現在は尾科公民館）
　　風の神　大屋敷境～ジタジタ峠
行事の特徴　西回りルートの四番目の地区。風の神は、かつては徒歩で尾根伝いに大鹿地区を通過して、下平地区の境のジタジタ峠に送っていた。
話　者　三石倉雄氏（八八歳）、三石福志氏（八五歳）
　　三石継男氏（七九歳）会長、石正直氏（七九歳）副会長
　　三石良平氏（七八歳）、三石友美氏（七五歳）
　　中山政人氏（六一）、尾科の皆さん

（一）行事の概要

【かつてのコト念仏】

①『尾科誌』のコト念仏解説

行事の概要として、平成二六年に尾科常会が発行した『尾科誌』には次のようにある。

「子どもたちは夕方、公民館に集まり、皆で話し合って準備をする。この間、大人たちは見守るだけで口は出さない。その年の年長者を頭とし、その合図に従い、それぞれに役目をもたせ、子どもたちだけで出発する。各家の前に着くと静かに立ち、（中略）念仏を唱え、悪霊を驚かせて退散させる。各家からは、家人が作った「ぼた餅」でもてなしを受けたり、お駄賃としてお菓子や少額の浄財をいただいたりする。」

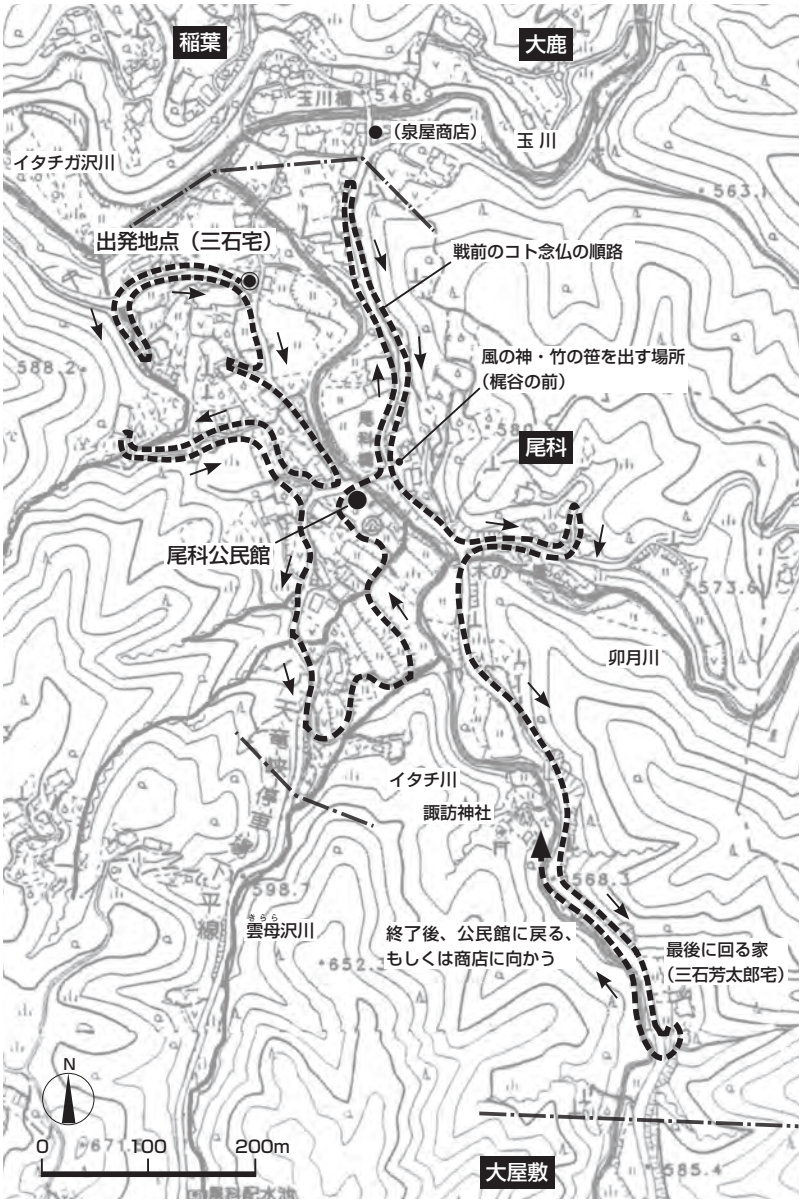
②戦前・戦後のコト念仏参加者

コト念仏の参加者は、昭和十年代は尋常小学校から国民学校に移行する時代であるが、いずれも小学校（もしくは初等科）六年生（十二歳）から高等小学校（もしくは高等科）二年生（十四歳）の三学年が該当した。男子だけで各家一名のみとしていた。但し当時は二五戸の集落で、年度ごとに生徒数にばらつきがあるので、子供が少ない年は小学五年生から参加していた。一学年三～四人ほどで、総勢十～十四人の集団であった。

当時は小学一年生から高等二年生を「少年団」と呼んでいた。その上が「青年団」になる。昭和十五～十八年頃が最も子供の人数が多かったという。

その後、六・三制になると小学六年生から中学三年生までになった。

〔図26〕尾科、かつてのコト念仏の巡回コース（昭和10年代）　（飯田市地形図一万分の一に加筆）



〔写49〕かつてのコト念仏は各家を巡り行った

③昭和十三～十六年頃のコト念仏

当時のコト念仏は夕方五時頃から始まった。コースは年ごとにグループで決めていたが、北側の稲葉境の三石通宅から出発することが多かった。イタチ川の東側を巡り、公民館前を通りイタチ川の東側を北から巡る。

歩いている間は静かにして、玄関の前でいきなり鉦と太鼓を叩く。寝ていたネコが驚いて飛び上がったこともあった。そして南端・大屋敷境の三石芳太郎宅で終わる。

夜八時近くに終わることが多く、各家からいただいた浄財（お布施）を持って全員で、再び北端に向かい、玉川橋のたもとの「泉屋」という店に行く。その日は若い衆が訪れると分かっているから、夜まで店を開けて待っている。店先でお布施を分けて、皆が菓子など買って家に帰っていった。

④ボタモチについて

戦後、昭和三〇年頃のコト念仏では、参加する子供たちがボタモチのお重を一つ、漬物などを持って公民館に集まっていた。終わってから皆で食べた。

⑤参加者の減少と体制の変化

昭和五〇年代以降、子供が減り始め、参加者を小学校一年生から中学三年生までと広げ、女子にも参加を呼びかけ、それでも人数が少ない場合は、夜間に至るので保護者が同行するなど、行事の継承に努力したが、平成十年代で最後の中学生が卒業して、子供がいなくなった。

そして平成二四年から高齢者クラブ（六八歳以上）に行事の継続が託された。平成二四、二五年はかつてと同じように、公民館の前で一回目の念仏をあげてから一軒ごとを訪ね回った。念仏についてはわずかな練習で問題なく行えたが、足腰が丈夫な者は二二人の会員の内三人で、あとは乗用車二台で一時間かけて回り、女性五～六人は直会の準備をした。

そこで二六年からは、全員が公民館に集合して、公民館の入口で男性が一回目の念仏をあげ、中に入って直会の準備をしている女性も共に全員で二回目の念仏をあげるというやり方に変えた。念仏の回数は減ったが、昭和三〇頃のゆっくりとしたリズムの念仏を唱えている。必要に迫られた改善策であるという。

【かつての風の神】

①名称と参加者

二月九日の行事は「風の神」「風の神送り」と呼んでいた。コト念仏に参加した子供たちが風の神も行った。

②「竹の笹」の準備

笹竹は「竹の笹」と呼んだ。長さは家によってまちまちだったが、背丈ぐらいが多かった。昭和の初め頃はもっと背丈があったようだが、子供が大きな竹を運ぶのはかわいそうだと、年々短くなっていったという。枝ぶりの決まりはないが、芯の出ている（芯持

〔図27〕尾科、風の神の西回りコース図（今昔）　（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写50〕現在は公民館の中で事念仏を行う（尾科）

ちの）竹、若くて頭の成長が止まっていない竹を選べといわれた。

そこに「馬」もしくは「午」、「申」と書いた紙の短冊を十二枚吊るした。さらに古く、大正初年生まれの世代は版木による猿と馬の版画を吊るしていた。

そして家族全員分のボンノクボの毛を抜いて、紙に包みおひねりにして下の方にくくりつけた。昔は床屋などなかなか行かずぼさぼさの頭をしていたので抜きやすいが、それでも痛かったのを覚えているという。

髪の毛は、悪病を運んでくれる猿にあげるため、という古老もいた。「猿は毛が三本少ないから」だそうだ。

「竹の笹」は八日の晩に、「梶谷（かじや）」の前（中山家の屋号、公民館前の橋を渡ったところ）に出すように決まっていた。この時、置いた竹を振り返ると風の神が戻ってくるといわれていた。

③昭和十三～十六年頃の「風の神」

尾科の「風の神」は隣との村境まででではなく、尾根を通り、さらに次の村境近くまで、およそ三キロメートル余りの距離を送った。戦前は、「風の神」の日は学校を休んでいた。

朝五時頃公民館に集合すると、おばあさんがイロリに火を焚き「坊たち、寒いからあたっていけ」と声をかける。手甲を長靴の隙間に巻いて雪が入らないように身支度して、炉端で長靴のゴムが臭くなるほどあぶってから出発した。

大屋敷から送られてきた一五〇～二〇〇本程の「竹の笹」は、尾科の南端の三石芳太郎宅の道端に積まれている。まずそれを十数名で担ぎ、大屋敷から来た御神木も担ぎ、村の中央の「梶谷」の前まで運ぶ。そこで尾科（二五軒分）の「竹の笹」と併せて束に結い直してから担ぐ。

「竹の笹」の束は縄でしばると、元で直径二〇センチほどになる。太い束と細い束の差ができて、上級生がわざわざ作った太い束を二つ選び、太鼓とチン（鉦）をしばり付け、「少年兵」と呼ぶ新米の六年生二人に担がせた。太鼓は二本の小枝を締め太鼓のひもに通してからしばった。太鼓を取り付ける束に御神木をくくり、先頭を行った。当時の御神木は現在より太かった。上級生は軽い束を担ぎ、行列の後方を歩く。

村の中央の「梶谷」の前を出発した一行は、（大字）龍江地区の尾科から下久方地区の稲葉に入り、尾根道を伝って上久堅地区の大鹿、さらに下平境のジタジタ峠を目指す。尾根道に入るまでは「唱え言」を歌った。「風の神を送る唄」ともいった。

ジタジタ峠の平地につくと、「竹の笹」の束をばらばらにして拾い集めにくくした。「下平の衆と出会うと喧嘩になる」と上級生に聞かされていたので、早朝にもかかわらず、茂みに潜んでいるような気がして、竹を置くと斜面を転がるように逃げ下りた。

「裏（うら）（後ろ）を振り返ると風の神が付いてくる」といわれ、また来た道を再び通ると風の神に帰り道を教えることになるといわれ、尾根伝いの往路は通らずに、道のない斜面を大鹿の集落に向かって我先にと駆け下りた。崖から転げ落ちても太鼓と鉦だけは離すな、音を立てるなといわれていた。

ジタジタ峠まで二時間ほど掛かり、到着するのは朝八時頃で、尾科に帰ると九時を過ぎる。その日は学校を休んでいたが、戦後になると休むのは好ましくないということになり、さらに出発が早くなり（四時～四時半）、家に帰って朝食を食べてから龍江小学校まで通った。

（二）実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（日）》

【コト念仏・平成二七年二月七日（土）】

①参加者　十八人（内、女性十一人）

②日程

十三時過ぎ　尾科公民館で準備が始まる。（机、鉦、太鼓、念仏を書いた紙貼りなど）

十三時五〇分　皆が集まり、挨拶など始まる。

十三時五七分　男性七人が公民館隣の中山宅前で、玄関前のかつての念仏を再現して頂いた（二回、一回目は練習）

十四時二分　同じく七人が公民館前で念仏（一回）

十四時七分　公民館の中で、直会の準備等をしていた女性十一人と共に、総勢十八人で念仏を行う。（例年一回であるが、特別に二回唱えて頂いた）

十四時十分頃から　直会

〔写50-1〕集落の中で荷をまとめ、かつての行列を再現

〔写50-2〕ジタジタ峠に送られた「竹の笹」、木立の合間に神之峰が見える

③現在の念仏

（チンチン、ドンドン）※鉦と太鼓同時に叩く

こうみょー、へんじょー　光明遍照

じっぽー、せかい、　十方世界

しゅじょうねんぶつ　衆生念仏

なむあみ　だぶつ、なむあみ　だぶつー　南無阿弥陀仏、

南無阿弥陀仏

子供の頃は耳伝えなので「じっぽー、せかい」を「にっぽん（日本）、せかい」だと思い、「しゅじょうねんぶつ」は「しゅ」が消えて「しょうねんぶつ」になっていた。現在は文字に当てて直して唱えている。

【風の神・平成二七年二月九日（月）】

①近年の状況

平成二四年から高齢者クラブが行事を行うようになってからは、尾科からジタジタ峠まで軽トラックで運んでいる。朝も八時半頃にした。経路は尾根道ではなく、大鹿集落を通る沢沿いの車道を使い、一旦、下平に入ってから再び山道を戻り、ジタジタ峠に向かう。竹を降ろした帰路は、尾根道をしばらく走ってから大鹿の集落に下り尾科に戻る。近年は道路工事などで帰路がばらばらであるが、往路と同じ道を通らないようにして帰っている。

②参加者　六人（内一人記録係）

③日程

八時三〇分　集落南端の三石芳太郎宅前（置き場）に集合、七〇～八〇代五人と区長（動画記録担当）

八時四五分　五束に荷造りして五人で担ぎ、かつての姿を再現して唱え言。そのまま軽トラックに「竹の笹」を積み、集落の中央に向かう

八時五〇分　集落の中央の「梶谷」前で、尾科の「竹の笹」八本を加え、束を結い直して、再び唱え言をいう。先頭太鼓、二番に鉦、「竹の笹」が三人が並ぶ。

九時　「竹の笹」の束を再び軽トラックに乗せ、ジタジタ峠を目指す。軽トラック一台、乗用車一台、区長のワンボックス一台、通年は二台

九時十六分　ジタジタ峠下に到着、広場に「竹の笹」を運び上げる。五人でかつての運び方を再現しながら竹を置く。昭和二〇年代は、周りの樹木が小さく、広場も半分ほどの大きさであったという。

九時四〇分　ジタジタ峠を後にする。尾根の細い車道を通り、往路と異なる道で帰る。

九時五〇分　尾科公民館前に戻り、解散。

④風の神を送る唄

何神（なーにがみょ）　送れ（おーく）よ

風の神（かーぜかーみょ）　送れ（おーく）よ

どーこまーで　送れ（おーく）よ

北（きーた）の原まで送れ（おーく）よ　そーりゃ

トーン、トーン　トントントン、トントントン、

トントトトトトン、トン　トン

（このリズムで太鼓と鉦を同時に叩く、仲々覚えられなかったという）

■飯田市上久堅（下平）【一覧表・地図番号32】

十四、（西回り）下平（しもだいら）、コトオ念仏・風の神送り

地元の呼び方　コトオ念仏、風の神送り・ゲイキの神送り

行事日　二月六日　コトオ念仏（現在は二月第一土曜日）

※平成二五年は二月七日（土）

二月九日　風の神送り

行　程　コトオ念仏　下平巡回（神之峰を含む）

風の神送り　ジタジタ峠から北の原

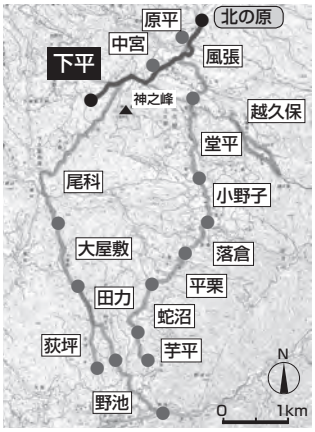
行事の特徴　念仏では神之峰を巡回し、かつては中宮も一巡していた。神送りは西回りルートの五番目で最終地区。

話　者　清水和彦氏（昭和二一年生）

清水貫司（かんじ）氏（昭和六年生）、下平の皆さん

地区の状況　五四戸・百四〇数名

小学生・中学生各一人ずつ



〔図28〕コトの神送り・西回りガイド図（下平）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写51〕下平の鉦（縁に刻んである銘）

信州知久下平水上薬師堂

昭和十年春彼岸　施主　平中

（一）行事の概要

【かつてのコトオ念仏】

①参加者の変化

コトオ念仏と風の神送りは子供の行事で、参加者は数えで十歳から十五歳であった。小学校三年生から中学校二年生の早生まれの六学年が参加できる。さらに一軒一人で男子と決まっていた。そして最上級生の一人が頭取を務める。頭取は一週間程前から練習日を決め、念仏と唱え言葉の練習を数回行う。

平成になると子供が減少し、一軒一人であったものが兄弟複数の参加が許され、女子も参加し（始まりは昭和四四年頃）、平成十年頃には女子の頭取も登場した。

②コトオ念仏の順路（昭和三五年頃）

下平のコトオ念仏は、子供たちが集団で各家を訪ね、念仏を唱える。戦後から昭和三〇年代のコトオ念仏は三〇～四〇人程で巡回していた。

集落の中央の三叉路、やまさき橋近くの橋爪宅（現在は湯沢宅）に太鼓、鉦、集金袋などの道具が保管され、午後四時にこの家を出発した。十五歳が太鼓、十四歳二人で鉦を担ぎ、十三歳が集金袋と役割が決まっていた。念仏の出だしの「今日（こんにち）事申（ごと）します」は十四歳の者がいうことになっていた。

念仏の順路は神之峰を経由するが、昭和三〇年代は徒歩で「馬道」と呼ばれている山道を登って神之峰を目指した。途中には、太鼓や鉦を叩く予備のシュモクを捨てる場所があった。当時シュモクは山から採取した枝で皆で五〇本程作り、ここに来るまでに良いものを選び、残りを捨てる慣習があった。いわれは不明である。現在はＪＡ上久堅の駐車場から、子供たちは乗用車に分乗して神之峰に向かう。

道中では六箇所で神仏にも立ち寄り念仏を唱える。家々では「今日事申します」ではじまるが、神之峰の久堅神社では「南無、神様、今日……」、五輪塔では「南無、五輪様、今日・・・」、秋葉神社の石碑などでは「南無、秋葉様、今日・・・」となる。

神之峰には午後五時頃に着き、五輪塔のある栗林方面に下山し、下平公会堂を通過していく。かつては栗林の五輪様ではひざまづいて念仏を唱えることになっていたという。

現在は下平公会堂で夕食をとるが、当時は国道を二五六号を西に向かい、掘割を過ぎ台地に上り、生水沢（うむいざわ）で夕食になった。夕食は各自が持参した焼いた餅、もしくは生餅で、焚き火で温めたり焼いたりして食べた。ボタモチではなかった。必ず焚き火があって、食事が終わると夜七時をまわっていたという。

そこから下久堅に入り、沢を迂回して中宮地区の北西の隅、「ウシロダ」という屋号の家に着く。かつては下平の子供たちが、中宮地区も巡回して念仏を唱えていた。中宮は三〇戸ほどで、当時、中宮の子供たちは念仏を行っていなかった。全戸を回り終わると中宮橋に出て、出発地点のやまさき橋近くから西の裏路地に入り、下平の残り七～八軒を回り、橋爪家で終了する。遅いと夜十一時を回っていた。

昭和三五～三六年になると中宮の子供たちも念仏を始めた。明治・大正生まれの古老は、中宮は念仏は行ってなかったが、悪い病気が流行ったときに下平が念仏に回って以来、毎年行くようになったと語っていたという。

念仏が終わると、終戦前後の頃は、公会堂の近くにあった「タマヤ」という店に直接向かい、店の主人が立ち会って頭取が貰ったお金の会計を行い、皆に分配した。たいがいの子供は、高価で普段食べられないイモボシ（干し芋）と地豆（落花生）をその場で買って食べた。

③念仏

念仏は口伝が基本で、頭取がひらがなやカタカナで書いて教えてくれることもあった。当時の子供たちは意味もわからず、とにかく唱えて歩くものだと思い、お経を唱えているとは思いもしなかったという。従って言葉は言いやすいように略されて伝わった。

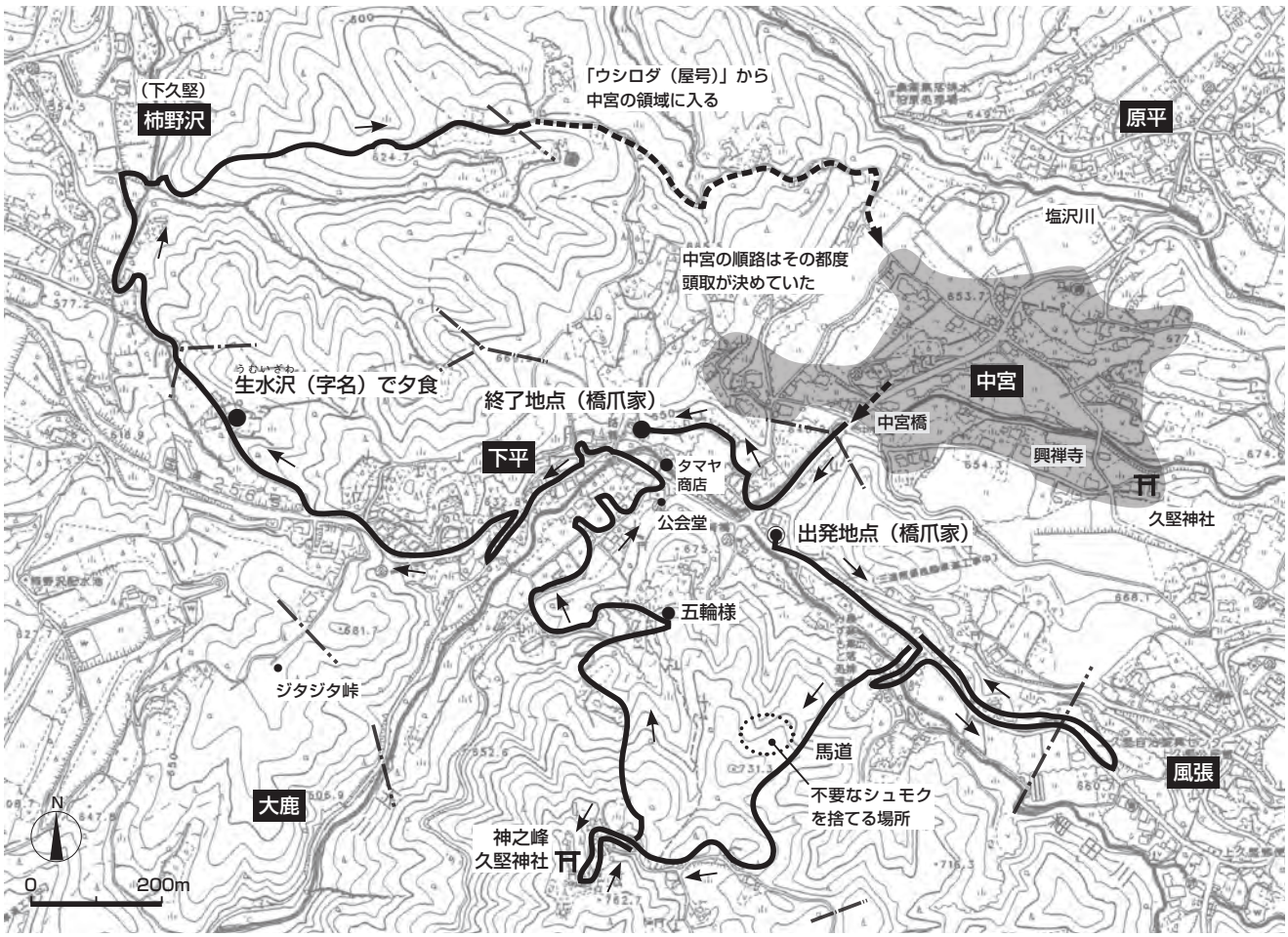
「（二）**実施状況**」で昭和三〇年代の念仏、今日の念仏、漢字で書いた念仏を比較してみる。

〔写52〕各家を回り、玄関先で念仏会を唱える

〔写53〕定められた祠や石碑で念仏を唱える（左図の22番）

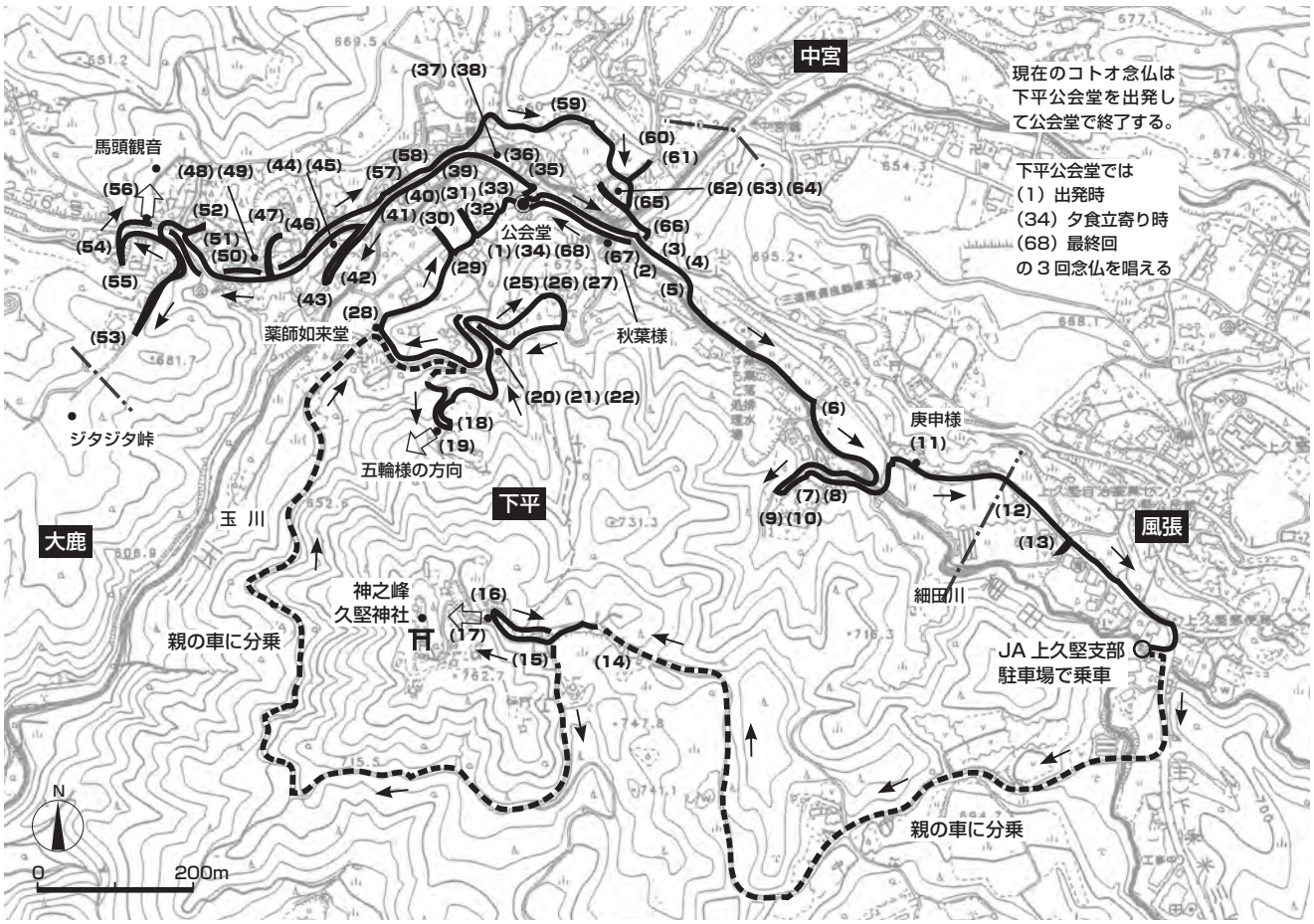
〔図 29〕昭和三五年頃のコトオ念仏の巡回コース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



〔図 30〕平成二七年のコトオ念仏の巡回コース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



【かつての風の神送り】

①下平の風の神送り（昭和三五年頃）

下平の「風の神送り」は、ジタジタ峠に置かれている笹竹二百本ほどを五、六〇人で担ぎ、途中六、七〇本を拾い集め、北の原に送る行事である。日にちは二月九日と決まっていて、「風の神」では数えの十六歳の者も参加した。昔は「風邪」の方言である「ゲイキ」から、「ゲイキの神送り」ともいった。

下平の「風の神送り」は西回りの最後で、東回りの風張の「コトの神送り」と最後に出会う。昭和二〇年代には出会うと喧嘩になった。下平は喧嘩に弱く、上級生は一目散に逃げて、低学年が取り残される。毎年そればかりが心配で、出会いの地点では耳をそばだて注意を払うし、時間をずらしたりしていた。普段、学校では風張の子供たちとも仲が良かったのに、神送りになると恐怖心が湧くのは、子供ながらに不思議であったという。

北の原では念仏をあげ、振り返らずに急いで帰る。戻るとそのまま流れ解散になった。子供が数人になってから、軽トラックで運ぶようになった。

②「送り神」を作る

笹竹のことを「送り神」と呼んだが、名前は不明という人も多かった。竹は「マンダケ」と呼んでいるが、ハチクなどの細い竹類が使われていた。昭和三〇年代は二～二・五メートル程の高さで、中折紙で短冊を作り吊るす。短冊には「午　申」が多かった。さらに家族全員のボンノクボの毛、洗米を紙にくるんで竹にしばりつけた。これは以前からやらない家もあった。「送り神」を作ると家の各部屋で振って祓って、風邪の神を乗り移らせた。それを辻に立てておくが、この時にも振り返ってはいけないと親に教えられたという。

（二）実施状況《平成二七年の二月七日（土）、九日（月）》

【コトオ念仏・平成二七年二月七日（土）】

①参加者

平成二六年六月の区総会で、区の委員とお祭り委員の有志をつのり、保存会を発足し、平成二七年は子供（二人）と大人（八人）の十人が回ることになった。なお今回は途中から大人一人が加わった。

参加者　合計十三人（食事準備を含める）

（子供）

頭取・中学一年生女子（十三歳）

小学六年生女子（十二歳）

（大人）

区長・男（六六歳）※太鼓

副区長・男（六六歳）

区の会計・男（五五歳）※鉦・集金役

区の委員・男（六〇歳）※記録

区の役員・男（七二歳）

お祭り委員・男（五二歳）

中一の父親（四二歳）

小六の父親（四三歳）

〔図31〕下平・風の神送り西回りコース図（今昔、同じコース）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔写54〕ジタジタ峠で笹竹と御神木を積み込む

住民・男（四八歳）※途中から誘われて参加
中一の母親（三八歳）※夕食・直会準備
小六の母親（四七歳）※夕食・直会準備

②日程

十五時三〇分過ぎ　集合
十六時　　公会堂前で念仏を唱え、出発する
十六時四五分　ＪＡ上久堅支所駐車場から乗用車二台に分乗して神之峰に向かう
十七時　　神之峰から栗山へ車で向かい、五輪様、台地の神仏を巡り薬師如来堂へ
十八時　　公会堂に戻り、夕食
十八時五五分　公会堂前で念仏を唱え、再出発、国道に沿って北西部を回る
二〇時二〇分　公会堂に戻り、最後の念仏（六八回目）を唱える。二二時半過ぎまで直会。

③念仏

漢字で書いた念仏、今日の念仏（カッコ付き）、下が昭和三〇年代の念仏である。

今日（こんにち）、事を申します　※日没後は「今晩、事を申します」
光明遍照　（こうみょう　へんじょう）　こうみょうへんじょう
十方世界　（じっぽう　せかいねんぶつ）　じっぽう　せかいねんぶつ
念仏衆生　（しゅじょう）　せいしくしょ〈や〉
摂取不捨　（せいしゅくしょ）　なむあみだぶつ、
南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）　なむあみだぶつ、
（なむあみだぶつ）　なむあみだぶつ。
（なむあみだぶつ）　※三・六・九回目は「だぶ」
※三回を三回繰り返し九回

〈弥陀〉願似此功徳
（みだがに　しくどく）　みだかにし　くりょうどう
平等施一切（びょうどう　せえいっさい）　むりょうどう　せえいっさい、
同発菩提心（どうはつ　ぼだいしん）　おつむだいし
往生安楽国（おうじょう　あんらくこく）　しょう〈そう〉じょ、あんらくー

※平成二七年の念仏では、頭取が「こんばん、さんはい！」と合図すると全員で「今日事を申します」と始まっていた。一番星が見えると「今晩」になる。また、平成二七年から大人が加わったため、世代によって異なる部分があった。子供たちは最後が「あんらくこく」と念仏の文字通りであった。

【風の神送り・平成二七年二月九日（月）】

①参加者　合計九人

（子供）
女子・送り神（笹竹）二人
（大人）
男・太鼓一人（区長）
男・鉦一人
男・送り神（笹竹）三人
女・送り神（笹竹）一人
男・軽トラック運転一人

②日程

十六時三〇分頃　下平公会堂集合
十六時五〇分　　ジタジタ峠で「送り神」を軽トラック（一台）に積む、御神木を確認する。
十六時五五分　　ジタジタ峠を徒歩で出発、軽トラックは後から付いてくる。辻々で「送り神」を拾い、頭取の合図で唱え言葉を歌いながら歩く
十七時二五～三〇分　原平集会所（阿弥陀堂）前で四地区集合し、北の原に向かう。
十七時四〇分　　北の原到着、一番先に「送り神」などを沢に投げる。中宮、風張が続く
十七時五〇分　　原平、風張に続いて三番目に下平が念仏を唱える。中宮が続く。そのまま、各地区に戻っていく。

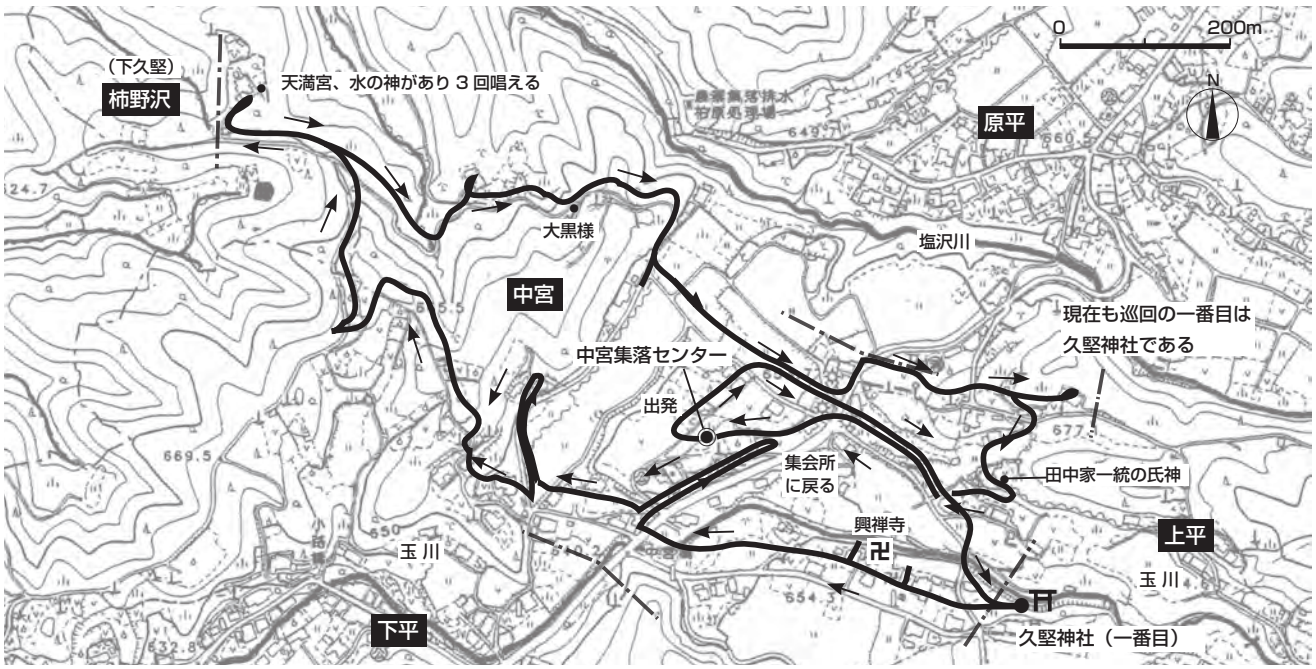
②唱え言葉（唄）※今日の子供の唄
送り神（おーくがーみ）　送（おーく）れよ
どーこまーで送（おーく）れよ
北の原（きーた）まで送（おーく）れよ

〔写55〕風の神送りの行列（下平）

〔写56〕北の原で「送り神」を沢に投げる頭取（中一女子）

〔図 32〕中宮、昭和三七年頃のコト念仏巡回コース図

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



そーりゃ

（トントントン）そりゃ（トントントン）そりゃ

（トントン、トトント、トントントン）

なお、昭和三〇年代は、一行目が「風邪（ゲイキ）の神を送れよ」「送るよ」などであった。

■飯田市上久堅（中宮）【一覧表・地図番号33】

十五、（合流）中宮、子供のコト念仏・送り神

地元の呼び方　コト念仏、送り神

行事日　コト念仏・かつては二月六日、現在は二月第一土曜日

　送り神・二月九日

行　程　コト念仏　中宮巡回（久堅神社から）

　送り神　中宮集会所から北の原

行事の特徴　かつては下平の笹竹運びも手分けして手伝っていた。コト念仏は昭和三五年から行うようになった。

話　者　斉藤寛武氏（昭和二四年生）

　桐生秀男氏（昭和三一年生）、中宮の皆さん

地区の状況　三五戸・百十二人（小学生七人、中学生二人）

（一）行事の概要

【かつてのコト念仏】

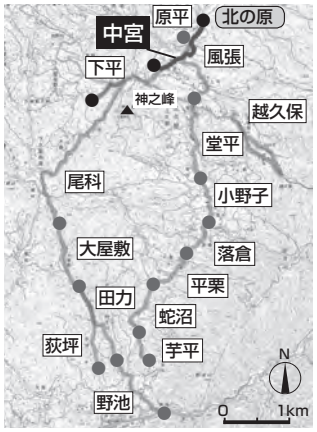
①コト念仏の参加者

コト念仏は昭和三五年に始まった。それまでは下平が中宮を回っていた。

昭和三七年頃、参加者は小学二年生から中学二年生までの男子で、長男でなくてもよかった。当初は五～六人だった。現在は小学一年生から中学二年生までで、男女いずれでもよい。昭和四二年頃から女子も参加するようになり十人以上になった。

そして中学二年生の中で最も早く生まれた者が頭取を務める。頭取は練習日を決めたり、巡回して頂いた金銭の分配をなど一切を決めることになっている。

現在、一年生は付いて歩くだけで、二年生から念仏を唱える。



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

〔図33〕コトの神送り・コースガイド図（中宮）

〔写57〕中宮のコト念仏、久堅神社にて

〔写58〕中宮のコト念仏、各家の玄関先で念仏を唱える

原則として一年生は親が同行することになっている。また親も加わって段取り等を手伝っている。

②コト念仏のやり方

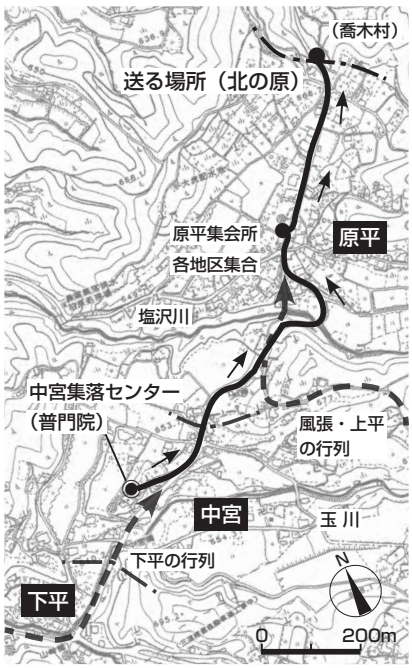
中宮集落センターを出発して、一番目に久堅神社に向かい、本殿と繭玉様に念仏を唱えた。越久保の白山神社の方向に念仏を唱えることもあるという。そして各家を回るが、屋敷神を祀っているところでは、それぞれに念仏を唱える。一軒で三回唱える家もある。廃屋は行わない。

行列は頭取の太鼓が先頭で、二番めに鉦、三番目に集金係が並ぶ。以前は鉦が直径三〇センチ近くあり、重さも十数キロで一人では担げず、棒を渡して二人で担いでいた。現在は小さくなり、一人で持てるようになった。

昭和三七年頃は、夜八時半頃念仏が終わり集会所に戻ると、親たちがストーブを焚き、アルミの弁当箱に入れたボタモチを温めてお茶を入れて待っていた。

念仏で巡回すると各家は、子供たちにお布施を渡す。かつては菓子などのこともあったが、現在は金銭である。これは最後に参加者で平等に分けるが、小銭は頭取から順番に取って最後の一円まで分ける。

〔図34〕中宮、送り神コース図（現在）



（飯田市地形図一万分の一に加筆）

【かつての送り神】

①送り神の変化

送り神は昭和三五年以前も行っていた。

二月九日に、子供たちが送り神を行った。千代と龍江の笹竹を下平が担いでくるので、中宮はそれを待って、下平を手伝いながら後ろを歩き、北の原に向かっていた。現在は子供の人数が少なく、下平も軽トラックが同行するようになり、中宮は自分の地区内の竹だけを集めて歩くようになった。

十六時半に出発して十七時に北の原に着いていたが、近年は東回りの風張・上平、西回りの下平、原平、そして中宮が、原平の集会所に集合してから北の原に向かうようになっている。北の原では各地区が、沢に笹を投げ入れ、それから順番に投げ入れた笹竹の前に整列して念仏を唱える。その順番は決められていない。原平の集会所まで歩くときは、唱え言葉を言う。

②笹竹について

笹竹に決められた名称はないが、「竹」「笹」という。マダケ、ハチクの細いものやマンダケ（笹の一種）を使い、一・五～一・八メートルに仕上げる。そこに中折紙を四枚に切った大きさで短冊を作り、端をこよりにして「午」「申」など一字ずつ書き込み、十枚程取り付ける。さらにボンノクボの毛と米をおひねりにして、笹にしばりつける。できた笹は辻に立てかけておくが、出す前に室内を祓うことはしないという。

（二）実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（月）》

【平成二七年二月七日（土）コト念仏】

①参加者　合計九人（子供八人、大人一人）

中学二年・女　※太鼓、頭取
小学五年・女　※鉦
小学四年・女　※集金
小学四年・男
小学三年・女
小学二年・男
小学一年・男、女

〔写59〕屋敷神で念仏を唱える

〔写60〕中宮、送り神の行列

父親一人

②日程

十七時過ぎ　中宮集落センター（普門院）出発
十七時二〇分過ぎ　久堅神社で念仏
十七時三〇分　各家の巡回に向かう
二〇時三〇分頃　巡回終了

③念仏

現在の念仏は、臨済宗・興禅寺（こうぜんじ）から教わったものであるが小学校低学年もいるので、ひらがなで上級生が教えた。二週間毎日練習した。現在は二回ぐらい練習する。

念仏の出だしの言葉は、宵の明星である金星が出るまでは「今日」で、金星が出たら「今晩」になる。ひらがなの部分が子供たちの唱えている言葉である。

南無〇〇様、今日（こんにち）（今晩）さんし（※頭取だけがいう）
今日（今晩）事を申します
こうみょう　へんじょうー　光明遍照
じっぽー　せかーいねんぶつ　十方世界
しゅじょう　せっしゃ　念仏衆生　摂取不捨
なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶ
（三回を三度、九回繰り返す）南無阿弥陀仏
みだがに　しくどく　弥陀願以此功徳
びょうどう　せいいっさい　平等施一切
どうほつぼだいしん　同発菩提心
おうじょう　あんらっこくー　往生安楽国

※最初の「南無〇〇様」は祠、屋敷神で念仏を唱える時に、その神様の名前を当てはめて唱える。一般の家では「今日さんし」から始める。

【平成二七年二月七日（月）送り神】

①参加者　合計九人
子供・事念仏と同じ八人
大人・中二頭取の母親

②日程

送り神は現在、中宮集落センターから原平集会所を経由して北の原に送る。

十七時頃　中宮集落センター（普門院）出発。
途中、二箇所で笹竹を拾い、合計九本を送る。
十七時三〇分　原平集会所に立ち寄り、下平に続いて二番めに北の原に向かう。
十七時四三分　北の原に笹竹を投げる。
十七時五二分　原平、風張、下平に続いて念仏を唱え、振り向かずに帰っていく。

③唱え言葉

送り神ー、さんし（※頭取のみがいう号令）
送り神（おーくがーみ）　送れ（おーく）よ
なんの神（かーみ）　送れ（おーく）よ（※この一節は現在は唱えない）
どこまーで　送れ（おーく）よ
北の原（きーた）まで　送れ（おーく）よ
そうりゃ（トントントン）そりゃ（トントントン）
そりゃ（トントン、トトントト、トントントン）

念仏を唱えると鉦と太鼓のバチは捨てていた。毎年自作するもので、バチにも神様が乗るというので捨てたという。近年は既成品の太鼓のバチを用いている。鉦のシュモクは木の枝だった。

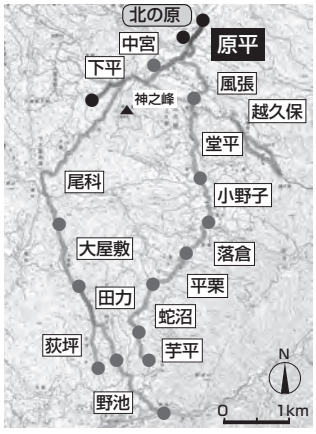
■飯田市上久堅（原平）【一覧表・地図番号34】

十六、（合流）原平（はらだいら）、子供のコト念仏・送り神

地元の呼び方　コト念仏、送り神、コトの神送り、風の神送り
行事日　コト念仏　二月七日（現在は二月の第一土曜日）
送り神　二月九日
行　程　コト念仏　地区内を巡回
送り神　原平集会所から北の原
近年は東回り・西回りルートの地区が原平集会所に集合し、北の原に向かう。
話　者　長谷部三弘氏（昭和七年生）、原平の皆さん

〔写61〕北の原、笹竹を送り、念仏を唱える（中宮）

〔写62〕鉦のシュモクは木の枝（中宮）



〔図35〕コトの神送り・コースガイド図（原平）
（飯田市地形図一万分の一に加筆）

地区の状況　六六戸

（原平上組が三三戸、下組が三三戸）

各組に一人ずつの常会長がいて、上下とも、さらに五組の隣組に分かれている。集会所は上下で一箇所である。

原平は小笠原、内山、長谷部姓が主で、一統ごとに神社（祠）がある。小笠原は大山祇、長谷部は新宮八幡、内山は六社神社である。

（一）行事の概要

【かつてのコト念仏】

①参加者と役割

かつては、数えの十歳から十五歳までの男子が参加できた。十五歳が頭取と呼ばれ、行事の一切を仕切ることになるが、複数名いる場合、早生まれは頭取になれないとされていた。また、兄弟がいて長男が参加していると次男は入れなかった。年子の場合、次男は一回しか参加できず「頭取新兵」と呼ばれた。新しく入った子供を「新兵」と呼び、買い物などやらされた。

行列では鉦、太鼓は頭取が叩き、集金係とその配分も頭取の役目であった。但し太鼓を担ぐのは二番めの十四歳の者の役目だった。昭和十～二〇年代は一学年に三～五人と複数の子供がいて、六学年全体で十五～二五人の参加者であった。今日に至るまで、原平は子供の多い地区であるという。

それでも昭和四〇年代以降は子供が減り始め、小学二年生から中学二年生が該当となり、兄弟の参加、続いて女子の参加も認められた。

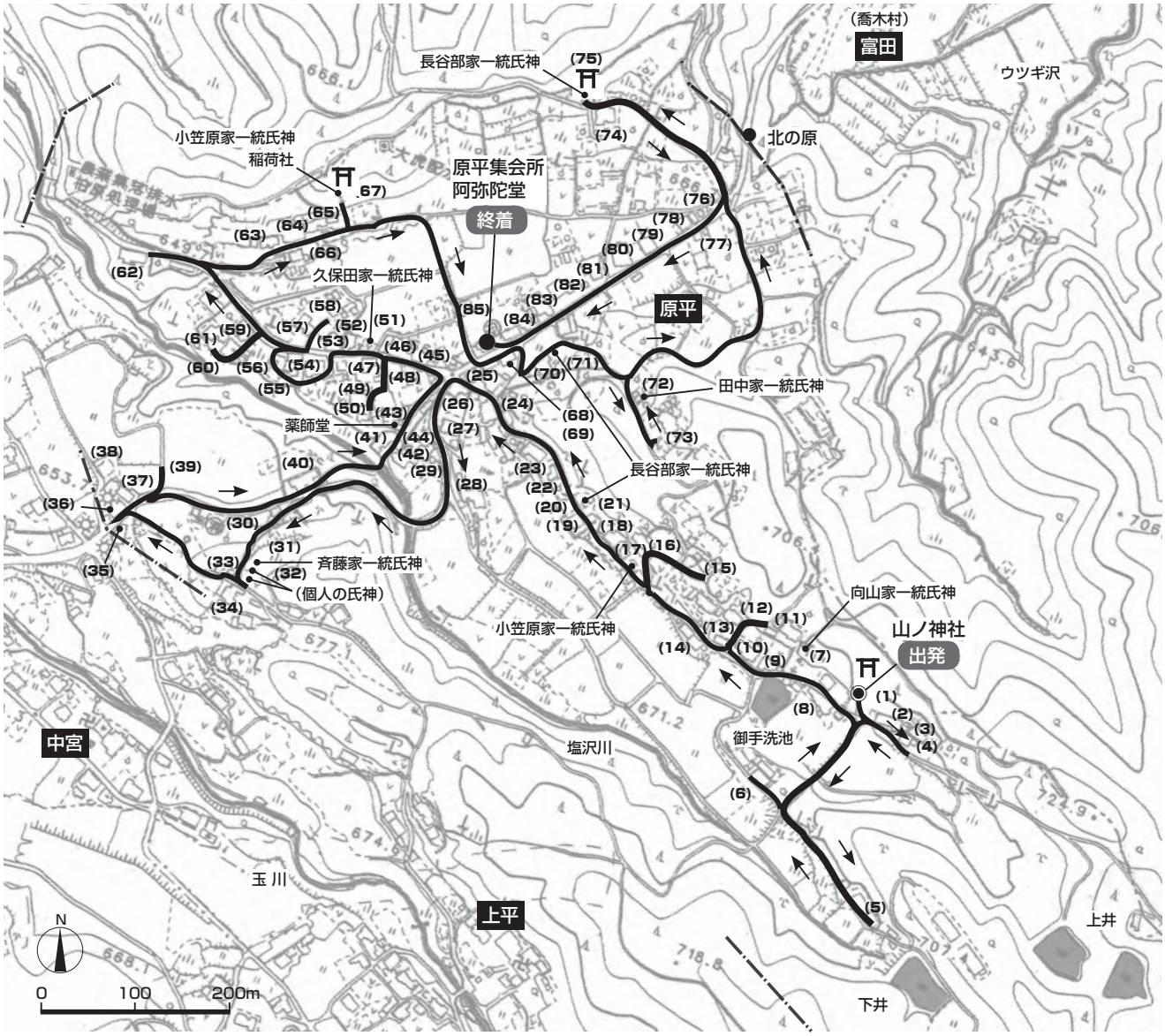
なお、平成五年三月の地元広報（風土舎通信）をみると、参加者は男子で女子の参加は後のことであるが、開催日は既に二月の第一土曜日となっていた。

②練習

小正月があけると念仏の練習を山の神社の社務所で、一週間程行った。新兵（数えの十歳）は一人ずつ唱えさせられた。締太鼓を締め直し、鉦と太鼓のバチを作った。バチは虫送りまで保管し虫送りが終わってから捨てた。

〔図 36〕原平のコト念仏巡回コース（平成二七年）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）



〔図 37〕原平の送り神行列のコース（平成二七年）

（飯田市地形図一万分の一に加筆）

②戦前・戦後のコト念仏

念仏の始まりの言葉は、日没前は「今日」で始まり、日が落ちると「今晩」になる。途中雪の中を道無き道を行くのが楽しかった。

コースの終盤で集落の中央の交差点に差し掛かるが、一角に家名（えな）・酒屋（斉藤家）があり、ここを通る時にコトボタモチを一つか二つずつ配ってくれた。小豆ときな粉の二種類だった。今でもコト念仏の日にコトボタモチを作る家はある。春彼岸（三月二一日、阿弥陀堂の祭り）には虫送りを行い団子を作る。

最後は公民館（阿弥陀堂）でコタツで暖を取り、各家でもらってきたお布施を分ける。

分け方は総額を人数で割り算するのではなく、硬貨ごとに分けてから配った。十銭を配り終えたら、五銭を配るというやり方で、余る分は阿弥陀様の賽銭とした。戦時中は軍事献金とした。

大正から昭和初めの世代は、コト念仏の時は、出発地点の山の神神社の手水舎で歯を清め、念仏の最中は、食べ物を一切口にしないといわれていた。話者の長谷部三弘氏が参加した戦中・戦後期は途中でボタモチを食べていたので、一つ前の世代である。しかしこの頃も襟巻き・手袋は巡回中禁止されていたという。さらに「念仏を唱える時には必ず帽子をとる。懐中電灯の明かりを消す。」などと決まっていた（注6）。

【かつての送り神】

①東回りと西回りの手助け

原平を通過する笹竹は、かつては大量で、ここまで来ると一つの集落の子供だけでは持ちきれなくなっていた。東回りの風張・上平か、西回りの下平か、早く到着した方の行列に合流して一緒に送っていくという形であった。後に四集落が原平に集合して、そろって北の原に向かうというやり方になった。

②笹竹について

原平は現在、笹竹を出していない。『上久堅の民俗』（一九五頁参照）によると「家から送り竹が出た昭和二五年頃までは、それを担いで富田境まで送った」とあり、「竹は小正月のアワンボーの竹を使ったという」とある。

笹竹の名称はわからないという。長谷部三弘氏は、ボンノクボの毛を切って和紙に包みくくりつけたこと、短冊に「午」「丑」など書き、五～六枚ほど吊るした記憶はあるという。普通の竹の細い先も使っていたという。

原平では集落の中央の辻に立て、念仏を行った子供たちなど希望者が参加して、北の原まで運んだ。参加者に対して事念仏ほどの制限はなかった。原平の竹は十本位、多くて二〇本だった。

かつては他の地区の竹の本数は多く、行列が近づいてくるとざーっと音を立て、竹やぶが動いて来るようだったという。

（二）実施状況《平成二七年二月七日（土）、九日（月）》

【事念仏・平成二七年二月七日（土）】

①参加者

合計七人

中学二年・男　鉦
小学六年・女　太鼓
小学五年・男
小学三年・男
小学三年・女
小学三年・女
小学二年・女　集金

〔写63〕原平、コト念仏の巡回は山ノ神社から出発

〔写64〕各家を巡回して念仏をあげる

（注6）飯田市美術博物館編集・発行『久堅の民俗』二〇〇六年　一八六頁

②日程

十三時五〇分過ぎ　集落奥の山の神社に子供たちが親に送られて集合

十五時　山の神社（石段上）で念仏を唱えてから、集落を巡回

（コース図は聞き取りと子供たちの手持ち地図による）

最後の阿弥陀堂で八五回目の念仏を行い終了する

③現在の念仏

今日（今晩）事申します

こうみょうへんじょう　じっぽうせかい　ねんぶつ

光明遍照　十方世界

しゅじょう　せっしゅ　ふしゃ　念仏　衆生摂取不捨

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　なむあみだぶつ

（三回を三度、九回唱える）　南無阿彌陀佛

みだがんにし　くどく　弥陀願似此功徳

みょうどうせいいっさい　明道誠一切道発

どうはつ　ぼだいしん　菩提心　清浄安楽

しん〈せい〉じょう　あんらく

話者の長谷部三弘氏によると、かつては「摂取不捨　せっしゅふしゃ」の部分がなかったという。隣の中宮、さらに下平もかつての念仏を調査するとこの部分が、なかば略されている。

【送り神・平成二七年二月九日（月）】

現在の子供たちは公会堂のところで他の地区を待ち、他の地区と集合し、鉦と太鼓だけを持って、北の原に向かう。北の原では念仏を唱えてから振り向かずに帰り解散する。

①参加者

子供七人（事念仏と同じ）

大人三人（親の付添い）

②日程

十七時三〇分　原平集会所出発、北の原に向かう

行列の順番は下平→中宮→原平→風張

十七時四〇分　笹竹を投げる、下平→中宮→風張

（原平は笹竹なし）

十七時四五分　四地区が順番に念仏を唱える

順番は原平→風張→下平→中宮

十七時五〇分　後ろを振り返らずに帰っていく

③唱え言葉

送り神（おーくがーみ）　送れ（おーく）よ

どこまで　送れ（おーく）よ

北の原（きーた）まで　送れ（おーく）よ、

そうりゃ（チンチン、トントン）

〔写66〕北の原では整列して、一番最初に念仏を唱えた

〔写65〕原平の送り神、現在、笹竹は出さない

〔写67〕振り返らずに帰る

〔写 68〕２月８日・午前 10：40　蛇沼の送り場、芋平のコトの神送り（東回り）参加者が、振り向かずに帰っていく

〔写 69〕２月９日・午前８：30　尾科の送り場、（西回り）大屋敷が送ってから１泊、笹竹にも御神木にも雪が積もった